動乱の男たち

池波正太郎

ゆまに出版

動乱の男たち

池波正太郎

ゆまにて出版

池波正太郎

動乱の男たち

ゆまにて 1000円 0095-000138-8638

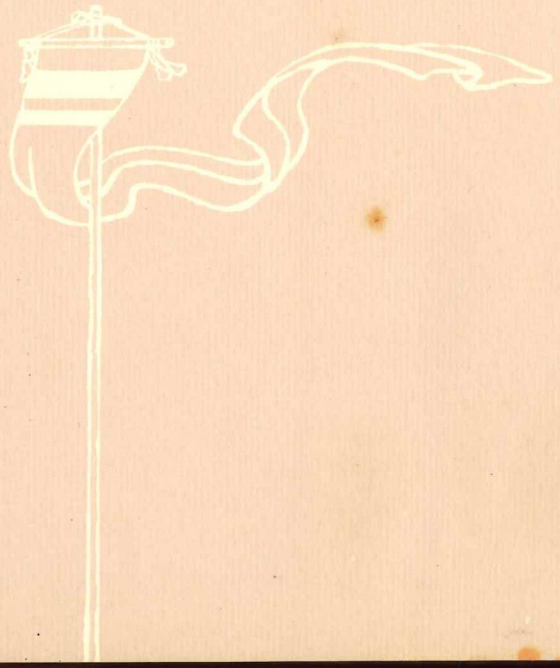
池波正太郎

動乱の男たち

ゆまに書房

動乱の男たち

池波正太郎



ゆまに書房

動乱の男たち■目次

一代の栄光——明智家　7
真田幸村　26
間諜——蜂谷与助　63
関ヶ原古戦場を往く　91
高杉晋作　104
新選組史蹟を歩く　125
新選組敗走記　140
聞書　永倉新八　158
壮烈なる孤忠——松平容保　169
敗れたり彰義隊——上野戦争　193
動乱の詩人——西郷隆盛　216
明治の剣聖——山田次朗吉　229

動乱の男たち

装幀　北山丈夫

一代の栄光——明智家

明智光秀が、織田信長麾下の武将として丹波を経略したとき、八上城へ立てこもる波多野秀治兄弟の抵抗に手をやき、

「わが老母を人質として、そちらの城へ入れようから、心を安んじて城を明け渡し、右大臣（信長）に従うがよい」

ついに和談を申し入れ、波多野兄弟もこれを承知し、光秀の老母と引替えに城を出て信長のいる安土へやって来たところ、信長はいささかの容赦もなく、兄弟を磔にしてしまったという。

だから当然、光秀の母も波多野方の手にかかり、光秀の見ている前で殺されてしまい、光秀は、この信長のとった過激な処置に対する怨恨をふかく胸に蔵し、これが後に、本能寺における叛逆の素因の一つになった……というのは通説だそうな。

信ずべき史書には、光秀の老母の記述などが全く出ていないからである。

七年も前のことだが、筆者が芝居の脚本を書いていたころ、松竹の依頼で「敵は本能寺にあり」というシナリオを書いたことがある。

亡くなった大曾根辰保監督が松本幸四郎の光秀で撮った映画だったが、このときも、光秀の老

母を出すか出さぬかで、いろいろもめたが、芝居としてはおいしいところなのだし、どうも光秀同情のテーマでやることだし、

「やっぱり、おふくろを出そうや」

と、いうことになった。

このとき、いろいろ調べて見たが、どうも光秀のおふくろさまの人質はなかったものと見てよい。

高柳光寿博士は、その著「本能寺の変」に於て「これらの話は、みな俗書・悪書の類のいうところで全く信用のできない話である」と、いわれている。

光秀が主人を出せば家来たちの命は助けようと、ひそかに調略を行なったというのである。

ともかく、八上城が落ちたころから三年間は、信長も天下制覇を目前にして破竹のように勢力を伸張し、天正十年（一五八二）春には武田勝頼を討滅して、いよいよ中国征討に向うことになった。

武田を討って甲斐から安土へ戻った織田信長は、一息する間もなく備中・高松城を包囲している羽柴秀吉をたすけ、一挙に中国を平定すべく、安土を発して京へ入った。

先発を命じられた明智光秀が、突如、京都・本能寺の宿所に信長を襲ってこれを害したのは六月二日の未明であった。

そして早くも十三日には、疾風のごとく中国から引返した秀吉の軍に破れ、光秀は近江へ逃れ

んとして小栗栖の竹藪の中で土民の槍に刺されて死ぬのである。

営々と築き上げて来た戦国の武将としての地位も人生も、明智光秀は、この夢魔のような十五日間にすべてを失ってしまったのだ。

だが、織田信長という偉大な人物を殺したことによって、光秀の名は不朽のものとなった。

もしも光秀が、どこまでも信長の家臣として忠実に歩みつづけていたなら、信長は尚も十年は生きて天下に号令し、従って秀吉や家康にも影響は甚大であり、時代の様相は別のものとなって展開したろう。そして光秀はと考えて来ると、また面白い。おそらく彼は忠実な一大名として、信長や秀吉のために、表にはあらわれない仕事に黙々とはたらきつづけ、後代、映画の主人公になるような足跡を歴史に残してはいなかったに違いない。

明智光秀の家系については種々の説がある。

太田亮博士によると——。

明智氏は、美濃国・可児郡・明知村より起る。この地は中古、石清水領・明知庄のあったところで、明智氏には土岐・木田の二氏族から出ているが、光秀の家は前者土岐氏の支流である、という。

美濃国・明知は、岐阜市の東方約十里にあり、多治見・美濃太田間の「太多線」広見駅から名鉄に乗換え約十分で御嵩（みたけ）町へ着くが、この近くの顔戸（ごうど）というところがそれである。

〔尊卑分脈〕によれば――。

源頼光七世孫・土岐光行――光定――頼貞――頼基――頼重（明知彦九郎と号す）とあって、これが明智氏の祖ということになる。

また〔土岐系図〕によると――。

源頼貞から頼清――頼兼となり、この頼兼が明知二郎と号している。

また〔新撰美濃志〕によれば――。

明知彦九郎頼重は土岐五郎頼基の子で、美濃国・土岐郡・明知郷を領し、頼重はじめて明知と号し、その子明知十郎頼篤から、国篤――頼秋――頼秀――頼弘――頼定――頼尚――頼典――光隆とつづき、そして光秀につらなる。

そしてさらに、これは光秀の家系として一般に用いられているものだが――。

源頼光――光信――光行（中略）明智七代・明智十兵衛光継とあり、その子光綱（下野守）の子が光秀になっている。

このころの戦国大名たちの家系についてはここにのべるまでもあるまいが、どちらにしても正確は期しがたいものが多い。

光秀の生いたちにしてもそうだ。

或いは若狭国の刀鍛冶の子であったともいい、美濃・土岐郡の桶屋の子であったともいう。

だが、明智光秀という武将の人柄や教養という点から押して見て、彼が明知郷の領主の子として生まれたという説をとっておきたい。

稲葉山城主の斎藤道三が、弘治元年（一五五五）に息・義竜と争い、翌二年二月に戦死をとげたとき、明智勢は道三方に味方し、落城と共に光秀は逃れ、以後、諸国を流浪・遍歴することになった。

光秀が、永禄の末ごろに、朝倉義景の下に庇護され、さらに織田信長へ仕えるようになるまでの約十年ほどは、足跡不明であるといってよい。

このころの信長は、徳川家康と手をむすび関東の北条、甲斐の武田、越後の上杉などその大勢力を後手に押えつつ、養父・斎藤道三の居城・稲葉山へ入って、これを岐阜と命名し周辺の国々の経営に、すさまじいほどの精力的なうごきを見せていた。

天下人となるためには、京をおさめ、皇室の安泰をはからねばならぬ。

上洛は戦国大名の最後の目標であったが、信長はこの点、もっとも有利な近距離に在った。

当時の足利将軍義昭は、名のみの将軍であって、諸方の大名の下へ身を寄せては援けを乞うありさまなのである。

信長は先ず将軍を援けて天下を平定するというかたちのもとに、皇室とも関係をむすんだ。

岐阜と京都の間に、または将軍と信長との間に、明智光秀が果した外交的な活躍は、かなり目ざましいものがあったといわれている。

「天下は信長のものだ」

と、光秀は見きわめをつけていたのであろう。

将軍・義昭は、その後、信長の抬頭ぶりの激しさを見ると、中国の毛利氏をはじめ近江の浅井、朝倉氏などとも手をむすんで信長に反抗するようになる。

義昭は、武田信玄にも通じて、信長の後方をおびやかそうとしたり、さらに、三好、松永氏などと同盟し、本願寺とも通じ、しきりに信長の勢力を崩そうとした。

天正元年（一五七三）四月——。

信長は、柴田勝家、細川藤孝、荒木村重などに命じて京へ入り、義昭が入っている二条城を包囲した。

このとき、明智光秀も一武将として参加している。

将軍は結局、天皇に泣きつき、天皇は双方の間に入って調停されたが、結局は将軍義昭の無条件降伏ということになった。

かくて義昭は追放され、室町幕府の残照は全く消滅する。

また、この年には英雄・武田信玄が病歿したし、織田信長にとっては、まことにめでたい年であったといえよう。

このころ、明智光秀は信長から近江国の内十万石をあたえられ、坂本の城主となっている。

牢人時代の光秀については不明なのだが、そのころに蓄積した彼の武人としての教養は衆にすぐれたものであったらしい。だからこそ、信長は惜しむところなく光秀を抜擢し、その功にむく

いたのだ。

信長は、役にも立たぬものを家来にしておくような生ぬるい性格ではない。

いや、昨日まで役に立っていても、今日は無用のものと知れば容赦なく、これを打捨ててかえり見ないであろう。

尾張の一城主の子と生まれて、秀吉・家康の天下平定の土台をきずいた信長である。桶狭間に今川の大軍を破った豪胆機敏な若き日の彼の性格は中年になって尚も強烈なものとなり、目ざす理想に向って猛然と進みつづけた。

役に立たぬものなら、たとえ我子でも許さぬ信長なのだから、これに仕えて出世をするということが、いかに瞬時の油断もゆるされぬ活動を要求されることか——。

明智光秀にとっても必死の数年間であったろう。

光秀は歌をよむし詩も詠じ、茶道にも通じている。

それでいて戦さをさせても相当にやれる。

信長は、光秀と秀吉という二つの車輪をたくみにつかい、思うさま活躍せしめたようだ。

天正元年七月——。

光秀は従五位下・日向守に任ぜられ、信長の推輓（すいばん）により朝廷から（惟任（これとう））の姓をさずけられている。

ともかく織田信長は、

「光秀は掘り出しものじゃ」

と、寵遇ただならぬものがあったし、光秀もまた懸命の忠義をつくしたのだ。

さて——ここで光秀の丹波平定にもどる。

八上城攻略成ると、あとはスムーズに諸方の城も落ち、信長も大よろこびで、

「丹波平定は、すべて日向守のはたらきによるものである」

と、ほめたたえ、近江十万石に合せて丹波をあたえた。

このとき、明智光秀は五十二歳になっている。

翌年には永い間、手をやいていた本願寺との講和もととのい、本願寺光佐は摂津・石山（大阪）を退城して行った。

一方では、徳川家康が信玄亡き後の武田勢を圧迫しつつあるし、秀吉を差し向けてある中国方面の戦況も有利に展開しつつある。

信長は、

「もう一息——」

と、思ったことである。

天正十年（一五八二）春——。

織田・徳川の聯合軍が甲州に攻め入った。

ここに武田氏は滅亡する。

本願寺といい武田といい、永年にわたって信長を苦しめていた大敵の息の根が一度に止ったのだ。

残るは、中国の毛利氏のみであるといってよい。

中国を平定すれば、信長の勢力は京都を中心にして日本の中央にゆるぎないものとなり関東以北や九州の大名たちは必然、従属せざるを得ない。

信長は、意気揚々と甲州から安土の居城へ凱旋をした。

これが四月の末である。

羽柴秀吉は備中・高松城を包囲していたが、「右大臣様おんみずから御出馬下されたし」と、いってよこした。

高松城には清水宗治が入っており、秀吉の水攻めにも屈せず、しかも毛利輝元、小早川隆景、吉川元春など毛利一族が大軍を発して秀吉の後面をおびやかしている。

さすがの秀吉も音をあげたらしい。

「猿めが泣き出したそうな。よし、出て行ってやろう」

信長は莞爾として中国出動の命を下した。

この際、一挙に毛利勢を破砕してしまうつもりであった。

ちょうど、徳川家康が安土へ遊びに来て、信長は、家康の甲州攻めの功労をふかくねぎらい、

家康の饗応役として、明智光秀をあたらせた。

光秀が、この饗応役に失敗して、信長の激怒をよび、頭をなぐりつけられたなどという挿話は、すべて、光秀の怨恨説にむすびつけたもので、信ずるに足らぬということになっている。

しかし接待役を免ぜられ、ただちに中国出陣を命ぜられたことは確かだ。

これが五月十七日である。

これから約半月後に、信長は光秀の叛逆にあうわけだが、この半月の間に光秀の胸のうちに芽生え、はぐくまれた謀叛の決意については、文学の上において、すでに種々な解釈がなされている。

一に怨恨説。

二に、ライバル秀吉に対処するため、絶好の機を得たいま、信長を殺して天下をつかみ秀吉を屈服させてしまおうとしたこと。

三に、永い間、胸の中にひそんでいた天下制覇の夢が突如かたちをなして行動を呼んだこと。

四に、一、二、三のすべてが一緒になって光秀に決意をさせたこと。

文学上の解釈は自由であるが、ともかく、中国出陣の命をうけて、光秀が坂本の城へ帰ったときには、彼も別に謀叛をするつもりはなかったに違いない。

坂本から亀山の城へ彼が移ったのは五月二十六日である。

十七日から二十六日までの約十日間に、光秀は坂本にいて出陣の準備に多忙をきわめたことと

思われる。

坂本から安土までは琵琶湖の岸辺を通って約十余里の行程だから、光秀も何度か騎乗の士を安土へ差し向け、出陣の打合せを行なったと見てよい。

むろん、信長からの指令もとどけられたろう。

信長が、わずかな供廻りをつれたのみで、先ず京へ入り本能寺へ泊し、諸将の集結と歩調を合せて出陣することも、光秀の耳へ入った。

二十六日に亀山へ入った光秀は、翌二十七日に愛宕山へ登り参籠をした。

このときすでに光秀は、信長がわずか三十人ほどの供廻りを従えたのみで二十九日に京都へ入る予定を知っており、

（謀叛すべきか否か……）

に迷いつつあった。

光秀は何度も〔みくじ〕を引いたりして落ちつかぬ様子だったという。

二十八日は、愛宕山の西ノ坊へ滞在し連歌師・里村紹巴（じょうは）たちと百韻の連歌をおこなった。

このとき、光秀が、

「ときは今、あめが下しる五月かな」

と詠み、西ノ坊主（あるじ）が

「水上（みなかみ）まさる庭のまつ山」

と受け、紹巴は、

「花落つる流れの末を関とめて」

と詠んだ。

光秀物語にとって有名な場面である。

光秀は、ここで、はっきりと謀叛の心を表明している。

「あめが下しる」というのは〔天下を取ろう〕という意味だ。

西の坊や里村紹巴が、この光秀の句をうけて詠んだ句も、光秀の決意を察していたものと思われる。

ということは、光秀の謀叛が、この二人にとって突然のものではなかったということだ。

光秀もまた、心をゆるした二人に、こうした決意を句にふくめて表現したということは、それまでの信長と自分との関係を西ノ坊も紹巴も、よくよく知っていてくれたという土台があったからであろう。

「いよいよ、やるぞ」

と、光秀はいい、二人は、

「わかっております」

と、受けたのである。

光秀と信長との間には、史書にあらわれてはいない何物かが存在していたのであろう。

それも、一方的なものであった。

何故なら、信長はいささかも光秀の謀叛なぞを思っても見ず、無防備に等しい供廻りで京都へ入って行ったからだ。

このことは——愛宕山を下って亀山へ帰り、六月一日の夕刻になって突如出陣をふれ出し、

「右大臣が陣立の様子をごらん遊ばされる」

といい、全軍を亀山の東方に集結させ、光秀が五人の重臣に謀叛の事を打ちあけたときの模様を見ても知れる。

光秀の聟でもあり重臣でもある明智左馬之助光春（秀満ともいわれる）は、義父・光秀の決意をきくや、

「一度、口外をされたからには後へひかれませぬ」

と、答えた。

この光春の言葉には、実行へのおどろきはあっても、光秀の叛逆を不審と思うふくみはない。

思うに、家臣たちも光秀が信長へ対する心の推移を承知していたように思われる。

内攻的で、文武の教養もふかく、つつしみぶかく忠実な光秀の胸中には、光秀とは全く対照的な信長の激性的な鋭敏な、そして非情な性格に向けられた何物かが鬱積していたのであろう。

信長は、なるほど光秀を重く用いはしたが用い方も乱暴であり、ほめるときは思い切ってほめあげても、叱るときは知識人の光秀が耐えかねるほどの叱り方をしたのではないか。

〔太閤記〕や〔明智軍記〕その他にのせられているいくつかのエピソードは、たとえ事実ではないにしても、二人の関係をよくあらわしている。

前にのべた光秀の母の件もそうであるし、刀をつきつけたり、頭を押えてなぐりつけたり、口をきわめて罵倒したり、これでは光秀が恨むのも無理はあるまいというほどのいじめ方をしている。

こしらえた話だとしても、或る程度、信長が家来をつかうありさまがしのばれる。

内攻的な光秀だけに、

(この殿の下にいては……)

行末どうなることか——もしも自分に少しの失敗でもあったときは、どうなることか知れたものではないという不安もあったろう。

本能寺に見事信長を討ち、さらに二条御所に信長の長子・信忠を討った明智光秀の、いわゆる〔三日天下〕については、くだくだしくのべるまでもあるまい。

いま信長を討てば、そのまま信長の〔遺産〕をつかみとることが出来ると、光秀は思っていたのだろうか——。

備中にいたライバル羽柴秀吉の、あまりにも早い行動は予定にいれていなかったとしても、光秀は、みずからの政治的な工作によって諸国大名を手もとへ引きつけることが出来ると信じていたのだろうか……。

それにしては、あまりにも山崎における敗戦は、みじめなものであったといえよう。

光秀の女聟である細川忠興さえも、舅の光秀へ味方することを拒んでいる。

光秀も一応は近江を平定し、信長の居城だった安土の城へ入り、さらに秀吉の居城・長浜をおとし入れた。

けれども、今までは光秀の麾下にあった大和の筒井順慶や茨木の高山重友でさえ、光秀を裏切り、秀吉方へついたのであるから、いかに光秀が天下人の器量をそなえた人物に程遠い男であったかが知れよう。

織田信長にしても、光秀を全く問題にしていなかったことは夢にも考えたことはあるまい。

その点では、光秀が謀叛するなどということは夢にも考えたことはあるまい。

だからこそ、京都とは目と鼻の先にいる光秀の軍勢の存在を危険視することもなく、うたがうこともなく、まるで安土の居館へ入るのと同じような無防備と安心をもって本能寺に泊したのである。

信長は、光秀を信じ切っていたといってよい。

「おれあっての光秀じゃ」

と、いうことなのだ。

それにしても、信長の死を知るや電光のような速さで毛利氏と講和をむすび、あくまでも信長

の死を秘して備中から引返し、早くも十二日には、山崎に光秀の軍と戦った秀吉の天才的な軍事行動力をほめあげねばなるまい。

この秀吉の進出が、もっと遅れていたなら局面は、もっと変っていたろう。

近江を中心にして光秀の勢力もふくらんでいたろうし、それにまた光秀自身、得意の政治工作によって種々な手を打っていたに違いない。たとえ、そうなったとしても、光秀が秀吉に勝って天下をとるようになった、とは筆者には思えない。

とにかく秀吉の迅速な行動には、光秀もおどろいたことだろう。

明智、羽柴両軍の兵力は、それぞれ二万前後というところか——。

勝負は、たちまちにきまった。

十三、十四日両日とも明智軍は敗けつづけ光秀は山崎の北東にある勝竜寺城へ退いたが、

「もはや、いかぬ」

近江へ残しておいた軍勢と共に戦うつもりで、夜に入ってから脱出をした。

坂本城へ向ったわけである。

このとき、光秀は近臣六、七名を従えたのみで小雨のけむる夜更けに城をぬけ出し、羽柴軍の包囲をくぐって脱出した。

伏見・大亀谷から山越えして小栗栖へ出た。大津へ向うつもりであったが、ここで土民の襲撃をうけて倒れた。

光秀は、家臣・溝尾勝兵衛茂朝に介錯をさせ、溝尾は光秀の首を籔の中に埋めて坂本へ逃がれたという。

光秀生存説というものがある。

このことについては、本誌（歴史読本・三十八年・十月号）に、光秀の末孫といわれる明智滝郎氏が興味ふかい一文を草している。

重複はさけたいが、美濃や大阪府下に、光秀生存を裏づけるような遺跡もあって、これを明智氏が丹念にしらべあげたルポであってこれによると、光秀の影武者となったのは溝尾勝兵衛ではないか、とも思われるし、また文禄年間に書かれた『明智旧稿実録』によると、柳川某という家臣が、光秀の容貌と酷似しており、これが身代りになったと記されているそうだ。

これを書いたものが明智光春の次男・千葉春道という人だそうだから、尚、おもしろくなる。

これらの史料の真疑について、筆者はのべる力はない。

しかし、七十五歳になった老光秀が、慶長五年の関ガ原合戦に徳川方へ組してはたらき川に投じて溺死してしまったという話は、ますます面白い。

明智光秀には女三人、男二人の子がいたことになっている。

女三人のうち、一人は織田信澄の妻だ。

信澄は、信長の弟・信行の子である。本能寺の変の後、信長の三男・信孝によって殺されてい

る。

次の一人は、荒木村安の嫁に、後に三宅彌平次の妻となった。この彌平次が明智の姓をもらい明智光春となるのである。この稿では、光春としたが高柳博士及び松平年一氏の『戦国人名辞典』その他では、明智秀満となっており、高柳博士には、秀満について記したたのしい歴史随筆がある。

秀満は、本能寺襲撃後、安土城守備に任じたが、山崎の敗報をきくや、ただちに部隊をしたがえて坂本城へ入り、光秀の妻子や自分の妻などと共に城へ火を放ち、自害をした。

もう一人の女子が、細川忠興室のガラシャ夫人であって、本名を於玉(おたま)という。

光秀ほろびてのち、丹後の味土野(みとの)に押しこめられたが、やがて秀吉にゆるされ、めでたく忠興のもとへ帰った。彼女がキリシタンの洗礼をうけ、ガラシャと名乗ったのも、格別の悲劇を味わいつくした女性としてうなづけるものがある。

関ガ原のとき、石田方が、徳川家康の会津征討に加わった諸将の妻を人質にしようとしたとき、彼女は夫・忠興の後顧となるをおそれ、大坂屋敷に火を放ち、自害をした。

男子は、光慶・十治郎・自然・乙寿丸の四人があるという説と、十五郎ほか一名という説がある。

後者が正しいことは、津田博士の例証によって、あきらかであろう。

光秀の嫡子は、まだ十三歳であったというから、坂本落城のときには、義兄の明智秀満に手を

かしてもらい、死んだことと思われる。

秀吉は、十五日に光秀の首を実検した。

そして十六日には首を京都・栗田口に曝したという。

秀吉が、光秀の首を見あやまる筈はない。

とすれば、光秀生存説も成り立たないことになる。

明智光秀については、これからも正確な史料が出ないとはいえぬが、ともかく彼の前半生——ことに信長の家来となるまでのことは、よくわからぬといってよい。

詩歌に長じ、朝廷にも通じ、すぐれた武将でありながら当時の一流文化人でもあったという光秀の全貌は、まだあきらかにされてはいない。

ただし、彼のした〈謀叛〉は、まさに歴史の流れを変えさせた。

武田信玄や徳川家康や、豊臣秀吉にも出来得なかったことを、彼はやってのけた。信長という巨大な光芒を彼は一夜のうちに倒した。

みずからの腕一つで、魔神のように戦国の世の流れを変えて行った織田信長の下で、何事にもさからわず、黙々として忠義をつくしつづけて来た温厚な男が、まさに一夜のうちに、といってよいほどの変貌を見せて猛然と立ち上ったのである。

謀叛の王者明智光秀のこの変貌の底をさぐりつづけることは、興趣つきぬものがあるといえよう。

真田幸村

現代は、戦争を罪悪とする時代である。

現代の戦争は、戦いをこのむ、このまざるにかかわらず殺戮され破壊されるからだ。

だが、五百年ものむかし、戦国の武士として生きた人びとには戦争が人生であり、その心と肉体を駆使しておこなう争闘の場は、いやでも彼らの〔技能〕と〔修錬〕とを発揮せざるを得ぬ場処となったのである。

現代の戦争では、人間の心身そのものの個性的錬磨を必要としない。必要なのは感情を消滅させた科学的計算のみである。

この意味から〔戦国の武士〕たちの中に、戦場を芸術化した人びとがいたことを指摘してもよいとおもう。

これはむろん、戦火の惨状とは別のものであって、史料にのこる、これらの武士たちの躍動の中に、私どもは人間の精神と肉体の高度な発揚をながめることができる。

戦争のばからしさが、ようやく武士たちの間にさえさとられはじめ、武士たちのこころには打算が芽ばえた。

戦争がばかばかしいものだと知っていながら、この一点に双方こころがむすびつかず、いわゆる〔話合い〕によって世の中に平和をとりもどすことが出来得ぬ状態というものは、五百年のむかしから現代まで、すこしも変っていない。

真田幸村という武将は、日本の戦国時代の終末にあらわれた最後の〔戦場における芸術家〕であった。

真田家は、清和天皇の第五皇子・貞保親王から出て、滋野姓を名のったが、のちに信濃国・海野ノ庄へ住みつき、海野姓となり、真田幸村の祖父・幸隆の代に真田ノ庄へ城をかまえ、以来、真田姓を名のった。

と、これは真田家が、みずからいうところの家系である。

この真偽を問うすべもないから、この家系を信ずることにしよう。

真田幸村は、永禄十年（一五六七）に、甲府で生まれた。

そのころの甲府は、いうまでもなく武田信玄の本拠であり、幸村の父・昌幸は、そのころ武藤喜兵衛と名のり、信玄につかえていた。

祖父・幸隆は、幸村が生まれる二年前に死んでおり、真田家は長男の信綱がついだ。

父の昌幸は二男であったから、信州の本家をはなれ、武田家への忠義のしるしとして甲府へつめていたのだ。

当時の昌幸は、二十一歳の若年ながら、

「あっぱれ者である。わが甲斐の国の名門、武野の姓をあたえよう」

と、武田信玄の信頼はただならぬものがあったという。このころの信玄は上洛の希望に燃えており、諸方に転戦して国がためをおこなっていたこともあるし、昌幸はこれにしたがい、武人としての資性を大いにみとめられたのであろう。いま、高野山・成慶院にのこる〔武田二十四将の図〕の中に、大将・信玄をかこむ重臣たちに伍して、昌幸の武藤喜兵衛も胸を張ってえがかれている。

このように、信玄のひきたてを受けていた昌幸であるから、その夫人・山ノ手どのが今出川（菊亭）大納言晴季のむすめだとしても、おかしくはない。

武田信玄夫人は、三条内大臣のむすめだし、信玄の父・信虎は妾腹のむすめを菊亭晴季に嫁がせて（側室ともいう）いる。当時の公卿たちの衰弱ぶりを見れば、大納言晴季のむすめが昌幸の妻となったところでふしぎはなく、その後の今出川家と真田家との関係を見ると、なおさらに、その感をふかくする。

で……。

この昌幸夫人が菊亭晴季のむすめならば、信幸・幸村の二子は、まず、その腹から生まれたと見てもよいのだが、別に、昌幸夫人は宇田氏から出たともいい、遠山氏から出たともいう。

幸村、幼名を御弁丸といい、のちに左衛門信繁と名のった。信繁が本格のよびかたであるが、

この稿では、やはりなじみふかい真田幸村で通したい。

ところで、妙なことがある。

真田昌幸は、

「われらが家は、代々、若名に源の字をつけるならわしゆえ、長男を源太郎とすべきなれど、ちかごろ、惣領名には不吉のことが多い」

こういって、長男の信幸に源三郎とつけ、次男の幸村に源二郎とつけた。

これはおかしい。

惣領名が不吉ならば、長男が源二郎、次男が源三郎であるのが当然ではないか。

〔真武内伝〕に、こうある。

「……その昌幸公の底意は、日ごろ二男佐衛門左殿（幸村）を御寵愛ゆえ、豆州公（信幸）は御一分をもって御身をたてらるべくとの御存意と相きこえ候」

つまり、長男は別にめいもくのたつようにして家をもたせるつもりだった、というのだ。

のちに……。

真田昌幸は、本城の上田にいる自分の手もとへ二男の幸村をおき、長男には沼田の城をあたえ〔分家〕のかたちとなした。

このころの真田家の空気を見ても、昌幸が長男よりも二男を愛していたことは、かなり濃厚に感じとることができる。

こんな異説も、信州にはのこっている。

「信幸と幸村とは双生児だったのさ。しかも妾腹だよ」

真田幸村が、七歳のときに武田信玄が病死をした。

古今無双の英雄といわれた信玄が死ぬや、尾張・美濃の国々を平定した新興勢力の織田信長の抬頭ぶりはいよいよ目ざましいものとなった。

信長は、室町最後の将軍・足利義昭を放逐し、浅井・朝倉両氏と姉川に戦って、近江をも手中につかんだ。

さらに……。

幸村が九歳になった天正三年（一五七五）五月。信玄亡きのち、子の勝頼がひきいる武田軍が、織田・徳川の聯合軍と戦い、大敗を喫した。

ところは三河・長篠城外、設楽ガ原である。

織田信長が、新兵器の鉄砲を大量に仕こみ、この威力の前に、突進する武田軍は将棋倒しとなった。

この戦いには、むろん真田本家も従軍しており、家をついだ真田信綱と弟の昌輝も織田軍の銃火をあびて戦死したので、ここに武藤喜兵衛は本家をつぎ、真田昌幸となった。

武田家がほろびたとき、幸村は十六歳になっている。

ときに天正十年春——。

この年は、天下が大きく転換した年であった。

宿願の武田征討をなしとげた織田信長が、明智光秀の謀叛によって本能寺に死ぬかと思うと、羽柴秀吉が疾風のように中国の戦陣から馳けもどり、

「なんという、すばやいことをするやつじゃ」

権謀術数には自信のある真田昌幸も、信州にいて呆気にとられたほどの速さで、

「右大臣さまのかたきを討て？」

秀吉はあっという間に、山崎の合戦で明智軍をやぶり、光秀の首を得た。

織田・徳川の聯合軍が甲府へせまるのを知って、真田昌幸は武田勝頼に、

「ここではとてもささえ切れませぬ。それがし、上州・吾妻の岩櫃城へ一足先にもどり、戦仕度にかかりますれば、御館にもそちらへお移りねがいとうござる。あの城ならば数年の間は、みごとにもちこたえて見せましょう」

「たのむ」

そこで、昌幸は信州へ急行したが、その後、勝頼は小山田信茂の謀略にかかって信州行を中止し、天目山に死んだ。

主家の武田がほろびてしまっては、真田昌幸も〔一匹狼〕とならざるを得ない。

けれども、これまでの小勢力の争闘が、しだいに大勢力にふくみこまれ、その中の、もっとも

ぬきん出た実力者が、
「天下を統一しかけている」
その時代の推移について、昌幸が盲目だったわけではない。
だからこそ、最後の追いこみによって、
「わがちからをひろげのばせるだけ、のださねばならぬ」
ときに、昌幸は三十六歳のはたらきざかりであったし、猛然と立ちあがったものである。
信幸にとっても幸村にとっても、これからが武将の子としての戦歴のページをひらくことになったといってよい。

けれども、若き日の幸村や兄の信幸については、はなはだしい戦語りはのこっていない。
そのころの真田家の戦歴は、みな父の昌幸があざやかに自分のものとしてしまっている。
昌幸は、本拠の真田にある松尾（まつのお）や天白山の城を出て、近くの戸石城へ移った。
ここには前に、村上義清という強敵がいて、真田軍や武田信玄をなやませたものだが、ついに幸隆の代に真田家が城を取ってしまった。
こうした山城にかこまれた〔真田の庄〕のおもかげは、いまも尚、その匂いを色濃くとどめていておもしろい。
長野県・上田市から北東へ三里ほど行くと、真田父子が暮していた城や屋敷や、菩提寺のあと

を見ることができる。
天白山のふもとに〔御屋敷跡〕とよばれるところがある。
いまは小さな神社の境内になっていて、小深い林がこんもりと、真田屋敷の跡をかくしている。
ここには、真田信綱が住んでいたそうだが、昌幸も真田家をついで帰って来ると、この屋敷をたびたび利用したらしい。
本妻の山ノ手どのにかくして、そっと妾をおいていたのだそうで、
「昌幸公がね、城をおりて、あわてくさって馬にのってね、この屋敷にいるお妾に逢いに来たんですよ」
と、いまでも上田の人は見てきたようなことをいう。
真田昌幸の進出は、
「先ず、上田へ城をきずいて入りたい」
そのことからはじめられた。
すでに、昌幸は関東の北条氏邦の圧迫とすさまじい戦闘をくり返しつつ、上州の沼田城を手に入れていた。
北条氏もそうだが、越後の上杉氏も依然、大勢力をほこり、真田を押しつぶそうとする。
「なんとしても沼田の城は、わがものとしておきたい」
これが昌幸の熱望である。

なぜなら、上州一帯の地がためをしておかなくては、信州の本拠があぶないからだ。
「武田家をほろぼした徳川にあたまを下げるのはいやなことだが……」
いいつつ、昌幸は徳川家康にしたがうことにした。
なんといっても徳川の実力のすばらしさは、このころになるとだれの目にも明確なものとなってきている。北条や上杉と対応するためにも、これは避けることのできぬ現実であった。
「上田へ城をきずいてよろし」
と、家康のゆるしが出ると、昌幸は、すぐさま上田築城にとりかかった。
千曲川の尼ガ淵にのぞむ断崖上の城は、
「この城ならば、秀吉や家康の大軍が攻めよせてこようとも、わしは見事にふせぎとめて見せるわ」
と、昌幸自慢の城が出来上った。
「源三郎も源二郎も、鋤をとれ。土をはこべ」
昌幸がいい、父子がそろって家来や人夫たちと共に泥まみれになり、城づくりにはたらいたという。
真田昌幸の放言は嘘ではなかった。
上田城が出来て、まる二年目の天正十三年八月に、はからずも昌幸は、この城へ徳川軍を迎え撃つことになった。

原因は、徳川家康が、
「沼田城を北条へ返してやれ」
と、いってきたからである。
家康は前年に秀吉と小牧・長久手に戦っていたし、北条氏と手をむすぶ必要があった。北条では「沼田を返すようにはからってくれればちからを合せよう」というので、この所置となったのだ。
「何をいうか!!」
真田昌幸は、家康の命令をきこうともせず、さっそく今度は上杉景勝と手をむすび、北条・徳川へ対抗するかまえを見せる。
十九歳になっていた真田幸村が、上杉の居城春日山へ伺候したのは、このときである。
「時を見ては敵となったり味方となったり、どうも真田には心をゆるせぬ」
と、上杉景勝は顔をしかめたが、やって来た幸村を見ると、ひと目で気に入り、
「若年にしては、まことに温厚にして威そなわり、見るからにたのもしきせがれじゃ」
と、ほれこんでしまった。
さて、徳川家康は、
「このままにしておいては、真田め、どこまでつけあがるやも知れぬ。討て!!」
命をくだした。
前年、秀吉と戦って痛撃をあたえ、

「さすがは徳川どのじゃ」
天下の評判を得ているだけに、家康も、
「わしが出て行くまでもあるまい」
大きいところを見せ、大久保忠世、鳥居元忠などに約一万の軍をあたえて上田へ進発せしめた。
このとき、幸村は春日山城から一度上田へ帰り、あらためて〔人質〕となって、上杉方の海津城へおもむいていたから、彼の戦歴にはなるまいが……。
とにかく、一万の徳川軍を迎えた真田勢は約三千。城へ攻めかける敵をさんざんになやませ、閏八月二日の決戦になると、
「源三郎たのむぞよ」
昌幸の命をうけた信幸が手勢をひきいて城外へ打って出ると、猛烈果敢な奇襲をくり返したあげく、ころを見て引きあげ、たくみに敵軍を城門まで引きよせた。
このとき昌幸は、重臣の矢沢但馬守と城内で碁をうっていたそうだが、
「ちょっとやるかの」
碁石を投げ捨てて槍をつかみ、粒ぞろいの手勢をひきいて城門から押し出した。
同時に、石垣の上へ仕かけておいた大木を切って落し、石垣へとりついていた徳川の兵があわてふためくところへ鉄砲の一斉射撃をあびせる。
こちらで火をつけた城下町のせまい道や坂にひしめく敵を、おもう存分に引っ掻きまわし、思

う存分に打ち破った。
さんざんな敗北である。
逃げに逃げる徳川軍は神川をわたるときに、またも真田軍の追撃にあって多大の損害をこうむった。
とにかく天下一の強兵とうたわれた徳川軍の完全な敗北であり、この戦で真田の武名は、大げさにいうと、
「天下にとどろきわたった」
のである。
以来、徳川軍はどうも真田軍に対して、劣等意識をぬぐいきれなくなったようだ。
これより十八年後の慶長五年、あの関ガ原の決戦がおこなわれたとき、真田昌幸は幸村と共に西軍へ与し、ふたたび上田城へ、徳川の大軍を迎えることになる。
上田城攻防戦以来、どうも真田昌幸と徳川家康とは肌が合わなくなったようである。
ことに、両者の間に入り、
「仲ようせよ」
といってくれた豊臣秀吉の、あの人なつかしげな魅力には、昌幸も大いにひきこまれたらしい。
あれほどに執着をした沼田城も、秀吉の口ぞえがあったので、泪をのんで北条氏へゆずりわた

した。

昌幸といえども、秀吉と家康によって、天下がととのえられてゆくことを察知せざるを得ない。家康と仲直りをした秀吉は、破竹の勢いで天下統一に拍車をかけはじめた。

翌年の夏。

上杉景勝が京都へ出かけた留守に、

「源二郎よ、帰ってこい」

昌幸は、ひそかに春日山城へ使いをやり、人質になっていた幸村を呼び返してしまった。幸村は当時、海津城（いまの松代）から春日山へ移っていたらしい。

「すまぬが、今度は秀吉公のもとへ行ってくれぬか」

と、またも〔人質〕である。

幸村は、すぐに上田を発ち、上洛をした。

京都の聚楽第や大坂城に、豊臣秀吉の近習としてつかえた幸村が、

「妻をむかえよ」

秀吉の口ききで、大谷吉継（越前・敦賀城主）のむすめと婚約したのも、このころであったろう。

当時の、秀吉と幸村との交渉をものがたる挿話も史料も、ほとんどないといってよいが、上杉景勝のような気むずかしい大名に〔ひと目ぼれ〕させた幸村のことであるから、太閤秀吉も、こ

の温和でいて威厳のそなわっている若者を愛したにちがいあるまい。

とにかく、秀吉は真田家には好意的で、小田原攻めによって北条氏をほろぼしたのちは、

「ほれ、沼田を返してやるぞよ」

五年前に、北条氏へゆずらせた沼田城のことを忘れずに、真田昌幸へ返してくれた。

秀吉の、こういうところの呼吸は、まさに絶品であって、戦争にかけては余断をゆるさぬ謀略家であった昌幸も、ころりとまいってしまった。

自分が心から敬愛の念をささげていた武田信玄。その家を攻めほろぼした徳川家康へのぬぐいきれぬ嫌悪感を抱いている昌幸だけに、なおさら秀吉への接近はいちじるしいものとなるばかりであった。

愛子の幸村が、親の手もとをはなれ、秀吉につかえて気に入られているのを見れば、若きころの自分が信州をはなれ、武田信玄のもとにつかえていたことを、昌幸はおもい起こしたことであろう。

これに反して、長男の信幸は、徳川家康に接近した。

家康の臣の中でも、

「家康にすぎたるもの」

と、世にうたわれた本多忠勝の女・小松と、信幸は結婚をした。むろん、家康の口ききで、小松は家康の養女として信幸に嫁いだのである。

そして……。

天下統一をなしとげた豊臣秀吉は、八年後に死去した。

のこされた後つぎの秀頼は、このとき六歳。

豊臣家の主となって天下をおさめるには、あまりにも幼なすぎた。

ことに、故秀吉がもっとも信頼していた大老の一人、前田利家が秀吉のあとを追うように病死をしてからは、

（天下は徳川のものだ）

という世上のささやきを、だれも押しとどめることはできなくなった。

政治の混乱、複雑な陰謀の反復の中で、徳川家康の威望は日ごとにかがやきを加え、家康もまた、

「われのほかに天下をととのえるものなし」

の自信にみちみちてきている。

（いまこそ!!）

と、家康は決意をした。

会津の領国へ帰った上杉景勝は五大老の一人だが、これへ「上洛せよ」の命を発し、景勝がこばむや、断乎としたさまを見せて伏見を発し、江戸へ向い、上杉討伐の軍をおこしたのである。

このすきに、豊家五奉行の一人・石田三成を主軸とする豊臣派の西軍が旗上げをし、大阪、伏

見を手中にして、家康の東軍へ決戦をいどんだ。

西軍挙兵の報が真田父子の耳へとどいたのは、慶長五年七月二十一日であった。

このとき、真田父子は、東軍の先鋒として上杉攻めに加わり、下野の犬伏（現栃木県佐野市）へ到着していた。

この真田の陣所へ、石田三成の密使が、三成の手紙をもたらしたのである。

三成の書状、次のごとし。

「至急に申しあぐる。このたび徳川家康は太閤在世中の誓いを忘れ、秀頼様を見捨てて上杉討伐に出かけたので、銘々相談の上、家康を討つことになった。家康が故太閤との誓いにそむいた事項は別紙にしたためておいたので、よくごらんの上、われわれの行動に道理ありとおもわれ、かつ又、太閤さまの御恩を忘れざるにおいては、どうか西軍にちからをかし、秀頼さまに忠節をつくしていただきたい」

昌幸は、これをよむと、ただちに、

「このような大事、自分に隠しておき、いまこのときになって味方せぬとはけしからぬではないか」

と、手紙に怒りをこめ、使者にもたせて帰した。三成はこれに対し、誠実に弁明したばかりでなく、宇喜田秀家、毛利輝元の二大老のほか、長束正家、増田長盛、前田玄以などの奉行たちへも、

「それぞれに、真田へ親書を送っていただきたい」
と、たのんでいる。
西軍が、真田の去就をいかに重視していたかが知れよう。
一度は三成へ怒りを抱いたが、昌幸の心はすぐに決まった。
で、信幸・幸村の二子をよびよせ、密議に入ると、幸村は、
「父上のおこころのままに」
と、いう。
信幸は熱誠をこめて、
「西軍へ与するは敗北をつかむも同然でござる」
平常は冷静沈着なこの長男が、興奮をかくそうともせず説得するさまを見て、昌幸は苦々しかった。
(源三郎は、これほどまでに家康から籠絡されていたのか……)
である。
昌幸もかなり激していたらしい。
後年、真田家の臣・河原綱徳(つなのり)が筆記したものによると……
密議の席へ、重臣の河原綱家が心配のあまり顔を出すや、
「だれも入って来るなと申した筈じゃ。何ゆえ、ことわりもなく入った!!」

昌幸がいきなり、
「……めされたる御下駄を投げつけたまいけるが綱家の前歯にあたり、それより前歯欠けてありしとなり」
とある。
こうして、ついに昌幸・幸村は西軍へ、信幸は東軍へ与することになり、犬伏の陣所において訣別となった。
どちらが勝っても負けても、真田の家名がのこるようにと、合意の上で別れたという説もあるが、〔河原綱徳記〕をよむと、いかにも情景ほうふつとして、あくまでも双方の説が喰いちがっていたことがわかる。
かくて、昌幸・幸村の父子は夜明けを待たずに手兵をひきいて犬伏を発し、赤城山麓を沼田へ入った。
沼田には、分家・信幸の居城がある。
「敵味方となったからは、兄の城下をも焼きはらうこともあろう」
と、幸村はすでに木村土佐守をして沼田へ先発せしめている。
昌幸は、
「孫(信幸の子)に逢いたい」
と、城門へ向ったが、信幸の妻・小松が長刀(なぎなた)をかいこみ、武装の家来、待女たちをしたがえて

櫓へあらわれ、
「われも女なれど信幸が妻、家康公の養女なり。当城において手ささん者おぼえなし、一人も洩らさず討ってとれ」
と下知し、開門をこばんだ。
「信幸にはすぎたる嫁じゃわえ」
昌幸も苦笑し、城下の正覚寺で休息していると、石庵という者がやって来て、
「信幸公は、いかがなされまいたか?」
問うと、幸村がすぐに、
「兄上は浮木に乗って、風が吹くのを待っている」
こたえたという。
このとき、幸村が強く、
「沼田を焼きはらうべし」
と、主張したのは事実であろう。しかし、昌幸はこれをとどめた。
上田へ帰った真田父子は、ただちに籠城の準備をはじめたし、徳川家康は、いったん江戸へ引返してから三万二千余の軍を発し、東海道を上ることになった。
これとは別に、徳川秀忠も三万の軍をひきい、中山道を西上することになったが、この行手をはばむものは、いうまでもなく上田城の真田父子である。

秀忠軍は、九月一日に軽井沢へ到着し、
「すみやかに開城せよ」
と、上田へ使者を送った。この使者が真田信幸と本田忠政である。忠政は信幸の妻の実兄だ。
二人の使者を、真田昌幸は上田城外の国分寺へ迎えた。
「信幸。おぬしが使者か。よろしい。城をあけわたし徳川に味方してもよい。ただし、三日ほど猶予ありたい。城の内外を清めておきとうござるゆえな」
あっさりと、昌幸がいう。
「そりゃ、まことでござるか」
本多忠政は本気にして、すっかりよろこんだが、信幸には父の肚がわかっている。
籠城の準備もあり、出来るだけ秀忠軍が戦場へ到着するのを遅らせようとしているのだと、わかっていても、まさかそばにいて「父の申すことはうそでござる」ともいえない。
城を掃除するから三日ほど待ってくれなどとは、昌幸も人を喰っている。
とにかく、三日のばされた。
ところが開城するどころか、幸村が武装の手勢をひきい、しきりに偵察などにあらわれ、これ見よがしに秀忠軍の前面を往来する。
「おのれ!!」
秀忠は激怒し、九月五日から上田攻撃を開始した。

「父上。三万もの東軍を二千五百の真田勢が引きつけ、戦場へ行くのを喰いとめるのですから、……これで西軍が勝たなかったら、どうかしていますな」

と、幸村がいえば、

「そうとも。われらが勝つようにしてやっているのだ。それで駄目なら、もう豊家もおしまいさ」

昌幸が笑った。

攻めて行くと逃げる。城近くまで追って行くと、いきなりどこからか幸村が強兵をひきいてあらわれ、

「それ、突きくずせ!!」

猛然と襲撃にかかる。

何しろ徳川軍は十八年前の上田攻めの惨敗イメージが強烈すぎて、

「城へ近づいたら、どんな落し穴が待ちかまえているか知れたものではないぞ」

びくびくしながら攻めるのだから、その裏をかき、馴れ切った地形を利用して奇襲する幸村の駆けひきには、さんざんになやまされた。

開戦三日目になると、本多正信が秀忠に「小諸まで引きあげさせたまえ」と、進言をした。ようやく昌幸の心底を見ぬいたのだ。いやいやながら秀忠が引きあげると、江戸から父・家康の本陣が出発したことを知らせに使者が馳せつけて来た。

「父上におくれてはならぬ」

秀忠も青くなり、あわてて木曾路へ向った。

けれども、三万の秀忠軍は数日のちがいで関ガ原の決戦の日に間にあわなかった。

秀忠軍が上田へのぞまず、中山道を直進していたら、完全に間にあっていたろう。

「父上。もはやこれまで。われらのつとめは、どうやら終りましたな」

「いかにも。あとは、みなで、うまくやってくれることじゃ」

父子して碁石をならべはじめた。

二千余の兵で、東軍の充満する街道を戦場へ駆けつけるようなばかなまねは出来ない。

しかし、せっかくに真田父子が三万の大軍を減らしてくれたのに、西軍は勝てなかった。小早川秀秋その他の部隊が、西軍を裏切り家康のもとへ尾をふって行ったことなど、昌幸にいわせれば、まったく敗戦の理由にはならないのである。

西軍敗北の報を耳にしたとき、

「あやつどもは戦場で居眠りをしていたのか……」

真田昌幸は、あきれはて、吐き捨てるようにいった。

だが、この二度目の上田攻めで、徳川軍は真田父子の、ことに三十四歳の武将に成長した幸村の活躍を、いやでも認識せざるを得なかった。

西軍の敗北によって、真田父子も降伏せざるを得なくなり、上田城は東軍に管理された。昌幸も幸村も、家康からの切腹命令を待っていたが、長男・信幸の助命嘆願が成功し、

「憎い真田父子の首を見ぬことは残念である。豆州（信幸）の命乞いを容れた自分が、ふしぎでならぬ」

いいつつ、徳川家康は複雑な苦笑をうかべた。

これは、信幸への信頼も大きかったのであろうが、信幸には妻の実父にあたる本多平八郎忠勝が、そばから口ぞえしてくれ、頑強に真田父子の処刑を曲げぬ家康へ、

「それがしを敵にまわしてもでござるか!!」

と、忠勝は大声にいい放った。

本多忠勝は、家康股肱の臣の典型ともいうべき武将であって、これが、聟の信幸を大の気に入りだということは家康も知っていたが、

（それほどまでに……）

さすがの家康もおどろき、ついに屈したという。

真田昌幸と幸村が、紀州・高野山蟄居の身となり、上田を発したのは、この年の十二月中旬である。父子に従うものは幸村夫人と三人の女子、待女をふくめて婦人八名。それに池田綱重、原出羽守などの家臣十六名であった。

この真田一族を護送する徳川部隊は、依田信守がひきいる二百余名。信幸からさしむけた沼田

勢が百名ほどで、これは信幸の家臣・鈴木右近忠重がひきいている。

真田幸村は、その後、高野山・蓮華定院から山麓の九度山村へ移り、ここへ、ささやかな屋敷をかまえて住みくらした。女人禁制の高野山に妻や女子をおくことも、ならなかったのであろうか。

幸村が、長男の大助をもうけたのは、九度山へ来てからである。

「戦に負けずして、このような敗残の身になろうとは、まるで白痴になったようなものじゃ」

と、昌幸は口惜しがったが、

「なれど、上田が兄上のものとなったことは、よろしゅうございましたな」

と、幸村は父をなぐさめた。

信幸が、家康から上田と沼田を安堵されたからである。

九度山へこもって十一年目の慶長十六年六月四日に、真田昌幸は六十五年の生涯を終えた。三年ほど前から、体の弱った昌幸は、蓮華定院を出て、幸村のもとへ来ていたのだ。

この間、父子の生活も楽ではなかったらしく、昌幸が、信幸や旧家臣にあてた手紙などに、それが察せられる。一時は、家康のゆるしが出て上田へ帰ることも夢見ていたらしい。

が、これは生活苦に弱音をあげたのではあるまい。

豊臣秀頼が大坂城にあるかぎり、天下の争乱はもう一度、かならずおこる。

（そのときこそは……）

の気持があったものだろう。

昌幸や幸村のような人物の手紙は、そのまま鵜のみにはできない。底意をくみとるべきだ。
信幸は、父の死去に際し、葬儀をいとなみたいと申し出たが、家康はゆるさなかった。
幸村は、尚も九度山で暮しつづけたが、国もとの旧家臣や、兄・信幸との交渉もつづけられており、
「焼酎を送っていただきたい」
とか、
「当地においても、歌などをよまれてはいかが、などとすすめてくれる人もいるが、いまさら老の学問で、出来ようはずもない」
などと、幸村は信幸の重臣たちに書き送ったり、金の無心をしたりしている。
これらの手紙を見ると、いかにも幸村が老人くさく、まったくの隠居ぐらしへ没入してしまったかのように見えるが……。
そのころは幸村も四十五、六歳になっており、老年について気もさしていたろうが、現代でも、この年齢の男は心にもなく、
「もうだめだ。すっかり老いぼれてしまったよ」
などと、いって見たりするものである。
強気や虚勢を見せず、老いたといいつつも心身の昂揚をおこたらなかった幸村ではないのか。
心身の充実なくして、十五年もの隠居ぐらしに慣れてしまった中年男が、なんであのような

〔死花〕を吹かすことができよう。
五十になって、幸村は〔死花〕の機会が来るとおもっていたろうか。
おもっていたろうし、
「先々のことはわからぬ」
と、していたかも知れない。
慶長十九年――。
徳川家康は、大坂城にいる委吉の遺子・秀頼を中心とする豊臣家の残存勢力を一掃し、徳川幕府の栄光を、
（わしが目のくろいうちに、たしかめておきたい）
七十余歳の老軀を駆って起ちあがった。
九度山の真田幸村へ、
「大坂へ入城ありたい」
と、秀頼の懇請があり、幸村は即座に引きうけ、十月十日に大坂へ入城をした。
ひきつれた家来たちは百人内外と見てよい。
九度山は、紀伊の領主・浅野長晟（ながあきら）の監視をうけていたことでもあるし、幸村の脱出については、さまざまの説がある。
九度山から大坂までは約十六里ほどで、近距離なのは幸村にとって脱出有利であったろう。

豊臣家から黄金二百枚が支度金としてわたされというが、もちろん、金銀に心をうごかされたのではない。

かといって、かならず負けるつもりでもなかったろう。

（家康の首を、おれが討ってくれよう）

という闘志が、幸村のつつしみぶかい言動の底に、画然として横たわっていたにちがいない。

「ほかの味方は家康に負けても、おれは負けぬ!!」

なのである。

ここに、幸村の父・昌幸ゆずりの武将の血が、はっきりと看取される。

兄・信幸は信幸で、関ガ原のときと同様に、いささかも徳川の勝利をうたがうことはなかったろう。

兄は、武将から政治家へ早くも転身しつつあり、戦争が、このときを最後にして平和をよぶことにひたと眼をこらしていた。

十一月も半ばになると、十万の西軍がこもる大坂城を、二十万の東軍が包囲した。

これより先、真田幸村は、しきりに、

「この城には後詰めがないゆえ、籠城などという姑息の手段によらず、勇敢に打って出て、自由自在に敵をおびやかすべきである」

いくつかの作戦を用意してすすめたが、結局は採用にならない。これは西軍が、寄せあつめの浪士たちや、それぞれに一癖も二癖もある武将たちを抱えながら、これを統轄すべき人物がいなかったからだ。その上、二十二歳の豊臣秀頼には、実母の淀君と、側近の大野治長などがつききりで口をさしはさむ。

戦にそなえ、幸村は城の南方、三の丸の惣堀の外（平野口）の小丘に砦を構築し、これを「真田丸」と名づけて手勢をしたがえ、たてこもることにした。戦闘というものは退いているばかりでは用をなさぬ。出撃するからこそ退却にも意義が生ずるので、出ては引き、引いては出る。そこに自在の駆けひきがうまれることは、父と共に上田城へこもり、徳川の大軍を相手にしたとき、幸村はその効果を身をもって会得している。

この真田丸をきずくときも「真田は一族が多く東軍に与しているから、いつ寝返るやも知れぬ」と、うわさもされていたし「後藤合戦記」には、大野治長が後藤又兵衛に、

「真田が城の外へ出丸をきずいたというが、あの人物を外へ出してはあぶなくないだろうか。敵へ内通するおそれがある」

などといい出し、又兵衛が激怒して大野を叱りつけたことが記してある。

幸村としては、自分の純白な闘志が、このように傷つけられようとは、いささか意外であったろう。

しかし、彼は黙々として戦いはじめた。

そのうちには、毛利勝永など、幸村に心をよせる武将も出てきたし、
「大御所（家康）は、京を発し、奈良へ向うとの知らせを間者がもたらしました。このさい思いきって奈良へ出撃し、四方より火をかけて急襲すべしと存ずる。地理にくらい関東勢は必ず不意をうたれて動揺いたそう。その機をつかんで大御所の首を打つべし」
幸村の、こうした積極的な作戦に賛成するものもいたが、結局は大野その他の側近派によって採りあげにならぬ。
「この戦に勝つ道は、どのような無理をしても大御所の首を討つことのみじゃ」
と、幸村は決意をしていた。
まともに戦って勝てる筈はない。
となれば、敵の総大将の首をとるための戦でなくてはならぬ。奇襲作戦をおそれていたのでは、
「負くるを待つようなものじゃ」
幸村にしてみれば、
（なんのために戦をしたのか、わからぬではないか）
ということであった。
〔徳川実記〕によれば、このとき幸村は、策を容れられず、ついに独断で、奈良へ向う家康の行列へ手兵を送って襲いかかったらしい。
このとき徳川家康は本多正純ほか五十騎そこそこの供まわりで、急ぎ奈良へ向ったというから、

絶好のチャンスであったわけだ。もしも幸村自身が出ていたら家康もあぶなかったろうが、秀頼のゆるしが出ぬ出撃であるから、
「自分が城を留守にしてはいけない」
と、幸村は思い、わずかの兵をさしむけたのだろう。
木津をすぎるころ、真田の伏兵に襲われ、鉄砲を打ちかけられた家康の一行は必死に切りぬけ、奈良へ逃げこんだとある。
作戦会議がひらかれるたびに、幸村は効果的な出撃を進言したが、いつもだめになる。幸村は、心中くさりきっていたことであろう。
さて、戦闘がはじまると〔真田丸〕へ攻めかける敵勢を幸村は一手にひきつけ、さんざんに撃ちなやました。
ことにひどい目にあったのは加賀の前田利常の部隊で、越前の松平忠直部隊と共に、真田丸へ攻めかけるたびに、居ると思ったところから、すばやく兵を引きあげた真田隊に、
「そんなところにはだれもおらぬ。鳥かけものでも狩っているのか」
と、真田丸から皮肉をあびせられ、
「おのれ!!」
激怒のあまり、夢中になって真田丸へ攻めかかると、鉄砲、火薬を利用した反撃にあって、さんざんにやっつけられる。攻めかけるたびに死傷者の数も非常なものとなり、本陣の家康も苦い

顔をしつづけていたという。

さすがにこうなると敵味方の間に、真田幸村の智勇はとどろきわたり、

「自分は左衛門佐殿の勢へ加わる」

浪人部隊の中にもすすんで真田隊へ参加する者がふえてきた。

かくて、徳川家康は大坂城へ指ひとつふれぬまま、講和の策へ切りかえたのである。

幸村は、もちろん講和に反対であったが、このときもとりあげられず、ついに講和がむすばれた。

「それならば、いったん休戦をしておき、大御所がひきあげた後に、すばやく起って大和へ進み、さらに名古屋のあたりまで手中につかんでしまえばよろしい」

幸村の大胆な意見を実行にうつす勇気は、秀頼にも側近派にもない。

家康は巧妙に辞をかまえ、たちまち大坂城の濠が埋めたてられ、真田丸も打ちこわされてしまった。

年があけて、休戦中の幸村は、国もとにいる姉（真田信幸の臣・小山田茂誠夫人）へ手紙を書き送っている。

「……このたびの戦で、私が西軍に与したことを姉上は奇怪なことと思われましょう。しかし、休戦となり、お目にかかっていろいろとお話し申しあげたいが、そうもまいらず、明日のことはどうなるやらはかり知れませぬが、いまのところはぶじにくらしております」

休戦中に「信濃一国をあたえるから、こちらへこないか」と家康からのさそいがあったけれども、幸村は一言のもとにはねつけている。

翌元和元年五月。

東西の講和はやぶれ、家康はふたたび軍を発して大坂へ向った。すなわち夏の陣だ。

城の濠を埋めたてられて防備を破壊されただけの講和ではないか。

「なんのために講和し、また何のために、ふたたび戦わんとするのか」

真田幸村にしてみれば、城方のすることはまるで〔茶番喜劇〕にしか思えなかったろう。そのようなばかばかしいことを指をくわえて見ていなくてはならぬ自分のあわれさ。

いや、指をくわえていたのではない。事あるごとに幸村は意見をのべた。何度とりあげられなくとも、屈せずに、ねばりづよく、例の温和な態度で〔内部の敵〕と闘った。

再戦ときまったとき、

「東軍が西上する前に、疾風のごとく伏見の城を襲い、秀頼公を伏見にお迎えしたほうがよろしい。濠を埋めたてられたこの城にこもるよりも、まだ勝つ見込みも出てこようかと存ずる。伏見へ入って京を手におさめる。たとえ負けたとしても、このほうが本懐ではないか」

まことに幸村らしい、痛快にして豪快な策を申したてたが、大野治長も淀君もあきれはてたような眼つきで幸村を見つめるだけだ。淀君は、しばしば作戦会議の席上へあらわれ、口をさしは

さむ。

「こうなれば、もはや、われらの手のみにて戦うより道はなくなった」

幸村も、ついにあきらめ、最後の決戦を待つことになった。

今度の戦争は早かった。

濠もない城に入っていては、たちまち攻めこまれる。

仕方なく出撃作戦となった。

することなすことが、一歩どころか百歩も千歩もおくれているのだ。

五月六日には——。

後藤又兵衛、薄田兼相、木村重成などの勇将が戦死した。勇将がいても作戦の統一がないから、犬死をするだけである。

翌七日の決戦にそなえた前夜に、幸村は自分の兵にむかい、

「われらは、父・昌幸の遺志をまもり大坂へ入城したが、もはやこれまで。おのおのが二心なくはたらいてくれたことに対しては謝する言葉もない。おのおのは妻子もある身ゆえ、いまから陣を脱し故郷へ帰ってもらいたい。自分は秀頼公のたのみをうけて入城したのだから武門の義理、死を覚悟している」

いいわたしたが、陣を脱するものは、ほとんどなかったといわれる。

七日の朝がきた。

大野治長が城を出て、茶臼山の真田陣所へあらわれ、幸村と作戦の打ち合わせをおこなった。

幸村は、

「天王寺一帯が決戦の地となりましょう。かくなっては思いまようことなく、城兵は一丸となって打って出で、敵軍のすべてをここへ引きつけ死力をつくして戦うよりほかに道はありませぬ。むろん、秀頼公みずからも戦場へのぞんでいただかねば我軍の士気にもかかわります」

「こころえた」

「こうして両軍の戦闘激烈となったとき、船場口におります明石全登殿の部隊を迂回せしめ、敵軍のうしろから切りこませます。このことがうまくゆけば、左衛門佐も存分のはたらきをして見せましょう」

「よろしい。おことの申さるるごとくにはからおう」

大野も、そのつもりだったらしいが、いざ戦いがはじまると秀頼も出て来ないし、明石部隊の奇襲もない始末であった。

戦闘は正午をすぎたころにはじまった。

真田部隊を中心とする天王寺・茶臼山の西軍に向って、東軍の先鋒本多部隊が先ず毛利勝永へ迫った。

「まだ早い。発砲するな。ひきつけよ、ひきつけよ」

と、勝永は制止したが、兵は敵の銃撃に応じて発砲し、血相を変えて突撃し出した。

ついに戦端がひらかれた。

これは、幸村にとって予想外の早さで戦闘がはじまったことになる。

すべてが、

「わしの手足になってくれない」

のである。

幸村は我子の大助幸昌をよび、

「これより城中へ帰り、秀頼様おそばにつきそい、秀頼様の御様子次第、いかようにもなすがよい」

しきりに父と共に討死をねがう大助を、むりやり城中へ帰した。

このとき、真田隊にいた稲垣与右衛門が後に語ったところによると、

「……大助殿は断じて城へは帰らぬといいつのり、父君の申しようをききいれなかったが、そのうちに、幸村公が大助殿の肩を抱くようにして何事かささやくと、ようやくうなずき、何度も父君を振り返って見ながら、城中へ去った」

そうである。

戦闘たけなわとなった。

東軍の松平隊が勇戦奮闘し、錐をもみこむように西軍を掻きわけ、真田隊へ肉迫してくる。

「それ!!」

この日の幸村は、緋縅の鎧、白熊付の鹿の抱え角を前立にうった兜という軍装で、河原毛の愛馬にまたがり、十文字の槍をひっさげて先頭に立ち、松平、伊達などの東軍へ突入した。

すさまじい混戦となる。

このとき、浅野長晟（東軍）が大坂方へ寝返ったという叫びが、諸方にわきおこった。

これは幸村が最後の奇策であって、戦闘の混乱を利用して、部下の兵に〔流言〕を飛ばさせたのである。

「浅野殿、裏切り!!」

の叫びをきいて、奮戦していた松平隊があわてはじめたことの間隙をのがさず、

「いまこそ、最後のときじゃ!!」

幸村は一隊をひきいて、家康の本陣を目ざし、旋風のように襲いかかった。

魔神のような、この攻撃のおそろしさは——たちまちに本陣の旗下が突きくずされ、さすがの徳川家康も、

「もういかぬか……」

自決の覚悟をきせざるを得なかったと、いわれたほどのものであった。

黄一色にけむる戦塵の中で、幸村は槍をふるい、力のかぎり、闘いぬいた。

家康が死地を脱し、手輿にしがみついて玉造の方向へ逃げたのち、幸村の力はつきた。

〔薩藩旧記〕の、

「大御所様御陣へ、真田左衛門佐仕かかり候て、御陣衆（旗下）追いちらし、討ちとり申し候。御陣衆三里ほどずつ逃げ候衆は、生きのこられ候。三度目に、真田も討死して候。真田日本一の兵、いにしえよりの物語にもこれなきよし……」

とあるが、他の戦記、史料すべて、幸村の智勇をみとめぬものはない。

傷つき疲れはてた真田幸村は、安居天神のあたり（境内ともいう）で、ついに越前部隊の西尾某に首をとられた。

ときに幸村は四十九歳であった。

大助幸昌も、秀頼と共に大坂城内で自決をした。これは十六歳だったといわれている。

幸村の妻も、のちにとらえられたが生死不明。むすめ三人はそれぞれに嫁いでしあわせにくらしたらしい。

間諜——蜂谷与助

蜂谷与助が、大谷吉継の臣となったのは天正十三年（一五四四）の夏である。

この年——吉継は、豊臣秀吉から越前・敦賀の城主として五万石をあたえられ、従五位下・刑部少輔に叙任したばかりであった。

それまで、大谷吉継は秀吉の小姓から立身をし、諸方の代官をつとめたりしていたのだが、このとき、はじめて所領をあたえられ、一城の主となったのだ。

そのころ、五万石の大谷の場合、軍役から見ると、次のような家臣団の編成が必要となる。

騎子　百名
歩士　百五十名
足軽　約千名
小者　七百名

こういうわけで、大谷吉継は至急に家来を採用しなければならなかった。

のちに、吉継の股肱の臣となった湯浅五助なども、このときに召抱えられたもので、五助はそれまで放浪の牢人であった。

一芸にすぐれたものは、たちまち召抱えられる、といっても、無論、採用には厳重な警戒を必要とした。

信頼出来る人の請書か、推挙がなくてはならない。

湯浅五助などは、どういう経路で採用されたのか不明だが、蜂谷与助を推挙したのは、美濃・浮見の城主（六万石）一柳伊豆守直末であった。

一柳直末は、後に小田原戦役の折、戦死をしたが、秀吉の生えぬきの家人であり、武勇もすぐれている上に茶の湯もたしなむという、誰が見ても立派な武将である。

蜂谷与助は、すぐに採用された。

ときに与助は二十八歳。

一柳直末によれば——蜂谷家は、三年前にほろびた武田家に祖父の代からつかえ、軍功もある家柄である……ということになる。

与助は、馬廻衆として百石をあたえられた。

以後、秀吉が天下を平定し、文字通りの〔天下びと〕となるにつれ、大谷吉継も小田原戦役や、例の太閤検地にも活躍し、文禄四年（一五九五）には一万石の加増がある。

このころになると、与助も三百石をあたえられ、主・吉継の側衆（側近）に出世をしている。

慶長三年（一五九八）、豊臣秀吉が歿し、再度にわたっての朝鮮出兵も失敗に終り、渡鮮中の将兵は帰還した。

これから、関ケ原合戦に至るまでの経過をあらためて記すまでもあるまい。

秀吉の死後——。

大谷吉継も蜂谷与助も、ほとんど敦賀へは戻らず、大坂か伏見の屋敷に在って余断をゆるさぬ政局のうごきにそなえた。

大谷家の臣となってから約十五年。四十三歳になった蜂谷与助へ〔秘命〕が下ったのは、このころである。

〔秘命〕は大谷吉継が下したのではない。

徳川家康の重臣・本多佐渡守正信から下ったものである。

つまり、蜂谷与助は徳川の間者として十五年も前から大谷家へ潜入していたのであって、彼が武田家につかえていたことは事実なのだが、主家滅亡後、徳川家へ入り、そのころから充実完成を期して活発にうごきはじめた徳川間諜網の一つの網目として大谷家へ送りこまれたものだ。

（いよいよ、はたらくことになったわけだが……何やら気落ちがしてしまったような）

と、与助は思った。

この十五年の間、与助は何一つ徳川方へ情報をもたらしてはいない。

「命あるまでは、大谷の家来になりきっておれ」

というのが、本多正信の厳命であったからだ。

そのときの蜂谷与助には妻と女子二名があったという。妻は同じ大谷家中の平野加兵衛の女である。

慶長五年八月二十九日――。

すでに美濃・大垣城に入っていた石田三成から、敦賀へ急使が駈けつけた。出陣要請の使者である。

大谷吉継は、十九歳の長男・大学助吉治と共に精鋭千二百をひきい、敦賀を発した。蜂谷与助は、

「おれがことは帰らぬと思え」

と、妻にいった。

与助のみならず、今度の戦陣がどのようなものかを知らぬものはない。これより先、大谷吉継は、徳川家康の上杉征討に応じ、六月二十日に敦賀を発している。ところが、木ノ本まで来ると、佐和山の石田三成の家来、柏原彦右衛門が出迎えに来ており、そのまま、吉継は佐和山城へおもむいた。

三成が西軍旗上げの大事を打明け、吉継に協力を請うたのはこのときである。

吉継は仰天した。

このとき、吉継は「治部殿（三成）には才気あっても大局をつかむ心がない上に、戦陣の駈け引きに於て、到底、内府（家康）に立ち向えるものではない」と、きめつけたが、すでに矢は放たれており、取返しのつかぬところまで家康打倒の計画が進んでいるのを知ると、熟考の後に、

「おことへはそむけぬ」

いさぎよく、西軍へ加担することを決意した。

三成と吉継の交友は二十余年にわたるもので、豊後の片田舎の郷士の家に生まれた大谷吉継が、当時、姫路城主だった秀吉の家来になったとき、すでに三成は秀吉側近の一人として羽振りをきかせていたようである。

こんな話がある。

後年、吉継は癩病にかかり、桃山で秀吉の茶会がおこなわれたときのことだが……。

諸大名居並ぶ前で、秀吉が茶を点じ、これを順に呑みまわしたとき、吉継は戦慄した。そのころから癩の症状が判然となり、髪もぬけ、顔や手の皮膚もくずれかけていた吉継だけに、呑みまわしの濃茶を彼がどう扱うかと、列座の大名たちは息をのんだ。

吉継のとなりには石田三成がいた。

茶がまわって来、吉継は仕方もなく、ふるえる手で茶碗をとったが、口をつけたとき、ずるりと水洟を茶碗の中へたらしてしまったものである。鼻腔の機能が病気のために鈍くなっていたのであろう。

吉継は、わなわなと震え出したが、三成は平気で茶碗を横手から取りあげ、事もなげに呑みほしてしまったという。

「そのときこそ、わしは治部殿のため、いつでも死ぬ覚悟をきめたのだ」

と、吉継はいい、親友の蹶起に殉じたのである。

これが単なる説話であるや否や、それは知らぬが、三成の出陣要請にこたえて敦賀を発した大谷吉継は腹巻もつけぬ平常のままの軽装で、四方明放しの輿に乗り、白の練絹の頭巾を顎の下までかぶり、わずかに鼻梁の一部と両眼のみがのぞいていたというから、病患はかなり重くなっていたと見てよい。

八百の軍列は、かねて三成との打合せの通り、北国口の防衛についたわけだが、吉継は先ず関ケ原の西端・山中村の高地に陣地を構築した。

この地点は〔中山道〕に面した戦略上の関門であり、大谷軍は平塚為広の部隊と共に、これを守り、同時に、東軍から京坂方面への連絡を絶つべく、

「与助、そちにたのもう」

吉継は蜂谷与助をよび、

「徳川方の密使、間者たちのうごきを押えよ」

と命じた。

さすがに十五年もつかえて来て、吉継が少しも自分を疑うことなく、この皮肉な命をあたえたとき、さすがに与助は面を上げ得なかったそうな。

だが、この役目はまさに与助の活動を充実たらしめることになった。

関ケ原近くの垂井で一万二千石を領している平塚為広も地理にくわしいので、ここからも十名ほど、与助の手勢に加わることになったが、こんなことは、さして支障にはならぬ。

与助も、このころには家来十名、足軽二十名ほどを抱えているし、その中の三名は徳川からさしむけられた間者である。

会津の上杉景勝征討に向った徳川家康は、一子・秀康を下野にとどめて上杉軍にそなえ、みずからは参軍の諸大名をひきいて東軍を編成。一度、江戸へ引返したが、九月一日に二万五千をひきいて江戸を発し、先鋒の東軍約三万五千と合するため東海道を上りつつあった。

大谷吉継が関ケ原へ進出したころ、家康は小田原あたりを進んでいたわけだが、東軍の先鋒はすでに岐阜城を落し、赤坂に集結しており、このため、西軍の大半は大垣城へ進出した。

このとき、早くも東軍は有利な地点をしめたことになる。

地図を見るとわかるが、赤坂は大垣の西方一里半にあって、一歩、京坂への道に先んじている。

家康としては西軍を破ると共に、京・大坂を手中におさめねばならぬのだから、先鋒部隊の勇戦によって、いち早く、この地点に楔を打ちこんだ知らせを受け、

「急げ!!」

顔色を変えて勇躍したのも、早く先鋒部隊と合流して、この地点をあくまでも守りぬかねばな

らぬと決意したからであろう。

徳川家康が赤坂・岡山の本陣へ到着したのは、九月十四日の昼前であった。

この日の朝――。

関ケ原では、大谷吉継が、

「陣を移せ」

と命じ、山中村の高地から藤川台へ移動した。つまり、中山道に向って前進したわけである。

街道をへだてた向う側は松尾山で、ここには小早川秀秋（筑前・名島五十二万二千五百石）が約一万ほどの部隊をひきいて着陣し、山裾のほとんど大谷軍の陣地から指呼の間に、脇坂安治（淡路・洲本三万三千石）朽木元綱（くつき）（近江・高島二万石）小川祐忠（伊予・府中七万石）赤座直保（越前ノ内二万石）の四将が合せて七千ほどの部隊をもって陣をしいている。

脇坂など四将は、大谷吉継の依頼をうけ、山上の小早川部隊を監視しているのだ。

関ケ原戦における小早川秀秋の立場は微妙なものであって、はじめは西軍の伏見城攻撃を指揮し、徳川留守部隊を全滅せしめた後、どういうわけか〔発病〕と称し、近江の高室へ部隊をとどめ、のらりくらりとしていたものである。

このとき、すでに秀秋は、黒田長政・浅野幸長からの密使による勧誘をうけ、家康に加担する約を結んでいたという。それだけに、石田三成にとっても秀秋の去就が不安であり、

「中納言（秀秋）の病気は、どうも怪しい。目を離さぬように――」

くれぐれも大谷吉継へ依頼してから大垣へ出て行った。

秀秋は秀秋で、

「病気のため、いろいろとお疑いもあったろうが、もはや本復したので、来るべき決戦には見事戦うて見せ申そう」

と、大垣へ使者をやったりしている。

十四日の朝は、関ケ原の山峡の空も青く晴れわたった。

大谷吉継は、蜂谷与助をよび、

「決戦も迫ったようじゃ。このあたり一帯の警備をおこたらぬよう。ことに、松尾山へは徳川方の密使が往来することもあろう。充分に気を配ってくれい」

「はっ」

与助は、手勢四十名を七手に分け、西は柏原、東は垂井から大垣にかけて警戒網を張った。

このうち二手は、平塚為広の家来が指揮しているのだが、五手は与助自身の命一つで、どうにでもうごく。

与助は西軍にひそむ東軍のスパイなのだ。

大谷吉継も、とんだ者にとんだ使命をあたえてしまったものだが、与助はもう自由自在に大垣から関ケ原の線を駈けまわり、東軍のため有利な活動を行なえばよいわけであった。昼すぎになって、柏原から今須へぬける間道を走って来る使者を、与助が捕えた。

この使者は、西軍の立花宗茂（筑後・柳川十三万二千石）からのもので、宗茂は、いま大津城にこもる京極高次を攻撃している。

高次は、かねてから、

「いざともなれば、出来るだけ大津で敵の一部を喰いとめてもらいたい」

と、家康の命をうけている。

高次は九月三日から籠城をはじめているが、立花軍の猛攻をうけ、落城は目前に迫っていた。立花宗茂の使者は、密書を持っていたわけではない。口頭によって宗茂の言を大谷吉継か、大垣の石田三成へつたえるべくやってきたのだから、蜂谷与助などに口をひらこう筈はない。

「かまわぬ、斬れ」

与助は、たちまち立花宗茂からの使者を斬殺してしまった。

「どうやら大津も落ちそうだ。大津を落してのちの進退を、立花宗茂は問い合せて来たものだろう」

と、つぶやき、与助は、尚も立花からの密使の通行があるものと見て、腹心の湊井（みなとい）某に一隊をあずけ、

「両軍の使者、一人も通すな。密書なきものはかまわず斬れ」

と命じ、自分は只一騎で、何処かへ駈け去った。近江から美濃へかけて、徳川方の間者が、かなり散開している筈だ。

或いは寺僧になり、又は百姓、木樵などになって、二年も前から入りこみ、佐和山の石田三成のうごきを探りつづけて来ている。与助も、このうちの何人かと連絡を保っていたようである。

赤坂の本陣に、徳川家康到着して、一度に数千の旗幟がひるがえったのは、このころである。

大垣城の西軍は、

「いよいよ内府が来た」

動揺を隠し切れない。

その日の午後——。

与助は、今須の宿につめている大谷軍の士から「殿がお呼びでござる」ときき、急いで藤川台の本陣へ駈けつけた。

「異状（かわり）はないか？」

と、吉継。

「何事も、いまのところは……」

と答えたが、すでに、東軍・黒田長政からの密使二人を、与助は無事に松尾山の小早川秀秋のもとへ送りこんでいる。

陽が雲にかくれ、冷気がたちこめてきた。

関ケ原は、美濃国・不破郡の宿駅であって、伊吹山の南麓にあたり、四方をかこむ山々の中に

東西四キロ、南北二キロの平原がある。この平原の北東から南西にかけて中山道がのびていた。

いまでも、東海道線がこの山峡を走りぬけるとき、天候の変化の激しさにおどろくことがある。岐阜に、うららかな春の陽ざしがあっても、この山峡へかかると、目くるめくような雪が舞っている風景を、筆者は何度も見た。

さて――。

大谷吉継は、依然として武装をせず、小袖の上に白い直衣（ひたたれ）を重ねたのみで、幔幕の中から、じいっと松尾山のあたりを見入りつつ、

「大事な役目ゆえ、与助にたのもうと思うが、どうじゃ？」

傍の重臣・三浦喜太夫に問いかけた。

「いかさま――」

喜太夫もうなずく。吉継は与助に、

「どうも中納言のことが気にかかる。わしから見ると、あの松尾山に立ち並んでいる小早川勢の旗幟には、まるで戦意がない、としか思われぬ。もしやすると……すでに、中納言が近江に軍をとどめいたとき、内府からの呼びかけがあったやも知れぬ。与助、いままでのところ、松尾山へ密使が入りこんだ気配はないのだな？」

「ござりませぬ。虫一匹通さぬほどの手くばりをいたしてありまする」

「よし」

うなずくや、吉継は、

「治部殿に口上をもって申せ」

「何と？」

「治部殿より松尾山へ使者をつかわし、中納言を大垣城へ呼びつけるようにとな。つまり、今宵は諸将参集の軍議あるゆえ、ただちに大垣へおもむかれたし、と、これは治部殿の書状を持参させたがよい……と、かようにつたえよ」

「つまり、小早川中納言さまを人質にとらえおくのでござりますな」

「うむ。大将を人質にとられては、まさか寝返りも出来まい。その方がよい。いざというときに頼りにはならぬが、まだ、その方がよい」

「なれど……」

と、与助はいった。

あまりにも大谷吉継が、与助をはたらきやすいようにしてくれすぎる。何となく、この主人？にすまぬような気がしてきて、

「なれど、中納言さまが、もしも内応あるときは、呼び出しに応じますまいかと――」

「そこじゃ。どうしても大垣へ行かぬとあれば、わしに考えがある。かまわぬ。とにかく急ぎ大垣へ行け」

「はっ」

与助は馬へ飛び乗った。

黒い雲が頭上をおおい、霰が落ちて来た。

平原へ出た与助は、脇坂、朽木などの陣所を右に見て、まっしぐらに大垣さして走った。

関ケ原より大垣まで約四里である。

途中、山峡をぬけたところにある垂井の手前から、与助は街道を右へ逸た。

南宮山の東麓に宮代という小さな部落があり、この村外れに小さな名もないほどの神社がある。

この社の裏手の山林に、土民風の男が二人いた。

何気なく焚火をし、何気なく、にぎりめしを食べている男たちが、馬鈴の音と合図の口笛をきき、道へ出て来た。

ここで、与助は素早く打合せをした。

土民二人は東軍の間者である。与助は、いかなることあっても、松尾山をうごかぬように小早川秀秋へつたえよ、と二人に命じ、すぐに馬を返して大垣へ向った。

大垣は騒然となっていた。

というのは……。

家康の着陣によって、西軍の動揺があまりひどいので、石田三成の重臣・島左近が宇喜多秀家（備前・岡山五十七万四千石）とはかり、

「ひとつ内府の度胆をぬいてくれましょう」

千五百ほどの部隊をくり出し、これを二手にわけ、左近みずから五百をひきいて、株瀬川へ出張った。

対岸にいたのは東軍の中村一忠（駿河・府中十四万五千石）の部隊であったが、島左近ひきいる西軍が川をわたりはじめるのを見て、

「それ!!」

銃撃した。

西軍は引いては攻め、また引く。結局、中村隊に巧みに引きよせられ、

「それ、追いくずせ」

中村一忠ばかりか、有馬豊氏（遠江・横須賀三万石）の部隊も、喚声をあげて川をわたり、逃げる石田部隊を追いかけたものである。

島左近が、東軍を大垣城下近くの簀戸口まで引寄せたとき、伏せていた宇喜多部隊七百が、一斉射撃を行ない、島左近もまた、逃げて来た部隊をまとめ、

「突きくずせ!!」

みずから槍をふるって突撃した。

宇喜多の新手も鬨の声をあげて突貫する。

中村部隊は、これで、さんざんな目に合った。

野一色頼母以下四十余名が戦死。たちまち敗走して株瀬川をほうほうの体でわたり逃げたとい

う。

これで、大垣城はにわかに活気づいたようである。

蜂谷与助は、このさまを到着したばかりの大垣城内からながめていた。

石田三成も面をかがやかせて島左近と宇喜多秀家をねぎらい、引きあげて来る戦闘部隊を、みずから城の大手口へ出迎えた。

与助が、大谷吉継からの口上をつたえたのは、この直後のことである。

「刑部少輔が、左様に申したか……」

三成は少し考えてから、

「うけたまわった、とつたえてくれ。尚も、松尾山へは心つけられるよう、たのみ入ると刑部殿へ――」

「はっ」

与助は、すぐに大垣城を出た。

間もなく、石田三成の使者・塩田主米（しゅめ）が大垣を発し、松尾山へ向った。

夕暮れも近い。雲が風に吹き流れ、陽がさしてきた。

塩田主米が垂井を抜け、山峡へ入ると、いつの間にあらわれたのか、蜂谷与助が馬を駈って追いつき、

「松尾山への御使者でござるか？」

「いかにも――」

「では、同道つかまつろう」

「蜂谷殿は、もはや関ケ原へ戻られたと存じていたに……」

山峡を吹きぬける風は強かった。二人が疾駈する街道の両側の山肌から吹きつけるように落葉がふりかかった。

そして、この山峡を抜け出たのは蜂谷与助一人であった。

塩田主米は与助に刺殺され、南宮山の森の中へ放りこまれており、三成の密書は与助の手へわたっている。

密書の内容は、いうまでもなく軍議への出席を要請したものであったが、与助は一読するや、これを粉々に破り捨ててしまった。

大谷陣へ戻った与助は、吉継に、

「間もなく松尾山へ大垣の使者が到着いたしましょう」と三成の言葉をつたえた。このとき、陣所に戻っていた与助の家来・湊井某に、与助が、

「今朝から何も腹へ入れておらぬ。何かないか」

と、いった。

「ございます」

二人は、中山道に面して打ちこまれた柵の傍で食事をとった。夕闇がたちこめている中で、士

卒たちも夕餉のにぎりめしを炊き出している。

街道をへだてた向うの脇坂等四将の陣地からも炊煙が上っているが、松尾山の小早川軍は森閑としずまり返っていた。

「与助殿」

と、にぎりめしを噛みつつ、湊井某がいった。湊井は本多正信直属の密偵であり、与助の家来となって、徳川方と与助との連絡を保つ役目をしている。中年の老巧な男であった。

「先程、赤坂より密使がまいってな」

「ふむ」

「今夜、南宮山の吉川・毛利の両軍を内応させるべく赤坂から密使が出るそうな。この密使、大事の役目ゆえ、ぜひにも通さねばならぬ。われらに守れということだ」

「よし。おぬしにまかそう。おれはまだ消えられぬ。消えてはまずい」

「では――」

湊井は去った。

だが、これより先、大垣で株瀬川の戦闘が済んだころ、毛利・吉川の単独講和は、ひそかに家康とむすばれていた。

毛利・吉川両軍は約一万余――この大軍を石田三成は、すでに失っていたことになる。

夜になった。大谷吉継は、急に思いたち、家来十余名を従えて、松尾山へのぼった。

このころから雨が落ちて来た。

小早川秀秋の決意をたしかめるためであった。

秀秋は、木下家定の五男で、後に秀吉の猶子となり豊臣の姓をあたえられたほどで、後年、小早川隆景の養子となり筑前の大守となったのも、故秀吉の恩をこうむること大なるものがあった。

「このたびの戦いは、何事も豊家存続のためのものであるから、そこもとも、ゆめゆめ心変りなぞなされぬよう」

と、吉継は思いきっていった。

「心得てござる」

と秀秋はこたえた。吉継は、ここで大坂からの使者が松尾山へ来ていないことをはじめて知った。この間――。

大垣の軍議は、ようやく決まった。大垣を捨てて、関ケ原へ下り、ここで東軍を迎え撃とうというのである。

すでに、赤坂の家康は大垣にはかまわず、全軍をひきいて大坂城へ向うという情報も入っており、石田三成は惑乱してしまった。

島津義弘（薩摩五十五万五千石）と小西行長（肥後・宇土二十万石）の二人は、家康に対する野戦の不利を説き、しきりに赤坂夜襲を献策したが、三成は煮え切らなかった。

これで、島津と小西は、三成の戦陣における器量に見切りをつけてしまったようである。

大垣も沛然たる雨に包まれている。

大垣に約八千の守備兵を残し、両軍は十五日の午前一時ごろから四時ごろの間に、関ケ原へ集結を終えた。

これを知った家康は、西軍のほとんどが大垣を発した後に、赤坂の陣をはらい、関ケ原へ向った。

西軍の総兵力は八万余とも十二万余ともいわれているが、はっきりしたことは不明である。おそらく八万前後であったと思われる。

東軍は七万五千余。どちらにしても兵員数からいえば西軍の方が上廻るわけだが、この中には、すでに裏切りを決定している毛利や小早川の約二万がふくまれているわけだ。

石田三成は、西軍の本営を笹尾の丸山へおいた。それから右に、島津、小西、宇喜多と展開し、右端に大谷吉継の陣がある。大谷陣から石田陣まで、さしわたしにして約半里というところか。

大垣から雨と寒気の中を行進して来た兵たちは、かなり疲れていたようである。

大谷吉継は、西軍が関ケ原へ入るのを見るや、

「陣を移せ」

藤川台上から下って、藤川辺りに兵を展開せしめた。

すでに、蜂谷与助は消えていた。

三成が到着し、軍議が急いで行なわれ、吉継も輿に乗って出て行ったが、ここで、吉継は、三成の親書をたずさえた使者が松尾山へおも向いたことを改めて確認せざるを得なかった。

吉継は、逃亡した蜂谷与助を何と思ったろう。

そのころ、与助は、早くも侵入して来た東軍の先発隊を誘導し、南宮山の南裾を進んでいた。

この部隊は約五十ほどだが、家康の馬廻・奥平貞治（おくだいら）を長とする選抜部隊であった。

役目は、松尾山の小早川軍の裏切りを促進せしむるためのものである。小早川のみか、脇坂、朽木など四将の内応も確定的なものとなっている。

大谷吉継が、小早川秀秋を監視させるべく配置した四将が、いづれも裏切り部隊なのは、皮肉でもあったが、

（どこまでも御運のない御方なのだろう）

と、与助も撫然となっている。

何といっても、十五年を可愛がられてつかえた御主人なのである。

しかも、与助は妻子を敦賀に残していて、おそらく二度と会うことは出来まい。

いま与助が感じることは、まだ秀吉が健在でいて天下を切りまわしていたころから、徳川家康が張りめぐらした諜報網についてである。

与助は、十五年も間者の役目はせず、いまこのときになり、はじめて活動をはじめたわけだが、与助のみならず、諸国大名へもさまざまな形で、徳川の間者が潜入していたことであろう。

むろん、この戦さが東軍の勝利となれば、蜂谷与助への恩賞は約束されている。
（それにしても……）
進みつつ、与助は、ためいきをついた。
大谷吉継は〔死病〕を抱えた身で、そのためか、他の大名たちに見られる野望も権謀もなく、家来たちには、ことにやさしい主人であった。
与助は、吉継の信頼をうけるため十五年の間、最善の努力を払ってきたが、そのため、今日の活躍が可能となったわけである。
与助の誘導する先発部隊は牧田のあたりで歩をとめ、時を待った。ここから関ケ原までは約一里であった。
夜が明けた。
雨はやんだが、乳色の霧が濃くたちこめていて、視界はまったくきかない。
このころ、関ケ原へ到着した東軍は、家康が本陣とした桃配山（ももくばり）の前方に、黒田、加藤、田中、筒井、松平（忠吉）、井伊の諸部隊が正面から西軍の主力に対し、その左手に藤堂、京極、寺沢の部隊、この先鋒は福島正則で、福島部隊は、やや側面から西軍主力をねらうと共に、大谷吉継へ相対していた。
ずっと後方の家康本陣へ近いところに、遊軍として本多忠勝の部隊があり、本陣の後方には、池田、海野、山内の諸部隊が南宮山の毛利吉川両軍を監視している。

むろん、与助には、こうした両軍のうごきはわからない。
ただ、霧がはれるのを、じりじりしながら待つのみであった。
霧の中に偵察の兵が走りまわる。
どこかで、銃声がおこった。
あまりに霧がふかいため、どこかで敵味方がぶつかり合ったものと見える。
とにかく、霧がはれなくては決戦の火ぶたは切れない。
霧の中に、両軍は、それぞれ相手方の陣形をさぐり合い、それに応じて味方の陣形をととのえて行った。
霧がうすれた午前七時ごろ、
「もはや、よろしかろう」
与助は部隊と共に牧田村の田地を突切り、松尾山の北面を進みはじめた。
はがれて行く霧の幕の中から、関ケ原の平原が与助たちの前へ浮きあがって来た。
この地点は、ちょうど東軍先鋒の側面にあたり、前方には福島隊の戦旗が立ち並び、右方の台地には藤堂ら三部隊が戦機を待っている。
与助たちは、山裾の林の中へかくれ、開戦を待った。
（や……？）
馬蹄の音が急激にふくらみ、わあーんという喚声が前方のうすくただよう霧の中からきこえは

じめた。

福島隊の戦旗が、ゆれうごき、移動しはじめたと与助が見たとき、すさまじい銃声が山峡の平原へひびきわたった。

両軍先鋒の激突（井伊隊と宇喜多隊）である。

喚声が湧き起った。

前方の木立の中を刀槍のきらめきが激しく流れて行ったかと思うと、また鉄砲の一斉射撃であった。

与助たちの右手にいた藤堂、京極の両隊が、田地を林を突き抜け、与助たちの目の前を大谷陣へ向って殺到して行った。

戦闘は、たゆむことなくつづけられた。

およそ半里四方にも及ばぬほどの平原の中で両軍の先鋒も主力も、泥をこねまわしたような混戦、乱戦をあくことなく繰り返したのである。

大谷吉継は、藤川辺りの陣所で、例の輿の上へすわり、下半身を網で輿台へしばりつけ采配をにぎりしめ、松尾山に依然としてうごかぬ小早川軍の旗を見上げていた。

この日、吉継は腹巻のみをつけ、その上から、白地に黒蝶の群れ飛ぶさまをあらわした直衣（ひたたれ）を着込み、白の練絹の頭巾という、吉継にいわせれば、

「これが死装束じゃ」

であった。

かねてからの打合せによれば、三成の本営から狼烟（のろし）が打ち上げられるのを合図に、松尾山の小早川軍と南宮山の毛利軍が、いっせいに山を下って家康の本陣めがけて襲いかかる、ということだ。

この狼烟が上ったのは、午前十一時ごろであった。

両軍とも諸部隊を投入して、戦闘が最高潮に達したときである。

同時に、

「それ！」

五十名の部隊に援護された奥平貞治が、戦場へ出て、大谷部隊の迎撃を突破し、松尾山の北面からのぼりはじめた。

すでに、黒田長政の家来、大久保猪之助、松尾山にあって小早川軍の裏切りを督促している筈であったが、家康は尚、不安であり、赤坂を発つに当って奥平貞治をさし向けたのである。

奥平貞治は、部下が大谷隊と闘う間隙を縫い、四名の家来をつれ、蜂谷与助の誘導によって松尾山の間道をのぼり、やがて、頂上に達した。

これから、奥平と先着していた大久保の二人が、小早川の家老・平岡頼勝の鎧の草摺（くさずり）をつかみ、

「何故、裏切りの御兼約を果されぬのか——」

必死になってつめよるし、大谷吉継もまた使者をよこし、

「狼烟の合図を御忘れではあるまい」
と、迫る。
平岡は、のらりくらりと両軍の使者にいいぬけた。
なぜか？
つまり、どちらか戦さに勝目が出たときに味方しようというのだ。
一応、家康への内応は約してあるが、もしも西軍が勝ったら、とんだことになる。西軍が勝ちそうなら、今度はまた徳川を裏切るつもりなのだ。
この戦争における裏切り大名のやり方というものは、どれもこれも、みんな汚ない。
与助は見ていて厭になった。
結局、昼すぎになって、徳川家康が業を煮やし、
「松尾山へ鉄砲を打ちかけよ!!」
と命じ、福島隊から二十挺の鉄砲を小早川の陣へ撃ち放した。
これで、小早川秀秋の腰が上ったのである。
小早川軍の鉄砲六百挺が山を下って来て、いきなり大谷吉継の陣地へ撃ちかけた。
「うわあ……」
鬨の声をあげて、全軍、山を下って行くのを、蜂谷与助は茫然とながめていた。
（見てはおられぬ）

さらに——。
脇坂、朽木ら四将も、これを機に小早川軍と合流し、藤川辺りに勇戦奮闘をつづける大谷部隊へ襲いかかった。
これで体勢は決した。
硝煙と戦旗が渦を巻いて流れうごく眼下の戦場に、うす陽も落ちかかっていたのが、このとき、雲が黒く空をおおい、またも雨が叩いてきた。
午後一時——。
大谷部隊は小早川軍の一万の新手を迎え、尚も奮戦し、一時は大将の小早川秀秋が潰走（かいそう）する始末であったという。
大谷吉継は藤川をわたり、輿の上から指揮をとっていたが、
「これまでじゃ」
もとの藤川台へ引返し、ここで湯浅五助の介錯をうけ、自刃した。
雨が沛然とけむっている。
ようやく、ゆるやかになった戦闘の流れを白い雨の幕が溶かして行った。
島津義弘の部隊が、敵中を突破して退却にかかったのは、このときである。
これまで、義弘は戦闘に加わらず傍観していた。
石田三成も、ついに、みずから島津の陣所へ駈けつけて出陣を要請したが、義弘は応じなかっ

た。

大垣以来、義弘はよくよく三成を見限ったものと見える。

ことに前夜の軍議での献言が全くかえりみられなかった口惜しさを忘れて、三成のために闘うことなど思いもよらなかったのだ。

島津部隊が後世にうたわれるほどの勇猛無類な敵中突破を行なって関ケ原を落ちた後、戦火はやんだ。

勝利を得た徳川家康は、大谷陣のあった藤川台へのぼって戦勝を祝った。

そのころ、土民姿の蜂谷与助は、篝火の燃えさかる家康本陣を目ざし、ようやく山を下りはじめた。

関ケ原古戦場を往く

変貌した古き街

これまでに、関ケ原の古戦場を何度も訪れている私だが、雨の関ケ原を見たのは、はじめてであった。

もっとも、新幹線が開通する前の東海道線では、関西への往復に、数え切れぬほど、関ケ原の山間を通り、車窓からの景観を、雪の日、雨の日に見てきている。

列車が、岐阜を過ぎ、青空がのぞいている早春の昼下りなど、関ケ原の山間に入ると、たちまち日が翳り、伊吹山から吹きおろす雪が車窓の外を冬の景色に変えてしまうことなど、しばしばであった。

それほどに、関ケ原の天候はさだまらぬ。

この日。

私どもは午後一時ごろに、新幹線〔こだま〕で岐阜羽島駅へ着くはずであった。

それが、名古屋駅で停車した〔こだま〕は、なかなか発車しない。京都大阪間で〔ひかり〕が

故障し、全線が停電になってしまったという。復旧は約二時間ほどで、その間に、すこしずつ、ノロノロ運転で各列車を進めることになった。

そのうちに、ホームの反対側に停車していた〔ひかり〕が発車することになった。

若い車掌が飛んで来て、

「向うのひかりが羽島へ停車しますから、お移りになったほうが早いですよ。さ、早く早く……」

と、私どもの旅行鞄をつかんでホームへ出て行った。

「それはありがたい」

というので〔ひかり〕へ乗り移ったのだが、いざ羽島へ着いて見ると〔ひかり〕のためのホームがない。あとから考えれば当然のことなのだが、ホームがない以上、ドアは開けられぬと〔ひかり〕の車掌たちがいう。いずれにせよ、かの〔こだま〕の車掌の親切から出た失敗であったから、いろいろと親切にはからってくれたがどうにもならぬ。ついに、午後三時に京都駅まで持って行かれ、そこから羽島駅へ引き返したときには、四時近くになっていた。

羽島から自動車で、大垣へ向う。

どんよりと曇ってはいるが、うすあかるい初夏の夕暮れのことである。

明日、あらためて取材をすることにしても、

「とにかく、関ケ原を通りぬけて見よう」

と、私は同行のN君にいった。

大垣市の西方、さしわたしにして約一里のところに、美濃の国不破郡赤坂の町（現大垣市赤坂町）がある。

十五年ほど前に、大垣から赤坂へ車で出たことがあったけれども、途中の景観は、むろん変貌している。古びた道、古びた家々が打ちこわされ、ひろく新しい道には大小の車輛がうなりを発して疾走し、新しい家並には、ところせましと種々の看板が林立している。

これは、赤坂や垂井の町も同様であって、わずか五年ほど前、関ケ原から垂井へ出たときには、まだ色濃く残っていた宿場町のおもかげは、車輛と看板の群の底に埋没しかけてい、私は、おもわず、

「ここは何処」

と、運転手にきいて、

「垂井ですよ」

そういわれたときには、わが眼をうたぐったほどであった。

家康大勝利の名残り「御勝山」

大垣の市街を出はずれ、すこし行くと杭瀬川のほとりへ出る。

この川をわたると、すぐに赤坂の町だ。

関ケ原戦争のとき、赤坂に本陣を置いた徳川家康の〔東軍〕と、大垣城を本陣とした石田三成

の〔西軍〕は、杭瀬川のながれをはさんで対峙したわけだが、小戦闘がおこなわれなかったわけではない。

慶長五年九月十四日（現代の十月二十日にあたる）の午後。

杭瀬川において東西両軍の戦闘があった。

この日、西軍の総帥・徳川家康が、はじめて赤坂の本陣へ到着したのを知り、石田三成の寵臣・島左近が、西軍の士気を鼓舞するためもあって、

「それがし、出てまいる」

といい、僚友・蒲生郷舎（がもうさといえ）などと共に部隊をひきい、大垣城を出て杭瀬川のほとりへ出撃した。

それは、赤坂の町外れにある岡山という小丘陵にもうけられた東軍本陣の、すぐ真下といってもよいほどの至近距離だったものだから、東軍の中村一栄（かずひで）・有馬豊氏（とようじ）の二将が、おもわずさそいこまれ、川をわたって西軍へ攻めかけて行った。

待ちかまえていた西軍部隊は、これを迎え撃ち、さんざんに打ち破ったものである。

折しも岡山の本陣へ到着した徳川家康は、これを展望し、

「大事の前に、あのような小戦をなし、兵を損ずるとは何事か……」

吐き捨てるようにいい、すぐさま令を下して東軍部隊を撤収せしめたという。

家康は、東軍の諸部隊が尾張の清洲城へ集結をし、十日後に岐阜城へ立てこもっていた織田秀信（信長の孫）を下し、岐阜を占領し、赤坂へ進出したのち、ゆるゆると江戸城を発して戦場へ

向ったのである。

前日の十三日に、家康は岐阜城へ到着し、一泊した後、ようやくに岡山の本陣へ姿をあらわしたのであった。

当時、岡山とよばれていた小高い丘を、いまは〔御勝山（おかつ）〕と、このあたりの人びとは呼んでいる。これは家康が関ケ原に大勝利をおさめ、天下の覇権をつかみ取ってのちに、名づけられたものであろう。

〔御勝山〕は、いまも当時のままに残っている。観光客が押しかけるでもなく、切りくずしたところで、現在は何の利用価値もない小さな丘だから、こうして往時をしのぶ姿を、われわれに見せてくれるのだ。

この丘の上に立つと、晴れている日なら、大垣城の天守閣が手に取るようにのぞまれるのだが、今日は、いまにも泣き出しそうな夕暮れの空に煤煙がたちこめていて、ほとんど見えなかった。

煤煙といえば、赤坂の町の北面にそびえる金生山からは、江戸時代から大理石が切り出されてい、いまは大小の工場が採石場をもち、公害問題が起っているそうだ。

「ここの大理石工業は、東洋一ですよ」

などと、地元の人びとはいう。

赤坂から垂井へかかる旧中山道には、美しい松並木があったが、いまは、その姿も石灰と煤煙にまみれつくしてしまっている。

私たちの自動車は、いっさんに赤坂の町を走りぬけた。

雨の桃配山

関ケ原の決戦がおこなわれたのは、徳川家康が赤坂の本陣へ到着した翌日のことである。

敵軍の前へ姿をあらわすや、家康は一気に、決戦へもちこんだのであった。

ときに家康は五十九歳になっていたが、その気魄は凄まじいものがあったといえよう。

「このまま、全軍をひきい、一気に大坂へ向うぞ」

と、家康はいいはなった。

大垣にあつまる〔西軍〕などは、

「かまわぬ」

と、いうのだ。

それよりも一気に関ケ原を抜け、西軍の本拠であり、豊臣氏の本拠である伏見・大坂の両城を、

「攻め落してしまおう」

と、いうのである。

この作戦を、家康は大垣の軍の耳へ、わざと〔筒ぬけ〕にさせた。

折しも、大垣城では、家康本陣への夜襲強行をめぐって作戦会議がひらかれ、諸将の間に烈しい論争がおこなわれたようだが、総帥・石田三成は、ついに〔夜襲決行〕へ踏み切れなかった。

そのうちにも、東軍が赤坂を出発する気配が濃厚となってきた。

至近距離に対峙していることだし、家康が巧妙に、

「大坂攻めへ出発」

のことを、露骨に見せたものだから、ついに三成は、

「家康に先んじて関ケ原へ至り、西上する東軍を待ちまかえ、いっきょに事を決しよう」

と、断を下したのであった。

夜である。

雨がふりしきっていた。

三成の古くからの友人で、西軍の一将であった小西行長は、このときの三成を評して、

「治部殿は何から何まで疎漏なく運ぼうとする。それは結構なれど、戦さには魔性というものがあり、これに立ち向って勝利を得んがためには、書状をいじり政令を案ずるようなわけには行かぬこともあるのだ」

と、いっている。

西軍が大垣城を肋したのは、午前零時すぎであったろう。西軍は、大垣の西方二里のところにある南宮山の南麓を迂回し、山間の道を関ケ原へ入り、全軍約十万の兵力をもって布陣を完了した。ときに午前三時頃か……。

南宮山には、西軍の毛利・安国寺・吉川の諸部除がある。

関ケ原で戦闘がはじまったとき、この三部除が山を下り、東軍の背後から襲いかかるはずになっていた。

徳川家康の東軍が、一足遅れて赤坂を発し、垂井へ入ったのは、西軍の布陣が終った同じ頃ではなかったろうか……。

東軍と西軍と反対に、南宮山の北面を西上した。

南宮山の山つづきに〔桃配山(ももくばやま)〕という突起点がある。

家康は、先ずここに〔本陣〕をかまえたのだ。

私が、垂井の町から、東軍が進んだ道をたどって関ケ原へ入ったのはこれで二度目である。

垂井を出て、街道の右手前方に、桃配山の小さな姿を見るときのイメージは、興味がつきぬものがある。

このあたりの景観は、変貌したといっても、地形的に往時をしのばせるものが、まだ残されているからだ。

〔徳川家康本陣〕の石碑が立てられた桃配山の裾から、その本陣址までは五十メートルほどの、ゆるいのぼりで、まわりは深い木立だ。

私は、ここへのぼり、いま通り抜けて来た垂井方面をふり返って見た。

街道の松並木が遠く見え、西方から北面にかけて、伊吹連山がせまっている。

雨が、ふり出してきた。

桃配山は小さな突起点であるけれども、前面にひろがる関ケ原を展望するのには、ちょうどよい。

いまは木立にさえぎられて、展望がきかぬが、当時も、この程度の木立はあったろう。

家康は、その木々を切り払わせたと見てよい。

桃配山・本陣の後方から垂井にかけて、家康は、有馬則頼、山内一豊、浅野幸長、池田光政の四部隊を残しておいた。

これは南宮山の西軍三部隊に備えるためで、同時に家康は、この毛利秀元を主軸とする西軍へ、

「こちらに味方をしなさい。そのほうが御為じゃ」

しきりに、内応工作を開始していた。

そしてついに、南宮山の西軍は戦闘に参加しなかったのである。このため西軍の作戦は大きな齟齬をよぶことになるのだ。

こうして徳川家康は、関ケ原の東面から、北西南の三方に展開した西軍と向い合ったわけである。

雨が強くなり、ほとんど展望がきからくなった。

「もう、いけませんね。明日、出直して来ましょう」

と、N君がいった。

私は、同意した。

決戦の日をしのばせる冷雨

関ケ原は伊吹の高峰に西北をはばまれ、西は今須から南北につらなる山脈にかこまれた一方里半の小盆地である。

この山峡をぬって、中山・北国・伊勢の三道が通じている。

せまい盆地の中へ、両軍が投入した兵力は、たしかなことはわからぬが、合せて十六、七万ではなかったか。

その大事がもみ合い、押し合い、芋を洗うような混戦の火ぶたを切ったのは、翌十五日の午前八時ごろであった。

私どもが、つぎの日に関ケ原へもどると、やはり、天候はすぐれない。

灰色の密雲がたれこめていて、その雲の隙間から時々だが、うすく陽が落ちてきた。

N君と私は、急いでカメラのシャッターを切った。

関ケ原の町から、伊吹山に向って北国街道をすすみ、左へ切れこんだところに、

〔ウォー・ランド〕

なるものがある。

ひろい敷地へ、東西両軍の陣形を示し、そこへ、家康や三成をはじめ、参加した諸将のセメント人形がならんでいる。

なんとも奇妙なものである。

事務所からは、スピーカーで戦闘の響音をながし、講談調の説明によって、絶えず関ケ原合戦の模様がテープによって語りつづけられている。

見るべきものといえば、事務所の展示室へおさめた武具などの陣列品であろう。

この〔ウォー・ランド〕へ来たのは、たしか今度で五回目になる。

五年ほど前に来たとき〔ウォー・ランド〕の左手の小さな湖水に面して〔ホテル・関ケ原〕が出来ていたのに、びっくりしたことがあった。

「関ケ原も変ったものだ」

と、おもわざるを得なかったからだ。

戦後はじめて関ケ原を訪れたときは、往年の中山道の一宿駅といった感じが充分に残されていて、町の旅館へ泊ったとき、その夜の深く濃い闇のひろがりに、息をのんだことをおぼえている。

〔ホテル・関ケ原〕もまた、変貌していた。

本屋につづいて、レストランや売店、さらに水上ゴルフなどの娯楽場が出来ている。

天候の故と、週日のためもあってか、ホテルにもウォー・ランドにも人の気配がなかった。

いま、関ケ原町では、合戦の遺跡を、此地を訪れる人びとにわかりやすく見せようというので、いろいろに手を加えはじめている。

私が、はじめて来たときは、戦史の地図をひろげながら、笹尾山の石田三成本陣をはじめ、濃

霧のはれやらぬ間に戦端の火ぶたが切って落された丸山の山腹の道をたどったりしたものだ。

戦況は午前中は西軍優勢のうちにすすめられたが、午後になって松尾山に陣していた西軍の小早川秀秋などの諸隊が徳川家康に内応し、俄然、山を下って西軍めがけて突撃したことによって、戦局は一変し、ついに西軍は総くずれとなり、総帥石田三成は身をもって伊吹山中へ脱出した。

そして最後に、戦闘に加わらず陣をかためていた西軍の将で、薩摩の島津維新の勇猛果敢な退却戦をもって、関ケ原の決戦は幕を閉じることになる。

私どもが、関ケ原駅の北面、陸橋をわたって北国街道へ入る右側にある陣場野にいると、がっしりした体格の青年があらわれ、熱心に、写真を撮りはじめた。

陣場野は、決戦の当日、徳川家康が午後になってから、桃配山から進出し、本陣を移した場所で、戦いが終ってのち、両軍の首級を実検したところでもある。

松の木立にかこまれた石垣の上に、徳川家康床几場の石碑が建てられ、久米幸叢の、

〔夏山に、かこまれてここ関ケ原〕

の句碑もある。

カメラを構えている青年に、私がはなしかけると、青年は、九州・鹿児島の出身で、これから東京へ就職が決まって行く途中、関ケ原を訪れた、と語った。

そういえば、戦史に残る退却戦を敢行し、むらがり寄せる東軍の中を突破し、約一千の部隊の大半を失ないつつも、みごと切りぬけて脱出した島津維新（義弘）は、鹿児島の〔殿さま〕であ

ったのだ。

「小学生のころから、ぜひ一度、関ケ原へ来たいとおもっていたのです」

と、青年はいった。

これから、島津部隊の退却路である鳥頭坂から伊勢街道を徒歩で、伊勢の桑名まで、

「行って見るつもりです」

という青年に、私は、陣場野から北国街道をすこし行ったところにある〔島津維新陣所ノ址〕まで案内をし、そこで青年と別れた。

それから、東海道線に沿って道を歩き、宮ノ上の西軍・大谷吉継（おおたによしつぐ）陣所址と、その奥の、木立と草に埋もれた吉継の墓へ詣でた。

大谷吉継は、病軀をおして、親友・石田三成のために出陣し、松尾山の小早川軍の内応を知ってこれを迎え撃ち、悲愴な最期をとげたのである。

私どもが、大谷陣所址から、東海道線の線路をへだてて松尾山をのぞむとき、沛然（はいぜん）と雨が叩いてきた。

「さっきの青年、これでは、ずぶぬれになってしまうね」

いいながら、私はあわててN君と、自動車の中へ飛びこんだ。

そういえば決戦の日。戦い終って夕暮れとなったとき、冷めたい秋の雨がひとしきり烈しくふりしきったという。

高杉晋作

武士の〔脱藩〕というのは、主家を捨てて出奔し、浪人となることだが、むろん重罪となる。たとえ一夜でも、主家のゆるしを得ずして我家を明ければ脱藩者と見なされるし、まかり間違えば、たちまち切腹であった。

封建時代において、大量の脱藩者が各藩に続出したのは何といっても幕末のころである。これは、三百年近くも威光を誇った徳川政権が崩壊し、勤王革命の名のもとに近代日本が第一歩を踏み出そうというすさまじい時代と、また一つには、将軍をはじめ大名たち……すなわち〔主家〕の権威が急激におとろえはじめたことによって生まれた現象であり、一種の流行でさえあった。

二百何十年もの〔鎖国〕が、諸外国の東洋進出によって破られ、米英をはじめとする外国勢力の威嚇的干渉によって、将軍をはじめ大小の〔主家〕は混乱と狼狽の極に達した。

いまのベトナム戦争どころではない。ベトナムとは違い、当時の日本は、すでに都市の密集した文化国家であり、国民は、人種的に統一されている。危機感は、それだけに大きかった。

この国難を切りぬけ、明治維新の成功の主力となったのは、いわゆる薩摩・長州・土州・肥後の各藩だということになっているが、むろん、そんな大ざっぱな表現ではすまされない。

第二次大戦後の敗者・日本の、おどろくべき復活がそうであるように、幕末の国難を諸外国の驚嘆の視線をあびつつ乗りこえられたのは、やはり名も知れぬ一人一人の国民たちの、ふしぎといえばふしぎな国民性によるものだといわねばなるまい。このことをいい出せば、長くなりすぎるので、もうやめる。

さて……。

ふしぎといえば、長州藩に桂小五郎と並び称される高杉晋作の〔脱藩〕も、ふしぎなもので、彼は脱藩しては、のこのこと主家へ戻って行き、そのたびに罪を受け、そしてまた、たちまちゆるされ、主家の信頼のもとにはたらきはじめる。

いかに幕末といえども、多くの脱藩者が主家に捕えられて斬られたり重罪に処せられたりした中で、晋作の場合は異例であり、また彼ほど〔主家〕が、たのみに思っていた〔勤王志士〕は、あまりあるまい。

彼の才能が、いかに卓抜したものであったかが知れよう。

高杉晋作は、天保十年に、長州・萩の城下の菊屋横丁で生まれた。現代から約百二十余年前のころである。

萩は、毛利家三十六万石の城下で、晋作の父・小忠太は斉広・敬親の二代の藩主につかえており、禄高は二百石というから、まず上流に属する家柄であるし、高杉家は藩祖以来の家臣でもある。

晋作が生まれたとき、
「この子は、育つまい」
と、父親はいった。
難産でもあったが、いかにもひ弱そうな赤子であった。そのくせ泣声はすばらしく大きい。
まだ祖母も生きていたし、高杉家にとっては一人きりの男子でもあったし、まるで、なめるように可愛がられて育った。しかし、少年に達しても、依然、体軀はまずしい。
後年に「乗った人より馬のほうが、まるい顔をしている」と、いわれたほどの長い顔のくせに、頭は大きく、晋作は、よく、
「頭が重うてかなわん」
と、いったそうである。
しかも、女のような撫で肩だし、事実、よく病気もしたし、痘瘡をやったときにも死にかけたものだ。
だが、こういう体質でいて、学問は藩校〔明倫館〕の鬼才といわれるようになったし、しばらくすると剣術が好きになり、好きになったかと思うと、このほうでも群を抜いた。
十一歳の正月に、こんな話がある。
晋作が座敷の前で凧をあげていると、年始の客が来、あやまって凧を踏みつけ、破ってしまった。

晋作は、この中年の藩士の前に立ちはだかり、いきなり、
「両手を突いて、あやまれ」
と、怒鳴った。
「凧なら、買ってつかわそう」
「いやだ。あやまれ」
いくら子供でも、態度がすごい。両手を細い腰に当てがい、傲然として、こちらをにらみつけている。さすがに、その藩士も、ムッとなり、
「勝手にせい」
行こうとすると、晋作は泥をつかみ、前へまわって、これを投げつけようとするのだ。
「待て、この羽織は、殿さまから拝領の品だぞ。見よ、御定紋がついとる。これを泥でよごしたなら、お前が、おとがめをうける」
叱りつけると、晋作は、せせら笑い、
「ふん、おればかりではない。そっちもおとがめをうける」
と、いった。これは当然である。それだけ藩士にも油断があったわけだから〔落度〕となるのだ。
「むう……」
藩士、つまった。

「あやまれ」
「むう……」
「早くあやまらんと、泥を投げるゾ」
仕方がなく、ついに大の男が十一の少年の前で土下座をやってしまったという。
これほどの激烈な性格を持っていて、そのくせ家柄も育ちもよく、文武の才能にめぐまれているという異常児の血は、おだやかな父母から受けついだものではない。
彼を必要とした〔時代〕が、彼を生んだとでもいうより仕方がないほど、この幕末から維新にかけて、ふしぎなほど諸方に適材適所の人物が生まれている。
西郷もそうだし大久保も然り。桂、坂本、と切りがない。暗殺が流行した時期には暗殺の名人も出て来る始末であった。
ともかく……。
こういう高杉晋作だから、常道の学問や教育に甘んじていられるわけがなかった。
明倫館では、先生たちの講義を居ねむりしながらきいていて、遊び半分に〔秀才〕の名をほしいままにしていたのだ。
彼が、彼にとって心から敬服出来た師を見出すまでは、その奔放無比な言動は藩中の〔もてあまし者〕となり、父母も、これには、いたく心をいためた。
やがて、晋作は吉田松陰という師にめぐり合う。

松陰は同じ長州藩の下級藩士（二十六石）の家に生まれ、貧苦の中に育ったが、五歳のとき、叔父・吉田大助の養子となり、六歳で叔父の家督をついだ。吉田家は、代々、兵学師範として、五十七石余をうけてきている。
松陰は、十歳になると、早くも明倫館へ出て来て、藩の子弟に教授をはじめたというから、いかに、その素質と努力が非常なものであったか知れよう。
のちに、吉田松陰は、ゆるしを得て萩を去り、九州、江戸をはじめ諸方を歴遊して見聞をひろめた。このころの松陰が、もっとも影響をうけた人物は、松代藩士・佐久間象山で、象山のスケールの大きい目でとらえられた強大な外国文明のおそるべき実状をつたえられるに及び、
「一日も、うかうかとすごすわけには行かぬ」
決意するところがあった。
ペリーのひきいるアメリカ艦隊の来航によって、
「国をひらいて外国を受けいれるか。または外国を追い払うか……」
いわゆる開国と攘夷のどちらかをえらばなくてはならなくなった幕府当局の、うろたえぶりを見た松陰は、一夜、象山の助力を得て、海外密航をはかり、捕えられて、長州へ送り返され、投獄された。
松陰が、例の〔松下村塾〕をひらき、藩の子弟たちの教育に熱中しはじめたのは、この後であるといえば、松陰もまた一種の〔脱藩者〕であるわけだ。

高杉晋作が、一日、松陰の講義をきいて驚嘆し、その門下生となったのは安政四年（一八五七）である。ときに晋作は十九歳。

以来、松陰と晋作の師弟は切っても切れぬ間柄となる。

おそらく、松陰との邂逅がなかったなら、後年の晋作は生まれなかったろう。脱藩者の吉田松陰が、のちの晋作の「脱藩」をよぶことになる。そしてまた松陰が、うまくアメリカへでも渡ってしまっていたら「松下村塾」も出来なかったろうし、この、ささやかな塾の教育によってあたためられ、やがて激しく排出された勤王革命のエネルギーも育つことはなかったろうと思われる。

高杉晋作が吉田松陰の門下となった安政四年から、勤王運動は全国に燃え上った。

三年前からこの年にかけて、幕府は、ついにアメリカやフランスとの和親条約に踏み切り、同時に京都朝廷を中心にした攘夷運動は激化した。

吉田松陰は、こういっている。

「……いずれは国をひらき、外国文明の実体にふれ、わが国の、富国強兵の大策をたてねばならぬ……」

しかし、

「いま、それをすることは危険である。外国列強は力のないわが国を思うままにあやつり、ついに我国は彼らの馭するところとなってしまうであろう」

つまり、日本の国威が確立してから外国との交渉を行なうべきで、いま、幕府が彼らの威圧の前に弱腰のまま種々の条件をうけいれてしまっては大変なことになる、というのだ。

すでに清国（中国）ではアヘン戦争その他の動乱を契機として、イギリスをはじめ諸外国の侵略がほしいままに行なわれていたが、松陰にいわせると、

「日本が断固とした態度をしめせば、いまのところは、まだ海をこえて我国に戦争を仕かけるだけの余力は外国にない」

と、いうことであった。

ただし「今のところは……」である。日本の富国強兵は急ぎに急がねばならぬ。そのためには、徳川幕府のような……いまや政治力の分散した日和見的な政権に日本をまかせておくことは出来ぬ。

天皇を中心に、指導階級たる諸国大名が結集して新しい政体を生み出さねばならぬ。

この稿で、松下村塾における松陰の教育について、ふれているひまはない。

ともかく、こうした松陰の思想は、彼が教えるあらゆる書物の講義の中に脈を打ち、それはすべて「実践」の一事に結集されて、門人たちの心身に叩きこまれて行った。

晋作をはじめとして、久坂玄瑞（くさかげんずい）、尾寺新之丞、増野徳民などの入門があり、塾は活気にみちあふれた。

晋作二十歳の安政五年——。

文学修行という名目で、藩から江戸遊学がゆるされた。

江戸で、晋作は大橋訥庵の塾へ出入りをしたり、昌平校へ入ったりしたが、

「つまらん」

学問よりも、江戸藩邸で桂小五郎や久坂玄端、それに伊藤俊輔（博文）や山県小輔（有朋）などの青年たちと天下の形勢を論じることが多くなった。

だが、晋作は、どちらかといえば仲間外れのかたちであったらしい。

一同が議論に熱中する部屋の一隅で、むっつりと厭な顔つきをしながら鼻毛ばかりぬいていたという。

この年の四月に、あの井伊直弼が大老に就任して以来、幕閣は、にわかに強力化した。

井伊は、先ず対抗勢力の水戸斎昭一派を粉砕し、幕府の日米通商条約と、将軍家定の死による継嗣に、紀州家から家茂を迎え、水戸派が擁した一橋慶喜をしりぞけた。

井伊大老の、断固たる幕政統一によって、この危機を強引に乗り切ろうとする態度は水戸派の憤激をよび、

「夷狄を追い払え」

「井伊を倒せ」

の叫びとなり、京都朝廷を擁して倒幕の旗をあげようという勤王志士たちの活動は、まさに猛然たるものに変ってきた。

井伊大老が、彼らを弾圧したのが、あの「安政の大獄」であった。

いわゆる「勤王志士」として第一陣に起ち上った英才たちは、この弾圧によって捕えられ、殪れた。

そして、この中に吉田松陰も入っていたのである。晋作も、はじめは、

「まさか……」

と思ったが、事実であった。思いあたることもある。それは松陰の倒幕計画で、

「薩摩藩の志士たちとはかり、江戸では井伊大老ほか幕閣の重臣たちを討ち、さらに京都で兵をあげよう」と、いうのだ。

松陰は、これを藩の重臣・周布政之助にはかり武器・弾薬の貸与を申し出たものである。むろん、周布はこれをゆるさなかった。

松陰の叫びは、江戸にいる高杉晋作たちにもとどいた。

「薩摩藩の一部のものがさわぎ出したからといって、たよりになるものではない。いまは幕府の威勢の強化を見て、諸藩も傍観の態度を見せているではないか。あまりにも先生は無謀すぎる」

桂小五郎たちともはかり、すぐに松陰のもとへ、

「このたびは、とどまってもらいたい」

と、手紙をやった。

松陰は、一読し、

「高杉たちは、ぬれ手で粟をつかむつもりか」
きめつけたという。
むろん、松陰は、この計画の決行だけで政権が一変するとは考えていない。ただ身を捨てて決行する一事が〔呼び水〕となって天下をうごかすことを期待していた。
こういうわけで、幕府の弾圧は吉田松陰を逃がしはしなかった。
松陰は、安政六年七月に江戸へ護送され、十月に、頼三樹三郎、橋本左内と共に処刑された。
晋作の悲嘆は非常なものであったらしい。ことに、藩から帰国命令が下り、彼は、江戸の牢獄につながれている師と別れて帰国。そして彼が長州へつく間に、松陰は刑死してしまった。
獄中の師に対する晋作の奔命ぶりは非常なもので、差入れ、面会その他にはたらき、倦むことを知らなかった。それだけに、
「あのとき、おれは脱藩をしても江戸に残り、先生の死を見とどけるべきだった」
後年、酒に酔うと伊藤や山県に洩らしたという。

この調子で書いて行っては、とても限られた枚数にはめこめない。ざっと、その後の晋作についてのべておこう。
井伊大老が、ついに水戸浪士によって暗殺された万延元年（一八六〇）、晋作は、井上平右衛門のむすめ方（まさ）と結婚をした。数え年でいうと新郎二十二歳、新婦十五歳である。

方女は貞淑な、かしこい女性で、子は生まれなかったが、夫婦仲はわるくなかった。
高杉晋作の活躍が始まるのは、このころからであって、藩庁も彼の才能をたのみ、明倫館舎長に任ぜられたのを皮切りに、同館教授、さらに殿さまの命をうけて世子・定広の小姓役となり、さらに〔番手〕として江戸勤務。二十四歳の春には藩主から海外視察の許可を得て、上海へわたり約二カ月を滞在し、外国勢力の圧迫にあえぐ清国の実状を見た。
「ぐずぐずしてはおれん」
と、彼の行動が積極的になったのは、これからである。
井伊の死によって、幕政は、再び混乱しはじめた。文久三年には将類家茂が朝廷の機嫌うかがいに京都へやって来るという形勢になってしまったのである。
長州藩を主力とする勤王勢力は、京都に結集して活発にうごきはじめた。
晋作も京へよばれ〔学習院御用掛〕という役目に任ぜられた。いうまでもなく、これは朝廷と藩との交流に彼を必要としたからの任命であったろうが、
「ばかばかしい」
あっさりと、彼は辞退してしまった。辞退して、京都藩邸へも帰らず、酒と女におぼれこんだ。
これ、一種の脱藩行為であったが、とがめるものは一人もいなかった。
いま、長州藩は〔禁裡（きんり）守護〕の役目にもつき、皇居の警衛も支配している。まさに勤王運動の主力として長藩の士は肩で風を切って京の町を歩いていたのだ。

長州の対抗馬は薩摩藩で、これも新時代に乗り遅れまいとして、朝廷と幕府の間に立ち、さまざまな政策を手ち出してはイニシアチブをとろうとするのだが、とても長州の勢力にはおよばぬ。幕府も所司代や守護職、または新選組などという浪士隊を京へ送り込んで来て、長州の倒幕運動を阻止しようとする。

暗殺、謀略の渦巻く京の町で、

「つまらぬ」

と、晋作がいうのは、このことなのだ。

日本人同志が体面も見得も捨てて、この小さな島国を世界の風波の中へ押し出して行かねばならぬというときに、陰謀と暗殺をくり返して勢力の伸張をはかろうなどという革命前夜の、無駄な、子供じみた自分の藩のうごきが、

「つまらぬ」

のである。

こんな話がある。

京へ来た将軍が、勤王勢力の圧迫によって、賀茂神社へ〔攘夷祈願〕の行幸をする天皇に供奉をしたときのことだ。

これは、いま、外国と和親条約をむすんでいる徳川政権が勤王派のいう通りになって条約を破り、外国を追い払うことに同意した、ということに表向きはなるわけだが……。

このときの将軍家茂を見て、行列が通る沿道にいた高杉晋作が、

「征夷大将軍!!」

絶叫したという。ひやかしたのではない。感激したのだ。

「少くとも、あの一瞬、天皇と将軍が行を共にして祈願されたという事実に、おれは感動したのだ」

と、のちに彼は語っている。

晋作の頭には、天皇も将軍も、長州も薩摩もなかった。

いま、日本を一丸として、これを引張って行く大きな力のみが欲しかったのである。

しかも、孝明天皇は、

「幕府も、いまは朝廷に対し何事にも腰をひくめておる。力を合せて国難を乗り切ろう」

と、もらされているし、京における幕府勢力を粉砕するためには放火も殺人もいとわぬという勤王志士たちのうごきには激怒しておられる。

それだけに、高杉晋作は苦悩せざるを得ない。長州藩の勤王運動だって、何も殿さまが命じているのではない。勤王派の政権が藩を牛耳っているだけのことなのだ。どこの藩でもそうだが、いまや、殺さま一人では自藩をおさめ切れないのだ。

晋作の、放蕩が激しくなったのも、この時期である。

高杉晋作が、一回目の〔脱藩〕をしたのは、元治元年（一八六四）一月のことだ。

これより先、長州藩は京都から追い払われている。

天皇が幕府や親幕諸藩とむすばれ、勤王派の過激な運動を排除された、といってもよい。

薩摩・会津の両藩は、この先頭に立った。武力を背景にした〔政変〕に長州はやぶれた。

しかも、攘夷の先がけとして、長藩は下関海峡を航行する米・仏・蘭の外国商船を砲撃しており、やがてアメリカ軍艦・ワイオミング号ほかフランスの二艦の報復をうけ、長藩の軍艦三隻は、たちまちに沈没し、下関砲台は、さんざんに破壊された。

晋作が急遽、京から呼び戻されたのは、このときである。

彼が〔奇兵隊〕を編成したのも、このときで、身分の上下を問わず、自藩の侍から他国の脱藩者、さらに農民町民までをあつめてつくりあげたこの〔軍隊〕は、のちに、長州藩の強力きわまる戦劇となったのだ。

さて……。

年が明けると、長州へ敗退した〔勤王運動〕は、京都奪回を目ざして燃え上って来る。

三条実美（さねとみ）など七名の勤王派の公卿も京から追い払われ、これを迎えた長州藩では、奇兵・遊撃の二隊をもって戦力の基盤とし、一時も早く京都へ進発しようという気運が濃厚となった。

いうまでもなく殿さまは反対だし、周布政之助、桂小五郎などという長藩の指導者たちも、その〔不利〕をとなえて過激派を抑えようとするが抑えきれそうもない。

いまの京都では、幕府と手をむすんだ薩摩という大藩が立ちはだかっている。ろくな軍備もなしに進発したところで、痛手を重ねるばかりであった。

晋作が殿さまの命をうけて、三田尻に集結する部隊の進発をとどめようと山口を出たのは一月二十四日である。

進発隊長は、来島又兵衛という豪傑で、これが遊撃隊をひきいて京へ馳せのぼろうとしている。

晋作は約五時間に及んで熱弁をふるい、説得にかかったが、このときは駄目であった。

来島は、断然、承知をしない。

「承知をしなければ、山口へ帰れ」

というのが殿さまの命である。

だが、

「このまま、おめおめと帰れるものか」

落たんのあまり、晋作は、そのまま大坂へ走った。すなわち脱藩である。

「そもそも、高杉のすることは、以前から藩を、君公をないがしろにする言動が多い。捕えて死罪にせよ」

という声も起って来た。

一カ月後、晋作は京において藩主の使者を迎え、帰国し、そのまま投獄された。

この牢獄の中で、彼に黙々として読書につとめている。

この間に……。

ついに、長州軍は京都へ進発した。

進発反対の周布政之助などは過激派によって失脚させられた。京都における長州軍は、皇居を守る薩摩はじめ親幕派の諸藩兵と戦って敗退した。

〔蛤御門の変〕である。

吉田松陰が、晋作と共に、もっともその将来をたのしんでいた久坂玄瑞も、このとき戦死した。来島又兵衛も殪れた。

またまた長州は敗退したばかりか〔朝敵〕の汚名までかぶってしまった。

幕府は〔長州討伐〕の命を下した。同時に、あの下関砲撃の始末をつけるため、英・米・仏・蘭の四国連合艦隊が長州へ迫った。

さんざんな羽目になったものだ。

「高杉を牢から出せ」

またも殿さまの命が下った。

晋作を藩の正使として、諸外国との和議をおこなわせようというのだ。これは、何とかやってのけた。

そして、また脱藩をしている。今度は九州へ逃げた。

幕府に対して弱腰になった藩庁に愛想をつかしたのである。そして今度は、この年の十二月に

引返して来るや、奇兵・遊撃隊をひきいて下関を占領した。

へっぴり腰の藩を建て直そうというのだ。

完全な反乱軍なのである。

しかし、もの高杉は桂小五郎と共に、長州藩になくてはならぬ存在であり、翌慶応元年九月には〔海軍興隆用掛〕を命ぜられ、同二年になると〔海軍総督〕となった。

長州へ攻めて来た幕軍は、晋作の指揮する長州兵によって、さんざんに打ち破られた。

このころになると、高杉晋作は、土佐の坂本竜馬とも通じ、長州を討伐しようという幕府に対し、あくまでも戦う決意をかためている。

そして、そのころから、薩摩と長州は歩み寄りはじめたのだ。坂本竜馬の周旋によって、両藩は握手し、薩摩は幕府からの長州出兵命令を拒否した。

高杉晋作の病患が、急激にすすみはじめたのは、この年の秋ごろからだ。

そして、翌慶応三年四月十日。晋作は、下関で死んだ。

病気は肺結核だ。

牢獄を出てから、まる三年は、文字通り東奔西走して、彼の生涯が、この三年間に凝結したかのように思われるほどにはたらきつづけた。

長州藩は維新において、もっとも多くの人材を失っている。

これは、長州が勤王革命の先鋒として悪戦苦闘を強いられた結果にほかならない。

晋作の女性関係も派手なものだが、もっとも有名なのは大坂屋の芸者・おうのであろう。
おうのは、容色にすぐれてもいないし、無智だが、底ぬけに気の善い女であったという。
肌の白い、むっちりとした肉づきの、この女を、晋作は身辺からはなさなかった。
桂小五郎が、
「あの女は、君に似つかわしい女ではない」
と、いったことがある。
すると晋作は、にやりとして、
「桂さん。食べても見ぬくせに、めったなことをいうものじゃアない」
大笑いしたそうである。
高杉の下関における遊びぶりは大変なもので、奇兵隊長として飛ぶ鳥を落す勢い、があったという。
いつも義経袴に、ぶっさき羽織をつけ、絵日傘をかざして芸妓をしたがえ、下関の町を濶歩した。
重病となってからも、
「稲荷新地へ行こう」
と、いい出してきかない。稲荷新地は色町である。
無理に駕籠を呼ばせ、これへ乗せてもらったとたんに、

「あ……いかん」
晋作は、しんそこから情なさそうな顔つきになった。うごいたとたんに脱糞してしまったのだ。
「こうなっては、もう駄目だなあ」
つい、あきらめたようである。
死を前にして、つきそっていた田中顕介に、
「もう、きまったようなものだ」
と、いう。
幕府が倒れて、新しい時代が日本に来ることが、きまった、というのである。
「その後は、どうなります?」
田中がきくと、晋作は、
「後のことまで知るものか」
と、こたえたが、彼の胸中には、さまざまな国づくりの計画がひそめられていたに違いない。
死の当日に、勤王尼僧として知られた野村望東尼が見舞に来ると、晋作は、この心をゆるした異性の友へ、

おもしろきこともなく世をおもしろく

と書いて見せた。望東尼が、それにつづけて、

住みなすものは心なりけり

書いて返すと、これを見て

「おもしろいなあ」

と、つぶやき、晋作は目をとじた。

それきり、彼の目は、もうひらかなかった。

晋作ときに二十九歳。満年齢で二十七歳余であった。

彼は、早熟であった。才能は少年時にすばらしく開花し、二十歳をすぎて老成し、だからこそ、死の前の三カ年の奮闘は、ことごとく的を射たのである。

晋作が死んだこの年の十一月に坂本竜馬が暗殺され、一カ月後には王政復古の大号令が発せられた。

新選組史蹟を歩く

私が、これまで新選組をあつかった小説を書いたのは、次の四篇である。

〔色（いろ）〕短篇―土方歳三
〔ごろんぼ左之助〕短篇―原田左之助
〔幕末新選組〕長篇―永倉新八
〔近藤勇白書〕長篇―近藤　勇

この七年間に、新選組を書くたび、私は京都へ出かけ、何度も遺跡をめぐったものだ。

新選組史蹟と子母沢寛先生

新選組といえば、なんといっても故子母沢寛不朽の史伝〔新選組物語〕を手引きとしなくてはならぬ。少年のころからの私が新選組に対する決定的なイメージをもつことができたのも、この子母沢先生の名著あればこそといってよい。

去年、亡くなられる数日前に、子母沢先生にお目にかかったときも、
「いま、八木さんのところはどうなっていますかね？」
なつかしげに眼をしばたたかれて、問われた。
八木さん……つまり、発足当時の新選組の屯所がもうけられた八木源之丞屋敷で、芹沢鴨が暗殺されたのも、この屋敷内においてであった。
子母沢先生が〔新選組〕を執筆された昭和初年には、まだ近藤勇や土方歳三の顔を見知っている古老が生きのこっていたので、
「もう少しのところで、あの人たちのはなしをききのがしてしまうところだった。私がそれこそ足を棒のようにして語りのこしをかきあつめ、新選組を書いて間もなく、そうした古老たちは、みな亡くなってしまったのですからね」
と、先生はいわれたことがある。
私が、いまの京都の、そうした遺跡の写真を撮って来てごらんにいれると、
「ほ、ほう……いま、こうなってしまいましたか……」
巨体を折りまげるようにして、熱心に、いつまでも飽かずにながめておられるのだった。

玄関がまえに往時を偲ぶ

新選組・発足当時の屯所・八木源之丞邸はいまも濃厚に旧態をとどめている。

むろん、当時の敷地は現在の数倍もあったということだし、近藤、土方、芹沢ら十三名が起居したといわれる離れの建物もいまはない。
だが、母屋はほとんど当時のもので、市電の四条大宮の一つ先、四条坊城の停留所前の祇園社の横道を南へすすむと、間もなく左手に八木邸の門前があらわれる。道端に〔新選組遺蹟〕の石碑が建っていて、植込みにかこまれた石畳の向うに、門がのぞまれる。
門を入ってすぐ右手が玄関。むかしの郷士の玄関がまえをしのばせるに充分の雰囲気が、あたりにただよっている。
八木家に葬式があったとき、近藤勇と芹沢鴨が、机をならべて弔問客の受けつけをしたという玄関が、すなわちこれである。
この母屋の一室で、芹沢鴨が土方・沖田など同士たちに暗殺された。その部屋が現存している。情婦（おんな）と共に裸体で酔いつぶれたまま床へ入っていた芹沢鴨は、血まみれとなって逃げようとしたが、せまい室内の中で、刺客たちは折り重なるようにして白刃をたたきつけた。
その刀痕が、部屋の柱の其処此処に残っている。
「芹沢はんはなあ、この、となりの部屋まで逃げておいやしたんどすえ」
と、八年前にはじめて、ここを訪れた私に、八木邸にいた婦人が説明してくれたものだ。
こうして芹沢が死に、募集した浪人も多勢参加し、新選組のかたちがととのうと、八木邸では手ぜまになり、道をへだてた東がわの同じ壬生（みぶ）村の郷士・前川荘司の大きな屋敷を借りうけて、

屯所とすることになった。

この前川邸は角地で、そのとなりに〔新徳寺〕がある。

地形は当時と変っていない

幕府に浪士隊を結成させ、これを京都まで引張って来た黒幕の清河八郎が本拠とした寺が、これである。

さて、前川荘司邸は……。

これも、八木邸などではないが、また旧態をとどめている。

前川邸は総敷地四百三十坪ほどで、長屋門のある堂々たるかまえだ。

現在は紙商の持家になっているけれども、

「できるだけ、むかしのままにしておくつもりですが……、どうも、いろいろと不便でして」

と、東京出身の主人が今度久しぶりにたずねた私にいった。

このごろは、見学者も非常に多いのだそうである。

表門を入って突当りが玄関だが、その左手に戸口があり、ここを入るとひろびろとした土間の大台所で、土間を突切ると〔内庭〕へ出る。

内庭をかこむようにして南側から東側にかけて土蔵が三つほどならんでい、この内の一つの内部で、捕えられた勤王志士・古高俊太郎が烈しい拷問をうけ、これが端緒となって、かの〔池田

屋騒動〕がおこるわけだ。

旧前川邸内の屋上・物干場へ上ると、細い坊城通りをへだてて、すぐ向うに八木邸がのぞまれる。

壬生寺は、八木邸の南どなりで、地形は当時とまったく変っていない。

もっとも当時は、このあたりを中心に人家がかたまり、あとは雑木林や村の田畑がひろびろと展開していたという。

江戸時代の残り香と島原遊廓

壬生の屯所の旧跡を見てから、坊城通りを南へ、ぶらぶらと二十分も行くと〔島原口〕へ出る。いうまでもなく、京に名高い島原遊廓の入口である。

大門（おおもん）のまわりの竹矢来や天水桶、柳の木など……そこだけを切りとって見れば、まるで舞台の書割りだ。

京都へ行けば、いまのところ、まだ〔江戸時代〕の残り香が、かなり残されている。

それとても、いまのうちであろう。

民間にあるこれらの建物はいずれも老朽しつくしているし、くずれるときはみな一緒だとおもう。そのあとで、たとえ元のままに建て直そうとしたところで、むかしのままの人（職）がなく、建築の資材そのものが全く変ってきており、住む人のこころが、むかしのものを〔不便〕きわま

るものとしか考えていないから、間もなく京の町中の風景も一変してしまうであろう。見るならいまのうちなのである。

新選組の人びとは、壬生の屯所から、よく島原の廓へ通ったものである。

近藤勇がよく通ったという〔木津屋〕ものこっているし、有名な揚屋〔角屋〕も、これはむかしのままの姿をとどめて営業をしている。

〔角屋〕だけは、ぜひ見ておくがよい。

観光バスのコースに入ってもいるけれど、それでは階下の大広間、玄関口、大台所ぐらいしか見られないから、単独で出かけることだ。

その建築の美しさ、見事さは、この短かい稿に書き切れぬ。実に大したものである。

七年前、私が友人と、冬の午後おそい時刻に角屋へ出かけ、島原の芸妓を三人ほどよんでもらい、酒をのみ、二時間ほどいて屋内をくまなく見せてもらったことがある。

会計が一万ほどであった。

いまは、とてもこうはゆくまい。

廓の西門（裏門）のあたりも、なかなか風情があってよい。

すぐ向うに山陰本線が通っていて、丹波口の駅も近い。

畑や木立も多く、西山の山なみがなだらかにつらなっていて、当時のことをいろいろ想起させてくれる景色ではある。

三条小橋、池田屋の襲撃

元治元年六月五日（現代の七月十四日）は、祇園祭の宵宮にあたる。

新選組が二手に別れ、縄手の四国屋と三条小橋の池田屋に集合している勤王志士たちを襲撃した当日でもある。

副長・土方歳三がひきいる一隊が四国屋に向い、池田屋へは、局長・近藤勇みずから九名の隊士と共に、三十余名の志士たちが会合している池田屋へ斬りこんだ。

折しも多勢の隊士が食中毒にかかってしまい、この斬込みに参加不能となったため、近藤は小勢をひきいて決死の覚悟で池田屋へ向った。

昼食のうちに、隊士たちは二人、三人と何気もない様子で壬生の屯所を出て、先斗町の町会所へあつまった。

敗れたものの悲歌がただよう

この町会所は、いまの先斗町・歌舞練場のところにあった。

ここから西へ小路をぬけ、高瀬川に沿った木屋町の通を北へすすむと、すぐに三条小橋が見える。

その西たもとに旅館の池田屋があった。

いまも旅館で、前に石碑が建っている。

このあたりは京都の繁華街の中心だけに、往時の景観をしのぶ何物もないが、しかし地形や町すじには変化がなく、そこが京都の京都たるところで、いまのところ、江戸時代の地図を持って出かけても、町すじや道すじがぴたりと合うのである。

池田屋の内外で双方が激闘をくり返すうち、所司代からも守護職からも出兵して池田屋をかこみ、志士たちはさんざんな目にあったわけだが……。

その京都守護職たる会津藩主松平容保（かたもり）の宿舎だった〔光明寺〕は、左京区黒谷にある。

吉田山の手前を右へわけ入った台上にあるこの寺こそ、江戸幕府の京都における最後の拠点であったといえよう。

敗者の拠点である。

だから、さびしい。

動乱に倒れた会津藩士たちの墓地が裏山にある。

ここには明治維新の旧蹟をたずねる人びとの足も向かない。

敗れたものの悲歌が、この墓地にただよい一つ一つの墓石に、

「これか……」

と思うような人びとの名がきざまれているのだ。

近藤勇の愛妾深雪太夫

勤王側の拠点としては、長州・薩摩両藩の京都藩邸をあげるべきか。

長州藩邸の跡は現・京都ホテルで、その東裏にあたる木屋町すじに〔幾松（いくまつ）〕という旅館がある。

ここに、この桂小五郎（木戸孝允）の愛人だった芸妓・幾松の屋形があったというのだが、そうではない。

旅館〔幾松〕は、かつての長州藩・控屋敷の跡である。

長州藩・代表たる桂小五郎が公私ともに活用していたものであろう。

この宿には、もっともらしく、桂の遺品や遺影など飾られている部屋が鴨川の河原をのぞんでいる。

幾松は三本木の芸妓であった。三本木の通りは、鴨川にかかる丸太橋の西たもとを北へ入ったところで、ここは当時、京都の花街として知られた場所だ。

桂小五郎が幾松なら、近藤勇も三本木の芸妓某を妾にしていたとかで、まじめな勇が、京都へ来てからは女あそびだけはなかなかさかんなものであった。

もっとも性格が生まじめだけに、一夜のあそびだけでは、すまなくなってしまったともいえる。

勇の愛妾として、もっとも著名なのは、島原の遊女だった深雪（みゆき）太夫、本名をおかいといって金沢の産。

このおわかを、勇は七条・醒ケ井の〔休息所〕へかこった。
おわかを廓からうけ出すための大金を、勇は隊の公金から借り、これを約一年がかりできちんと返済したそうだ。
〔休息所〕というのは〔妾宅〕のことで、幹部隊士は、それぞれに女をかこっていて、そこに家庭のやわらぎをもとめていた。
勇の妾宅がどこにあったものか……いま醒ケ井へ出かけて見ても、まさかに碑は建ってはいない。

西本願寺の新本営から大阪へ

そのころになると、新選組も壬生から西本願寺、さらに堀川通りの東、不動堂村へ立派な新本営をもうけて引きうつることになった。
皮肉なもので、この新本営へ移って二年たたぬうち、情勢は一変した。
徳川将軍みずから大政を奉還し、勤王雄藩の同盟によって、江戸幕府の栄光は、ここに消える。
京都における旧幕勢力は、いっせいに大坂へ引きはらう。

夢をふくらます二条城の景観

最後の将軍・徳川慶喜が、二条城へ在京の諸藩有志をあつめ、

「……旧習をあらため、政権を朝廷に帰し、ひろく天下の公儀をつくし、聖断を仰ぎ、皇国を保護せば、かならずや海外万国とならびたつべく、我国につくすところ、これにすぎず……」
と、政権を皇室へ返すための沙汰書を発表したのは、慶応三年（一八六七）十月十四日である。
二条城の殿舎に、この劇的な広間が現存している。
このためばかりではなく、二条城を見物することは何度くり返してもあきない。
城が美しいのは、やはり京の都にあるからだろうが、江戸時代の殿舎の景観の一典型として、時代小説などを書くものの夢をいろいろにふくらませてくれる。
二条城の周辺には、所司代屋敷、奉行所跡、諸役組屋敷跡などが碑によってわかる。こうして、情勢は鳥羽伏見の戦争にもちこまれる。
この前に、近藤勇は、高台寺の伊東甲子太郎一派の残党によって狙撃され、肩に重傷を負い、大坂城へうつされてしまった。
それで土方以下の隊士たちは、伏見奉行所へ入って他の幕軍と共に、大坂の前衛基地ともいうべき伏見の町をまもることになった。
伏見の北方、わずか三里の京都は、すでに勤王雄藩の兵力をもって制せられている。
伏見の町もふしぎなところで、建物は変っても、町すじ道すじが大体むかしのままのようだ。
豊臣時代の時代の伏見の地図をもって行って、町を歩いて見ても、およそ迷わぬ。
加藤清正の伏見屋敷の地形までも容易にさぐることができるのである。

慶応四年（明治元年）一月三日に、鳥羽街道・下鳥羽村の近くで両軍の戦端がひらかれた。
その夜。
伏見奉行所の北方にある〔御香宮（ごこうのみや）〕へ薩摩軍が陣をかまえ、どしどし大砲を撃ちかけてきたので、新選組も会津藩兵と共に、薩軍陣営に向って突撃したものだ。
奉行所から御香宮まで、ゆっくりと歩いて十五分ほどなのだが、なかなかに敵陣へ接近することができない。
これは、伏見の街路がせまい上に、道が坂になっていて、その上に薩軍の陣地がある。
新選組は、この坂道の下から突進するのだが、上から猛烈に大砲・鉄砲を撃ちかけられて、いやもうひどい目にあったものである。
そうした戦闘の模様が、いまも伏見の町を行くと、あきらかになるほど、町のかたちが〔歴史〕になっているのである。これも、いまのうちなのであろうか。
勤王軍のイギリスわたりの新鋭火砲のすさまじさを目撃した土方歳三をして、
「刀と槍だけでは、とても戦さはできぬ」
と嘆息せしめたのは、このときのことである。

イメージが摑めなくなった東京

鳥羽・伏見の一戦にやぶれた旧幕府勢力は大坂を捨てて最後の本拠たる江戸へ逃げ帰った。

江戸になると、もう、だめである。
現代の東京から当時の息吹きを感ずることはむずかしい。
宮城（江戸城）なり、上野・寛永寺の慶喜謹慎の部屋なり、そうした遺跡をたずね歩いたところで、周辺の景観が全く変りすぎてしまっているのだ。
なにしろ、江戸の名残りの一つとして有名だった日本橋の頭上へ高速道路をぬけぬけとかぶせてしまうような政治家や役人や商人たちが、いまの東京に充満しているのだから、たまったものではないのだ。
彼らのいずれもが、故郷を別にもっている。
東京へ来て、東京で稼いでいるのだから「旅の恥はかき捨て」同様なことを平気でやってのける。
これをしも〔東京人〕というべきか……。
だからむろん、近藤勇の道場〔試衛館〕の跡などは、当時の小石川・小日向柳町（こびなた）へ出かけて行って見ても、はっきりした場所はつかめないし、つかめたところで何のイメージもうかんで来まい。
新選組の前身たる〔浪士隊〕の集合がおこなわれた小石川の伝通院は、いまも往時の場所にある。
景観から何もつかめぬにせよ、新選組を小説にする場合は、一応、むかしの地図をもって歩い

て見るべきであろう。こうして、距離感を得ておかねばならない。むかしはタクシーがあったわけでもなく、バスも地下鉄もなかったのだ。

流山から板橋への距離感

江戸へ帰った新選組が〔甲陽鎮撫隊(こうようちんぶたい)〕となって甲府へ進発。途中、甲州・勝沼の戦闘にやぶれ、またも江戸へ逃げ帰った後、近藤と土方は、下総・流山へ行き、ここで一隊を組織した。

流山で、近藤勇は官軍に捕えられる。

このときの本営にあてられていた家が残っていて、この家ばかりではなく、流山の町自体が伏見の町とおなじような江戸時代の空気をたたえているのはおもしろい。

流山で土方と別れた近藤勇は、やがて、板橋の官軍本営へ護送される。

そして約二十日後。

板橋の刑場へ引き出されて、首を斬られるのである。

この刑場は現・国電板橋駅のすぐそばで、ここに近藤・土方をはじめ、維新戦争に殪(たお)れた新選組隊士の墓碑が建てられてある。

すなわち〔隊士殉難の碑〕というもので、殉難というからには、国難のためにいのちを捨てたことを意味する。勤王軍に対する賊軍ではないことを、かたちの上で証明したものだ。

この立派な墓碑を建てたのは、新選組の元隊士で、大正四年まで生き残った永倉新八こと杉村義衛(よしえ)翁である。

ここを見たときも、私は、官軍本営があった板橋の宿場跡まで歩いてみて距離感を得た。

刑場へ護送されて行く近藤勇を偶然に発見した勇の養子・勇五郎が、顔面蒼白となって後について行き、養父の最期を見とどけるまでの道すじは、現在、大幅に変り、自動車の大群が地響をあげて疾走している。

新選組敗走記

「新選組」の成りたちについて、くだくだしく書きのべる必要もあるまい。

また、徳川十五代将軍の慶喜の政権返上から、京阪の地における幕府勢力の江戸への敗走について書くことも、この稿には必要ないことと思われる。

伏見鳥羽の戦争のとき、新選組の総勢・百六十余名という。

これが江戸へついたときには、四十四名となっていた。

ざっと、次のようなものである。

局　長　近藤勇
副　長　土方歳三
副長助勤　永倉新八、原田佐之助、尾形俊太郎、斉藤一、沖田総司
調　役　大石鍬次郎、川村隼人
会計方　中村玄道、他五名
伍　長　島田魁、他八名

平隊士　西岡万助、野村利三郎、他十八名

一同は、大名小路の鳥居丹後守屋敷を宿舎として、これに入った。

近藤のみは、旧臘、刺客からうけた鉄砲傷を治療するため、神田和泉橋にあった幕府の医学所へ、入院をした。

ときに、一月二十日であった。

これより七日後の一月二十七日——。

京都朝廷では、徳川征討軍の編成が発表された。

総督・有栖川熾仁親王、参謀長・西郷吉之助以下総勢五万人余といわれる。

四国・中国・九州の大名たちの多くは、この征討軍——すなわち〔官軍〕に加わり、軍列は三道に別れて江戸へ発した。

これが二月十六日だ。

これより四日前の二月二十二日の早朝に、前将軍・徳川慶喜は、江戸城を出て、上野寛永寺内・大慈院へ移った。

官軍に対して、恭順したわけである。

本来なら、これでカタがついたということだ。

慶喜は、幕臣・勝安房守の恭順政策にすべてをゆだねたわけだが、幕臣の中にはおさまらぬも

のが、ずいぶんといる。

幕府に忠誠を誓って働きつづけてきた会津藩主・松平容保は、領国へ帰って、東北地方の諸大名たちによびかけ〔奥羽列藩同盟〕というものをむすび、官軍を迎え撃つことになった。

江戸では、上野山内にこもった彰義隊の反抗があって、慶喜が水戸へ落ちたあとは、江戸から東北、さらに北海道へかけて、旧幕府の勢力が敗走して行くことになる。

慶喜が、まだ寛永寺に引きこもっていた三月一日に、新選組は〔甲州鎮撫隊〕とあらため、甲府へ向って江戸を発した。

「戦いは、これからだよ」

と、近藤は意気天をつくばかりで、

「甲府の城を我々で守り、ここへ将軍家を移しまいらせようと思う」

などと言った。

このとき、近藤は〔若年寄格〕土方は〔寄合席格〕という、まるで、かつての大名のような身分を幕府からあたえられている。

幕府といっても、将身は、すでに政権を返上しているのだ。本来なら、こんな馬鹿げたことはないのだが、幕臣の中でも、返上したのは慶喜が勝手にしたことで、

「官軍を迎え撃つ」

という主戦論もつよい。

勝安房が、こうした混乱をどうにかまとめて江戸城開け渡しにもってゆくまでの経路には、まるで蜂の巣を突ついたような騒ぎもおきたものだ。

それにしても、甲州へ進発した新選組は、あわれである。

夢にまで見た幕臣としての立身出世——しかも大名なみの出世を、近藤は意気揚々とうけとめ、胸を張って出陣したのだ。

形は違うが、今度の大戦の〔終戦進級〕の悲喜劇に一寸似ているではないか。筆者も、降伏がきまったのに〔海軍一等兵曹〕へ進級させてやると告げられたときには、あきれて物も言えなかったものだ。

「近藤たちが江戸にいては、おれのすることの邪魔になる。まるで爆裂弾を抱えているようなものだからな」

と、勝安房が、山岡鉄太郎に言った。

勝は、一兵の血も流さず、江戸の町を戦火に包ませることなく、官軍に接収せしめようとしている。

京洛の地において、勤王運動撲滅のため鬼神のような働きをした新選組を江戸におくことは危険きわまりないことだ。

「大勢はいかんともしがたい。彼らも東山道を下る官軍に打ち破られてしまうだろうが、与える

ものだけは与えてやれ」

というので、軍用金五千両、大砲二門、小銃五百挺を、勝が出してやった。

三月四日——。

甲州・勝沼についた新選組は、早くも甲府城が官軍の手に落ちていることを知った。

このとき、新選組は江戸で新たに募集した新隊士を加え総勢百二十一人であった。もっとも進軍の途中で脱走したものも大分いたらしい。

「これでは、とてもダメだ。城を乗取られた上何十倍もの敵に刃向うというのは無茶すぎる」

と言い出す隊士も出てくる始末で、さすがの近藤も弱った。

「ともかく騙しておけ。会津の侍四百名が明朝には救援に来る筈だと言っておけ」

近藤は永倉・原田の両士をよんで言い、すぐさま、土方歳三に、

「神奈川の菜葉隊の応援を乞うて来てくれんか」

と、たのんだ。菜葉隊は幕臣部隊である。土方は、すぐに騎馬で勝沼を出発した。

近藤勇は大砲二門を据え、近くの農民たちから薪を供出させて、山の中腹や街道筋に篝火をたき、こっちもこれだけの大部隊がいるのだぞ、というところを見せたものだ。

しかし駄目であった。

戦ってみると三千対百では話にならない。

一日にして敗れ、またも江戸へ逃げ帰った。

江戸・本所二ツ目にある大久保主膳正という旗本の屋敷が、新選組残党の宿所である。

このとき、永倉・原田以下わずかに十名。甲州の戦いで逃げ出すときは、別れ別れに敵中を突破してきたので、まだ近藤は顔を見せていない。

甲州から神奈川へ飛んだ土方歳三も、まだあらわれない。

「こうなれば仕方がない。会津へ行こう。会津藩と共に戦うのだ」

と、永倉が言い出し、一同、これに賛成した。

新選組は、永い間〔会津藩御預り〕という名目で、京都における決死のはたらきは、ほとんど〔京都守護職〕をつとめていた会津藩と歩調をそろえてやってきたものだ。

ここで、永倉は〔幕府典医頭〕をつとめていた松本良順を今戸八幡近くの屋敷にたずねて、軍用金三百両を借りうけた。

そのうちに、甲州から逃げて来た隊士も、ぼつぼつ集まり、総勢二十四名、いずれも、

「会津へ行って戦いたい」

と言う。

「近藤が医学所へ帰って来たよ」

松本良順が知らせてくれたので、同志は勢揃えして、医学所へおもむいた。

「こういうわけですから、近藤さんも我々と行を共にされてはいかがですか」

永倉が言うと、近藤勇は、
「みなは、新選組の局長が誰であるかを忘れたのか。おぬしたちが勝手にきめ、局長のわしにはかるなどとは筋違いだが……しかし、これからはすべて、わしの采配に従うのなら同意してもよい」
などと威張っている。
永倉新八も原田佐之助も、顔をしかめた。
近藤はよい人間なのだが、永倉に言わせると、
「成り上り者だよ」
と言うことになる。
むかし、牛込の近藤道場で、永倉も原田も勇と共に寝起きして、剣術の稽古に夢中だったものだ。
いえば、古い同志ということなのである。
一剣をもって天下の風雲に乗じ働きたいというので、永倉たちも近藤と共に、幕府が募集した〔浪士隊〕に加わり、京へのぼった。
この浪士隊が新選組となったのだ。
その新選組の局長に近藤勇を押したてたのも、永倉や原田、土方など昔からの剣術仲間の力ぞえがあったからだと、永倉たちは思っている。

ところが、新選組の威勢が京都にひそむ勤王志士たちの恐怖するところとなり、次第に羽振りがよくなるにつれて、どうも近藤勇の言動、すこぶる怪しくなってきた。
朝、屯所へ出た永倉たちが、挨拶の頭を下げると、
「うむ……」
近藤の頭はこれにこたえて下るどころか、ぐぐっと反り返ってしまうのだ。
(お前らは、おれの家来なんだぞ)
というところが、あきらかに見える。
これで、いろいろともめ事も起きたものだが、いま、これだけの敗残の身の上となっても、まだ近藤が威張りくさっているので、
「これでは、いくら話しても無駄である。我々は、あんたの家来になるつもりはない」
ついに決裂をした。
「勝手にさっしゃい」
青ざめつつも、近藤は傲然たるものであった。
「何だ、くそ。武州の百姓上りがいい気になりやァがって――」
と、伊予・松山の若党あがりだという原田佐之助なぞは、医学所を出ると、しきりにつばを吐きちらし、近藤をののしった。
こうなれば、同じ武州多摩の生れで、子供のときから弟のように目をかけてやってきた副長の

土方歳三のみが近藤のたよりである。

二人は、下総・流山へおもむき、ここで同志をあつめた。

同じように江戸を脱走した幕臣やら浮浪人なども交えて百二、三十人は集まったろうか。

こんなことでは、結局、どうにもならない。たちまち官軍にかこまれ、近藤は流山の本営を出て、みずから官軍に捕えられた。

このときの近藤の態度は、いささかも悪びれず、

「錦旗に刃向うことはできませぬ。なれど、官軍とは、そもそも朝廷の兵か、それとも薩長の兵か——拙者にはわかり申さぬ」

と、官軍参謀・香川敬三に向って堂々と言ったという。

幕府方も薩長二藩に負けず、勤王の精神をもっている。つまるところは、この戦いは〔政権争奪〕の戦いにすぎぬ。それなのに、どうしてそちらが〔官軍〕で、こちらが〔賊軍〕なのか——というのである。

香川も笑って、近藤を板橋の官軍本営へ送るについては、よく世話をした。

四月二十五日——。

近藤勇は板橋の刑場へ引き出されて首を斬られた。

近藤、ときに三十五歳。

近藤と土方は、どこで別れたのか、よくわからぬ。

流山へついてから、二人の間に議論があって、近藤が捕えられるより先に、土方は流山を出て、会津へ向ったともいわれている。このときの二人のそばには、後年生き残った新選組古参の隊士が一人もついていなかったので、くわしい資料は残されていない。

さて——。

近藤・土方と別れた永倉新八と原田佐之助は〔精鋭隊〕というものを組織した。

前に新選組にいたこともある連中や諸藩の脱走者、旗本など約六十名ほどになった。

隊長は芳賀宜道といって、これは、もと永倉と同じ松前藩の浪人で市川宇八郎といい、幕臣・芳賀家を継いだ男である。

永倉とは若いころからの仲よしで、二人して武者修行に出かけ、下総かどこかの博奕うちを相手に、大喧嘩をやったこともあった。

副長は、永倉と原田だ。

和田倉門の会津屋敷跡へ屯営をおいた。

すると、幕府の歩兵三百を預かっている米田圭次郎という幕臣が、

「わしの方と一緒にならぬか」

とやって来た。

もとより拒むところではない。

そうこうするうち、四月十日に江戸城は、無血開城となり、官軍の手中に帰してしまう。

「おのれ!!」

激怒したが、どうにもならない。

「上野の山の彰義隊に加わるのもいいが、二千かそこらの人数では、とても太刀打ちは出来ない。やはり会津だ。もともと、おれたちは会津御預りの新選組生残りなんだから、会津へ行って死ぬ本望だ」

と、永倉が言い出した。江戸にいる幕臣たちも、どんどん会津へ脱走して行く。

精鋭隊も十一日の朝、江戸を発した。

この途中、原田佐之助が一行と別れた。

京都へ残してきた妻子への愛着にひかされ辞をもうけて江戸へ引返したが、京へもどることも出来ず、ついに彰義隊へ加わり、五月十五日の上野戦争に戦死をとげたといわれる。

が、しかし、原田佐之助は生き残っていたようだ。

明治三十九年十二月六日の夜。

愛媛県・松山市の〔伊予・農業銀行〕につとめる、大原丑太郎氏の自宅〔市外・温泉郷・石井村〕へおとずれた老人があった。

この老人こそ、原田で、大原氏は原田の実弟にあたる。

名のられて、大原老人も、びっくりした。

「兄さんは、死んだのじゃなかったので?」

「何、死んだことにしたのだ。何しろ、京都で、あれだけ勤王方の首をはねたわしじゃもの。見つかったら、いくつ首があってもたりはせぬわい」

このとき、原田佐之助は六十三歳。

老人とは思えぬ堂々たる体軀を上等の洋服とマントに包んでいたという。

「上野の戦争のどさくさまぎれに逃げたのじゃが……何せ、官軍でいっぱいの東海道を上って京都へ行き、女房子供に会うというわけにもいかなくてなあ」

越後の、どこかの港から満州へ逃げ、そこで馬賊をやっているというのだ。

「日清日露の戦争には、おれも、これで日本軍のために、ひどく骨を折って、ひそかに働いたものさ。天皇陛下のためにのう。これでまあ、罪ほろぼしをしたというわけじゃ」

一夜、語りあかし、翌朝には「帰る」と言い出した。

「どこへ!?」

と大原老が訊くと、

「どこへ?……満州よりほかに、わしの帰るところがあるかいな」

こう言って、原田は洋傘をさし鞄をさげ、ひとり松山を去った。

以後は、消息不明である。

このときの原田佐之助訪問を、後に、大原老人は、原田の妻・まさ女の遠縁にあたる渡部某に

会ったとき、語ってきかせたそうだ。
話を〔精鋭隊〕へ戻そう。
精鋭隊は、岩井を経て、小山の官軍を破り十九日に鹿沼宿（栃木県）へついた。
そこへ、幕兵をひきいた幕臣・大鳥圭介が会津藩・秋月悌次郎の一隊と合流してあらわれ、明朝、宇都宮をやっつけるという。
「よろしい。こっちも一緒に――」
ということになり、三隊合流して、宇都宮城へ攻めかけた。
このときの永倉新八の奮戦、目ざましいものがあったと伝えられる。宇都宮の城兵は、すでに官軍に降伏していたが、猛烈な攻撃に会って、ひとたまりもなく逃げ出し、三千両の軍用金まで奪われてしまった。
永倉は、このうち二千両を大鳥圭介にわたし、千両を〔精鋭隊〕の軍用金にあてた。
永倉たちは、幕田ガ原へ陣どり、壬生（栃木県）に逃げた宇都宮兵を追撃しようとしたが、壬生の城には官軍も入っている。
戦ったが、駄目だ。
「逃げろ」
というので、宇都宮から日光街道へ出て、今市へ退いた。
この今市を中心にして、攻めて来る官軍を迎え撃ち、精鋭隊は大いに戦ったものだ。

この方面へ来た官軍は、鍋島藩と土佐藩が主隊となった部隊である。
この戦いで、会津の博徒たち二十名ほどが今市と高徳のあたりにひそんでいて、やって来る鍋島部隊の隊長・鍋島嘉平の首を斬ってしまったということもあった。
とにかく、勝った。
官軍は、兵糧や火砲・弾薬を捨てて敗走した。
このとき、日光は官軍の手に落ちている。
徳川家康を祀った東照宮を官軍の手にゆだねておくことはできぬということになり、精鋭隊は、一度、会津へ行き、会津藩から援兵をもらって、日光襲撃をやろうということになった。
隊士たちを残しておき、永倉新八と芳賀宜道が馬を飛ばし、会津城下へ急いだ。
城下へ入ろうとしたが、官軍が若松城をかこんで、ひしひしとつめかけているので、どうにもならない。
これが、永倉と芳賀の運命の別れ道ということになった。
二人は、結局、江戸へ戻って来た。
引くも進むも、精鋭隊は、ばらばらになってしまったし、官軍は、会津をはじめ、東北諸藩の同盟を、政治的にも軍事的にも断ち切ってしまい、二人とも身のおきどころもなくなったからである。

八月二十三日、ついに、会津・若松城は官軍の手に帰した。これで東北も片づいたが、今度は北海道である。

八月十九日の夜。

〔東京〕とあらためられた江戸・品川の海から、旧幕府の軍艦八隻が、二千余の兵を乗せて、脱走した。

これをひきいるは、旧幕府・海軍総裁・榎本釜次郎（武揚）である。〔新政府〕の言うことは、どうしてもきけぬというわけであった。

この海軍は、途中房総半島沖で暴風雨に会い、各艦離散し、坐礁破壊する艦もあって二隻を失った。

十一月十一日、北海道・箱館（函館）へ到着した。

この途中、奥州を転戦していた新選組の土方歳三・野村利三郎らをはじめ、あの大鳥圭介も、仙台湾へ入った榎本艦隊へ加わり、総勢二千五百余名となった。榎本らは、北海道を占領し、新政府をたてたものである。

幕臣として当然のことであったろう。

徳川慶喜は、我から進んで〔政権〕を朝廷に返上したのである。

このときには戦争が起きていたわけではない。だから将軍位を捨て、幕府を解体した徳川家は、薩摩や長州と同じ一個の大名として〔新政府〕に参加できるのが本当なのである。大義名分は見

事にたっている。

なればこそ、慶喜も決意をして政権の座から下りたのだ。しかるに、勤王派は、あくまでも徳川の息の根をとめてしまおうとした。

これも当然といえようか——。

何しろ、戦国時代の再現となったわけであるから、新らたに〔政権〕の座につくものは前の政権をつかんでいたものを徹底的に討ちほろぼしてしまわなくては安心出来ない。

口では〔勤王〕をとなえていても、実体はむかしと少しも変りがない。辛うじて西郷吉之助と勝安房守が力を合わせ、江戸を無血開城したことのみが、近代国家として第一歩をふみ出した、この〔明治維新〕という革命にふさわしいものであったといえよう。

北海道も、翌明治二年五月十五日——官軍の手に帰した。

降伏がきまってから、土方歳三は同志数名と共に官軍陣へ斬込み、戦死をとげた。

このころ、永倉新八は、江戸の松前藩屋敷に潜伏をしていた。芳賀宜道は死んだ。もと幕臣で官軍の手先になって脱走した幕臣を捕えたりしていた藤野亦八郎というものと争い、藤野の部下に斬殺されたのである。藤野は、芳賀の妻の兄であったが、

「どうぞ、夫の敵を討って下さいまし」

と、芳賀の妻女が新八にいうのだ。

「よし」

永倉もうけ合ったが、外へ出ることも出来ない。官軍の探索がきびしい上に、永倉の新選組における剣名は天下に知られたものである。見つかったら最後だ。

「江戸においては危い。福山へ逃げろ」

と、松前藩家老の下国東七郎がすすめてくれたので、明治三年の春、永倉は、ひそかに江戸をぬけ出し、福山へ逃げた。

このころには、新政府は令を発し、

〔私心をもって人を殺すことはならぬ〕

などといっているが、だからといって気がゆるせるわけのものではない。

福山は、北海道の福山だ。松前藩の城下町だ。ここで、永倉は、藩医杉村松柏の娘・米子と結婚し、杉村義衛と名をあらためた。

明治十五年永倉は樺戸監獄の剣術師範となった。

もう、大手をふって歩ける新時代が来たのである。

十九年、辞職。

のち、東京へも来て剣術の道場をひらいたりしたが、結局は北海道へもどり、小樽市へ住みつき、大正四年一月五日、七十六歳の長寿をたもち、永眠した。

永倉新八は、自由になってから諸方を歩きまわり、近藤や土方の墓石を板橋刑場跡に建てたり、京都へおもむき、新選組時代に島原の芸者・小常に生ませた娘の磯子にめぐりあったりした。

永倉などは、新選組生残りのうちでも、もっとも幸福な生涯を終えた人物だといってよいだろう。

生き残った隊士たちも、まだいるが、書きのべる余裕がない。

筆者は今年初夏、北海道へ遊んだ折に、永倉新八自筆の『英名録』というものを見ることができた。これは、永倉が明治になってから、諸方の剣道家と試合をした折、相手の人々に署名をしてもらった帳面である。

長さ二十センチ、巾十五センチほどの、小さいが部厚いもので、第一ページに、次のように記されてある。

神通無念流・岡田十松門人
旧会津藩御預・新選組副長助勤
永倉新八事杉村義衛

「おれは、朝廷に弓をひいた賊軍なんかじゃアないのだ。おれは、京都の治安を守るため一剣をもって天朝のために働いたものなのだ」

という永倉の誇りが、この文字の中から、ひしひしと感じとれるような気がする。

聞書　永倉新八

〔新選組〕の隊士たちは、局長・近藤勇、副長・土方歳三をはじめ、維新動乱の最中に一命をかけ、一剣をもって闘った人びとだけに、小説にしておもしろい人物が多い。

永倉新八もその一人であるが、この人は、蝦夷（北海道）松前藩の藩士の子に生まれた。父親の永倉勘次は、百五十石どりの〔定府取次役〕をつとめてい、代々、松前侯の江戸屋敷・勤務であったから、新八は江戸の水で産湯をつかい、江戸で育ったのである。

それだけに、江戸の気風を身につけていて、新選組へ入ってからの行動も、まことにさわやかなものであった。

新八の剣術は、近藤勇が、

「真剣で立合ったら別だろうが、道場の稽古では、とても永倉君に歯が立たぬ」

といったほどに、天才的なものであったらしい。

江戸人らしい物事にこだわらぬ恬淡たる性格のもちぬしで、

「そうした性格が、あの人を生き残させたんでしょうな」

と、亡き子母沢寛氏も、私に、そうもらされたことがあった。

私が、永倉新八を主人公にした小説〔幕末新選組〕を書いたのは、もう七、八年も前のことになる。

私どもが〔新選組〕を書く場合、なんといっても、子母沢氏の名著〔新選組始末記〕のお世話にならなくてはならない。

これは子母沢氏が若きころ、それこそ体力にものをいわせ、いそがしい新聞社勤務のかたわら、何度も何度も京都へ行かれ、新選組ゆかりの場所を綿密に調査され、当時のことを知る〔生き残りの人びと〕をさがしては、たんねんに聞書をとられたものが、あの〔始末記〕となったわけだ。

「もう一歩というところでしたよ。もう一歩、遅れていたら、生き残りの人たちは亡くなってしまいましたから、はなしをきくことができなかったでしょう」

しみじみと、子母沢氏がおっしゃったことがある。

私が永倉を書くにあたって、子母沢氏は何日もかかり、実に懇切な指導をして下すった。これは何も私のみにかぎったことではない。新選組を書く人たちに対しては、

「私で、お役にたつことでしたら……」

惜しみもなく、素材を提供されたようである。

〔幕末新選組〕は、家の光社で出している〔地上〕という雑誌に連載したものだが、同社の札幌駐在員から、

「永倉新八のお孫さんが、札幌に住んでおられます」

と、知らせて来たので、私はすぐさま、編集部のMさんと共に、北海道へ飛んだ。

永倉新八は、維新動乱に生き残ってのち、北海道・小樽へ住みつき、大正四年一月五日に、七十七歳の長寿をたもち、世を去った人物だ。

死因は、虫歯の治療をこじらせ、骨膜炎から敗血症を引き起した。それがいのちとりとなったらしい。

「とても痛かったらしいのですがね。じじいは、いささかの苦しみをもうったえませんでしたよ。これは、子どもごころにおぼえています。病中、絶えず微笑をうかべておりましてね」

と、札幌でお目にかかった永倉新八のお孫さんにあたる杉村道男氏は、私に、そう語られた。

道男氏は当時、六十をこえておられた。

そして、祖父・新八のことを「じじい」とよばれた。そしてそのよび方は、いかにも江戸のころをおもい起させるものであった。

当時、杉村道男氏は、たしか札幌のH大学につとめておられたようだ。数年前に同氏は亡くなられたが、小柄だったという祖父・新八とは反対に堂々たる体軀のもちぬしであった。

「じじいは、江戸から北海道へ逃げて来まして、以前の松前藩の藩医で杉村松柏（しょうはく）のむすめの米子と夫婦になったのです。ええ、養子というわけでして、名前も杉村義衛（よしえ）とあらためました。それで、私の父の義太郎が生まれたわけです。ええ、米子。つまり私の祖母なんですが、とても、お

しゃれでね。ばばあになってからも、うっすらと白粉なぞをつけていたのをおぼえています。やはりその、大名の家の、つまり松前の殿さまの侍医をしていた人のむすめですから、見識高いし、それにおねいりでね。じじいは、いつもやりこめられていましたよ。

ま、そういうこともあって、明治になってからも、じじいは東京へ出たり、あっちこっちをまわりまして、好きな剣術をやって暮していたようです」

といいながら道男氏は、当時の新八が試合をおこなった相手に署名を請うた帳面〔英名録〕数冊を見せて下すった。表紙には新八の筆で〔神道無念流・岡田十松門人――旧会津藩御預、新選組副長助勤、永倉新八改、杉村義衛〕と、堂々としたためてある。

これは道男氏が、父・義太郎からきいたことだそうだが、新八は晩年に、

「なあに、明治維新なんてえものはね、つまり薩長と徳川の争いさ。いまのような文明開化はどっちにしろやって来たんだ。時勢というものだから、薩長だろうが徳川だろうが同じだね」

そういっていたそうである。

明治十年の西南戦争が起って間もなく、永倉新八は、北海道樺戸（現・樺戸郡月形町）に新設された監獄の剣道師範としてまねかれたことがある。

この監獄では、所員のみか囚人たちへも、精神修養のためとあって、剣術の稽古をさせたそうな。おもしろい監獄ではある。

杉村道男氏は、はなしの合間合間に、

「イヤ、イヤ、イヤイヤ」
という間投詞をはさむのが癖であった。
「どうも、どうも」
とか、
「いやはや」
とか、
「まったく」
とか、いろいろな意味に、この「イヤ、イヤ」はつかわれるのである。
永倉新八は、道男氏が、十四、五歳のころまで生きていたそうな。
「私のじじいは、なんですなあ、つまり剣術一方の男でして……あとのことは何もできぬというわけでして……イヤ、イヤイヤ……ですからその、維新後は、ずいぶんと貧乏をしたようですが平気なものだったらしい。暇さえあれば竹刀をかついで諸所方々へ稽古をつけに出かけたものです。ばばあと夫婦になって、私の父が生まれてからも小樽に落ちつけず、妻子をつれて東京へ行き、なんでも浅草の北清島町に住んで、そこを根城に、東京中の道場をまわっては剣術をやったんですなあ。好きなんです。とにかく、剣術が……ふしぎなじじいでしたよ、イヤ、イヤイヤ」
この前後に、永倉新八は、おもい出もふかい京都をおとずれ、新選組で活躍していたころ、島原の芸妓・小常に生ませたむすめの磯子にめぐり合ったりしている。

すでに小常は亡くなってい、磯子は〔尾上小亀〕の芸名で女役者となり、大阪で大評判をとっていたそうな。
磯子が生まれたときは、京都から敗走する幕軍と共に江戸へもどり、諸方に転戦して〔官軍〕と戦っていた新八だけに、成長したわがむすめをはじめて見て、びっくりしたらしい。
このはなしにふれると、杉村道男氏は、
「イヤ、イヤイヤ……」
と、ことばをにごしてしまわれるので、私は深くきくことをやめた。
磯子は、長生きをして神奈川県・藤沢市で亡くなったともいう。
永倉新八が、かつての同志・近藤勇ほか隊士の墓碑を、近藤が刑死した板橋刑場跡にたてたのも、この東京時代であった。
これは〔新選組隊士殉難の碑〕である。殉難とは、国難のために一命を投げうったことを意味する。
だから永倉は、この墓碑をたてたことによって、新選組は朝敵でも賊徒でもないことを世間に証明したことになる。寄附も相当にあつまったと見え、現在も板橋に残る、この墓碑はなかなか立派なものだ。
この間に、北海道の樺戸監獄へ赴任したり、また東京へもどったりしていたらしい。
永倉が、一家をあげて北海道へもどり、小樽市に永住することにきめたのは明治三十二年夏の

ことで、ときに永倉新八は六十一歳。長男・義太郎のほかに、ゆき子という娘も生まれていた。

義太郎は、小樽で土木建築の仕事をはじめ、のちには帝国興信所の支所長になったり、北海ホテルの取締役になったりして、いわゆる小樽の名士の一人になった。

老いた永倉新八にとって、孫の道男は、文字どおり「目に入れても痛くない」存在であって、

「道男、剣術をやれ、剣術を……」

すすめてやまない。

当時をかえり見て、杉村道男氏いわく。

「ところがですな、父の義太郎は柔道をやっていましてね。ですから父は私に、これからはもう剣術の時代ではない。柔道をやれ、としきりにいうのですな。じじいはじじいで、柔術なんぞいくらやっても何の足しにもならんという。間にはさまって子供ながら、実に困ったもんです。

イヤ、イヤイヤ……じじいはね。私が柔道をやるとゴキゲンナナメになってしまい、小づかいもくれぬし、飴玉も買ってくれない。

父は父で、柔道をやるなら小づかいをやるというので、いやどうも、困りました。

でも結局は、じじいのいうとおりになりましたよ。私がさよう、十二、三のころですかなあ。じじいは私を、小樽の水天宮の境内へ引き出し、よく稽古をつけてくれるのですが、……イヤ、イヤイヤ。たまったものではない。普通の竹刀の上に皮袋をかぶせた重いやつで、防具も何もつけぬ素面素小手で、ビシビシとなぐりつける。まったくどうも弱りましたが……しかし、そのあ

とでもらう小づかいがたのしみでしてなあ」

老いてからも永倉は、諸方へ稽古や試合に、よく出かけたそうだ。道男氏も、そのお供をさせられたらしい。

札幌のH大学へもよく出かけたが、六十をこえた永倉新八が、H大の道場へ立ち、学生たちに、

「さあ、みんな順番にかかっておいで」

こういって竹刀をかまえると、それまでの、よぼよぼとして、まがった背すじにぴいんと鉄線が入ったようになったという。

学生たちは防具をつけて、つぎつぎに打ちかかるのだが、永倉は稽古着一枚を身につけたきりで、

「さあ、来い。さあ来い」

ぽんぽんと、おもしろいように打ちすえてしまった。

「年を老ってからの、じじいの口ぐせは、わしゃあ、しあわせものだよ……と、いうのでしたよ。よっぽど剣術が好きで、その好きなことを死ぬまでやっていられたからでしょうなあ」

と、道男氏はいわれた。

「じじいが亡くなるすこし前でしたかなあ……小樽で、父が経営していた劇場へ、よく活動写真や芝居を見に出かけたものです。

はあ、いつも孫の私がお供でね。いつでしたかなあ、芝居がハネまして下足番のところへ出て来ると、非常に混雑しておりましてね。帰りを急ぐ見物の人たちが先を争って履物を取ろうとするわけ。そこで、じじいがですな、よろよろしているのです。まったく、よぼよぼのじじいに見えるのですな。ま、そのとおりなので。

するとですな、土地の若いやくざが五人か六人、おもしろがって、じじいを小突きまわすのですよ。私もたまらなくなってね、じじいが可哀相で……じじいは、だまって、よろよろと小突きまわされている。

そのうちにですな、じじいの背すじがぴいんと立ったとおもったら、じじいが、低いけれども肚の底からひびき出たような気合を発して、ぐいと、やくざどもをにらみつけたんですな。

するとね、もう、やくざどもは、いっせいに青くなって立ちすくんでしまい、ガタガタとふるえているのですよ。結局、コソコソと逃げてしまいましたが……子供ながら見ていて私も、さすがに違ったもんだな、とおもいましたよ。そのころはもう竹刀をもたなくなってから久しかったので、私も、じじいはすっかりおとろえている、と、はじめはおもっていただけに、ちょっと、びっくりしましたよ」

道男氏が、

「おじいちゃん、強いね」

うれしそうにいうと、永倉は鼻の先で笑って、

「あんなのは屁みたいなものだよ」

と、こたえたそうである。

それはそうだろう。近藤勇も一目を置く名剣士で、池田屋の斬込みから鳥羽伏見の戦争に至るまで、新選組の血闘のほとんどに参加している永倉新八なのである。

「じじいは、酒が好きでしてね。酔って上機嫌になると、さあ見てくれ、といいまして、ぱっと着物をぬぎ、下帯ひとつの裸になってしまい、腰のあたりを手で叩きながら、さあ見てくれ、この通りだ、と得意になる。その腰のところには弾丸の痕が残っていました。維新のさわぎのときの、どこかの戦いで受けた鉄砲傷なのでしょうが、じじいは、この傷の痕をぴたぴたと叩いて、わしは、これでも御国のためにいのちをかけてはたらいてきた。この傷痕は、わしの誇りだ……と、威勢のよい声を張り上げたものです」

祭りのときなどは、小樽の住之江町の遊里へ、少年の道男をつれて行き、芸妓をあげて大さわぎをする永倉新八であった。

「ばばあは、そんなときいやな顔をしましたが、父は気前よく、さあ行っておいでなさいと小づかいをじじいにやっていましたよ」

杉村道男氏は、なつかしげにそう語られた。

永倉新八は、息を引きとる前に、

「悔はないよ」

の一言をもらし、莞爾として眼をとじた……というのは、私が小説で創作したラストシーンである。

壮烈なる孤忠——松平容保

会津・若松二十八万石の最後の殿さま松平容保の肖像写真が、現代も数枚のこされている。どの写真を見ても、文字通りの眉目秀麗な美男子そのものであって、彼が〔京都守護〕の役目に任じていたころ、陣羽織に籠手、臑当をつけ、陣太刀をよこたえた写真があるけれども、容保のやさしく美しい容姿が、そのいかめしい武装とは全く異質のものを感じさせるほどだ。体軀も細い。少年のころから病身であったというから当然のことなのだ。

しかし、この細い肉体の底には、あの幕末の動乱に生きた勤王佐幕両派の人物中、誰にもおとらぬ理智のかがやきと不屈の〔さむらい精神〕がひそんでいたのである。

彼の少年時代における挿話は、あまりつたえられていない。

彼は、美濃（岐阜県）高須三万石の城主・松平義建の子に生まれ、銈之允とよばれた。

この高須の松平家は、いわゆる〔御三家〕の一つ、尾張家の分家になっている。

尾張家二代・大納言光友の次男・源四郎義行がその藩祖で、義建は十代目にあたるわけで、三万石の大名でも家柄はすばらしく、官位も高い。

この家は、いうまでもなく長子の義比がついだのだが、六番目の子に生まれた銈之允は、やが

て会津・松平家へ養子に入ることになる。

銈之允が養子に入ったのは弘化三年（一八四六）のことで、年齢わずか十二歳であった。

六年後の嘉永五年になりて、養父・忠恭（ただやす）が死去し、銈之允はここに、松平肥後守（ひごのかみ）容保として、名実ともに会津藩九代目の藩主となった。

ここで会津藩につき、いささかのべておかねばなるまい。

会津（福島県）若松の城は、蒲生・上杉氏を経て、徳川幕府によって天下統一が成るや、二代将軍・秀忠の第四子・保科正之（ほしなまさゆき）が入り、これが会津・松平家の祖となったものである。

保科正之が、三代家光、四代家綱の徳川将軍をたすけ、幕府政治をゆるぎないものとするべく精力的な活躍を見せたことはよく知られている。

正之が、幕府閣僚たちと共に改訂した〔武家法度〕二十一カ条というものをよむと、これはむろん徳川の天下繁栄を願うためのものではあるけれども、行文には、おのずからなる〔きびしさ〕がみなぎっている。

つまり、幕府も大名も共に歩調をそろえ、

「世をおさめるものは、みずからをきびしくいましめねばならぬ」

という意気ごみが、あきらかに見てとれる。

正之亡きのち、以後二百年の間に、徳川幕府は変転する時流におぼれたり押し流されたりして、次第におとろえて行くのであるが、

「会津藩のみには、藩祖・正之以来の伝統というものがきびしく受けつがれ、それが、幕末に至り、最後の藩主・松平容保によって開花したのです」

と、会津人は誇る。

つまり、それほど、この最後の藩主の人生は、活動は、すばらしいものがあったからだ。だが、そのすばらしい開花は、まさに悲劇的な結末を見ることになった。

松平容保が幕府の政治に参与し、〔京都守護職（しゅごしき）〕という大任をあたえられたのは、文久二年（一八六二）閏八月一日のことだ。

ちょうど、容保は病気中でもあって、

「将軍家の命とあらば、何事にせよ、おうけするのが藩祖からの家訓でもあるし、つつしんでお受けするべきであるが、自分のような才もうすく、あまり躰も丈夫でないものが、このような大任に当り、もしも失敗のあったときは一身一家のあやまちではすまぬことになる。また、我藩は東化に僻在（へきざい）していて、家来たちも、おおむね京都の風習にくらく、ひいては、じゅうぶんなるはたらきも出来かねよう」

と内命が下った時には、ただちに固辞した。

殿さまばかりではない、会津藩の家臣たちも、みな大反対であったといえよう。

何しろ、大変な時代となってきている。

十年前に、ペリイ提督のひきいるアメリカ艦隊が江戸湾へ入港してからというものは、騒乱また騒乱の世相であった。江戸幕府が欧米諸国の威圧に負け、外国と通商・和親条約をむすんでからは、目のあたりに見る外国列強の文明――ことに軍事的装備のすばらしさ、おそろしさは、幕府のみか、諸大名たちをも軍備拡充に狂奔させたものである。

こうして、軍事的な力をもった大名、すなわち薩摩、長州、水戸、土佐などの雄藩に対し、もはや幕府は昔日の威風をもって、これを従属せしめるだけの軍事力も政治力も持ってはいない。

あの〔勤王運動〕というものが、

「夷狄を追い払え!!」

という〔攘夷論〕をスローガンとして諸方に起こり、革命運動をおこなう勤王志士や浪人たちが続々と、天皇のいる京都へあつまり、血で血で洗う態の陰謀や暗殺が皇都を中心に過巻きはじめた。

これを弾圧したのが、ときの大老・井伊直弼であり、井伊をたすけて〔開国〕の立場から幕政をたて直そうとしたのが、松平容保である。

井伊大老が、水戸浪士の襲撃をうけて死んだのは万延元年（一八六〇）だが、このとき、松平容保は二十六歳の若年ながら、事件後の幕府と水戸藩の確執を見事に裁停し、

「中将には、これより、時折は登城して、遠慮なく年寄どもと相談するように――」

聰明だが、十四代徳川将軍となってからわずかに二年、激動する時代、ゆらぐ幕政を心痛する

姿が、それこそいたましいほどに見える十五歳の将軍・家茂から、親しく内命があった。

以来、この年少な将軍が会津藩主によせる信頼は絶大なものとなって行ったようだし、

「あの上様の御顔を見ると、いかなる難事にも、身をもって当ろうという気持になってしもうてな」

と、容保自身も洩らしている。

とにかく、井伊大老の死後は、京都へ入った薩摩、長州、土佐などの勢力が先を争って朝廷とむすび合い、もう幕府のいうことなどに耳を借そうともしなくなってきている。

「幕府を倒せ!!」

「夷狄を追え!!」

の叫びをあげ、勤王志士と称する浮浪の徒も、どさくさまぎれの混乱に乗じ、徒党を組んで市中を横行して、金品強奪、婦女暴行、佐幕派暗殺など、京都はもう目もあてられぬ状態となった。こんなときに、幕府から京都へ派遣されている所司代の酒井忠義などは、あわてふためいて二条城へ逃げこむというありさまである。

幕府は憂慮した。

〔京都守護職〕という役目を新たにもうけ、皇都の治安にあたらせようとしたのも、こうしたわけからで、幕府閣僚ばかりか、将軍が、もっとも強く、

「会津中将を任ぜよ」

と、いい出してやまない。

ことに、この年の八月、薩摩藩の行列が武州・生麦村を通りかかったとき、行列の邪魔をしたという理由で通行中のイギリス人を斬殺した事件があり、

「薩摩藩は攘夷のさきがけをした」

と、朝廷では大いによろこび、薩摩藩をもって京都守護の役目にあてようといい出す始末であった

一刻も猶予はならない。

幕府は、越後・福井三十二万石の藩主・松平慶永（当時、隠居中）をもって、会津を説得させた。

慶永もまた新設された〔政治総裁職〕についたばかりで、同じく〔将軍後見職〕となった一橋慶喜と共に、

「力を合せてもらいたい」

と、松平容保への勧誘は〔頻繁日夜に絶えず〕と、物の本に記されている。

結尾、容保はひきうけることにした。

慶永の熱望もさることながら、

「お年若な将軍家のことを思えば起たざるを得なかった」

のであろう。

これをきいて、家来たちはおどろいた。

会津の国もとから、西郷頼母、田中土佐の二家老が和田倉門内の江戸藩邸へ駈けつけ、

「いまや大公儀のおとろえ方は一様のものではござりませぬ。まことにもって至難の局。ことに京都守護の御役目などとは、俗に申す薪を負って火を救おうとするようなものにて、おそらく労多くして功なしの結果と相なりましょう」

必死で押しとどめようとした。

むりもない。

井伊大老が勤王派の蠢動を弾圧し、さらに暗殺されてから、わずか三、四年しかたっていないのに、今や、井伊家は十万石を削られて退転し、

「もっと、ひどい罰をあたえよ!!」

などと、朝廷は幕府に命じてきているありさまである。

このような情勢のうちに、京都へ上って行き、朝廷や勤王大名と幕府との間にはさまれながら直接に難局をさばいて行かねばならぬ〔御役目〕なぞを殿さまが引きうけてしまっては、会津二十八万石の将来がどうなってしまうことか……。

家来たちの心痛も当然であったろう。

金もいる。

役料として五万石、その他の費用も出るわけだが、とても足りたものではない。事実、この役

目についたために、会津藩の財政は全く底をついてしまったものだ。

このとき、容保は家老たちに、こういった。

「ようわかった。なれど聞くところによれば、はじめ、余が再三にわたって固辞したのは、一身の安全をはかるため、と、評判するものがあったときく。そもそも会津藩には宗家（徳川将軍）と盛衰存亡を共にすべしという藩祖公の遺訓がある。ただ、余が不才のために、万一の失敗をおそれただけのことであって、いやしくも安きをむさぼるとあっては、お受けするより仕方もあるまい。どちらにせよ、天下国家のためにはたらくことじゃ。かくなっては、余もみなのものも、心を合わせ、共に京都の地を死場所といたそうではないか」

殿さまに、ここまで決心されたら、もう何もいうべきことはなかったようだ。

容保は京へおもむくに先立ち、田中土佐（家老）野村左兵衛（公用人）など心きいた数名の家臣を京都へやって下準備をさせると同時に、大庭恭平という家臣に特別の密命をあたえ、情勢をさぐらせた。

何しろ、そのころの京都のありさまというものはひどいもので、こんな話も残っている。

薩摩、長州などの勤王大名や、その藩士たちのうごきは別として、この天下の動乱に乗じて一旗あげようという自称勤王浪士の中には、会津藩の所在さえも知らず、

「かいず藩とは、どこの大名だ？」

と、いい出すやつどももいたそうな。

大庭恭平は、みずから、こういう連中と交際し、金や酒をふりまいて彼らの歓心を買うと共に、次第に彼らを指導するようになったという。

そして、この浮浪志士たちの中には、やがて会津藩の立場をよく了解し、容保が事破れて会津へ帰り、官軍を迎えて若松城へたてこもったとき、

「死にに来ましたよ」

ひょっこりとあらわれ、会津兵と共に戦って死んだものが数名いたときいている。

この年の十二月二十四日の朝、松平容保は藩兵をひきいて京都へ入った。

京都では、先に京都守衛を命じられて数々の失敗を演じている彦根藩や、二条城へ逃げこんだ所司代などを見ているため、市民さえも、

「田舎大名が、どんな間ぬけた姿を見せるか……」

馬鹿にしているものが多かったらしい。

ところが、まことに威風堂々たる行列であって、馬上に凛然たる殿さまをかこむ行列は一里にもおよび、殿をつとめる家老・横山常徳をとりまく儀従だけで五十人におよんだというから、会津藩が二百年の間に培った士風、その底力の全貌を遺憾なく発揮したものと思われる。

それでいて松平容保は京へ入るや、すぐさま、ときの関白・近衛忠熙をおとずれて天機をうかがうなど、することなすことに少しの隙もない。

また近衛関白も、老熟な朝臣であって、勤王運動さかんな時流に巻きこまれ、熱に浮かされた

ような過激派の公卿たちとはくらべものにならぬ人物であった。

だから、容保の、

「ただいまの急務は、日本国内の人心一和が何よりの先決で、その人心一和は主として公（皇室）武（将軍）の一和であり、それが欠けましては、いかなる上策がありましょうとも、実行はむずかしいと存じまする。これに反し、人心一和すれば、いかなることもかなわぬことなし。容保、不肖ながら公武一和のため、死をもってこれに当る決心にござります」

との挨拶に、関白はふかくうなずき、後、御所へ参内して孝明天皇に、

「会津中将は、当今まれなる至誠の人物と見うけました」

と、つたえた。

松平容保が、はじめて孝明天皇に拝謁をしたのは、翌文久三年正月二日である。

天皇は、前に近衛関白から容保の人柄をきいておられたので、非常な期待をもたれて容保を謁見されたのである。

（まさに近衛が申した通りの人物である）

たちまちに好感を抱かれ、特に緋の御衣を下賜され、

「戦袍（せんぽう）か直垂（ひたたれ）につくり直すがよい」

と、いわれた。

こうしたことは、かつてないことであった。

天皇が、御自分の着ておられるものを手ずから武士にたまわるという、この一事をもって、容保が、このはじめての謁見だけで、いかに天皇のふかい信頼を得たかが判然とする。

天皇と現将軍をつなぐ一つの楔は、天皇の御妹・和の宮が将軍夫人となることによって生まれたが、これは、幕府の強引な政策が実現したものであって、むろん、天皇はよろこばれていない。

しかし、いま松平容保は公武をむすぶ、もっとも大きな楔となり得たわけだ。

ときに容保、二十九歳。

容保が「守護職」として成すべきことは山積しており、そのどれもが急を要するものばかりであったが、何よりも先ず、皇都の治安をととのえねばならない。

同時に、天皇家の経費についても、旧習を廃し、物価の高騰に沿って充備することを幕府に建議した。

こんなことは、もっと何年も前にしておかねばならぬことなので、手ぬかりもよいところなのだ。つまりそれほど幕府の政治は新しい時代に無感覚なくせに無駄が多く、統一を欠いていたことになる。

皇室への経費がまずしければ、いきおい公卿たちも薄祿であって、永い間、内職をして暮していた公卿たちも多いし、こうした鬱憤がつもりつもっていたところへ、攘夷論がおこり勤王運動が燃えひろがったのだから、公卿たちがこれに乗じ、

「幕府を倒せ!!」

となるのも、当然なのである。

容保が入京してから、公卿たちもおとなしくなったようだが、何としても、すでに時期を失した感がある。

相変らず、暗殺の絶間はなく、後見職の一橋慶喜の旅宿へ生首が投げこまれたりした。

こういうわけだから、幕府に協力しようとする公卿たちもうかつな言動をしては命が危くなるということだ。

幕府も一応は、

「外国勢力を追い払え!!」

という勅命をうけたまわってはいるが、だからといって、すでに条約をむすび日本国内に入って来ている欧米列強の威力に対して反抗することなど、もってのほかのことだ。

勤王派の中でも、すでに将来を見こし、外国との交際の必然性を知っている連中でさえ、

「とにかく幕府を倒すまでは攘夷の旗をかかげておかねばならぬ」

というので、幕府が朝廷と外国との板ばさみになる苦痛を利用するのだ。

こうした中にあっても、容保はたびたび躰をこわし、病床についている。

それでいて、することは実にてきぱきとしたもので、京都守護の責任は、

「何事も自分一身にある」

といいきり、むずかしい事件が起こるたびに、他へ責任を転嫁したり、逃げたりするようなことは一度もなかった。

孝明天皇の信頼はふかまるばかりで、容保が軽い病気にかかったりすると、それが回復するまでは、

「中将の身に万一のことあらば、今後の日本の行末にもかかわることになる」

居ても立ってもいられない様子をお見せになったという。

容保は、

(今だ!!)

と、思った。

(今こそ、将軍家が京都に来られて親しく皇室をまもり、世情をととのえるべきである)

勤王派は、

「何月何日に外国勢力を追い払え」

と、攘夷の月日を決めろ、などと無謀なことをいい出す。ことに長州藩は公卿の三条実美(さねとみ)を押したて、過激派の朝臣を結集して非常な勢いをしめしはじめてきている。

容保にしても、幕府が、あまりにも外国列強に対して弱腰なことを、かねてから苦々しく思っていたことは事実だ。

「横浜、長崎、箱館の三港のみを外国にひらき、その他の開港要求は拒絶し、後に期を見て外国

に出て行ってもらおうではないか」

という、しごく当然な容保の言葉を実現させるためにも、将軍上洛は一日も早いがよい。

この年の三月、将軍・家茂が入京してきた。

天皇は、この義弟にあたる徳川将軍をはじめて見て、

「立派な、よき将軍である」

と、もらされた。

家茂は十三歳のときに紀州家から迎えられ、十四代将軍となった。これには、ときの大老・井伊直弼派の支持と、水戸や薩摩などの大藩の反対と……つまり、幕府内の派閥と勢力のあらそいの中に将軍となった家茂だが、その聡明で温厚な性格は、誰の目にもあきらかであるし、

「何とか世のさわぎがおさまらぬものか……」

と、家茂の純白で、ひたむきな態度には一点の駆け引きもない。

こうして、天皇――将軍――守護職による連帯感は、幕府側にとって非常に強力なものとなったわけであるが、長州藩を主力とする勤王過激派の陰謀や暴動は、

「こうなっては無理矢理にも天皇を長州へおつれ申し、いっきに倒幕の軍をおこそう」

などという、おどろくべき計画さえすすめはじめる。

孝明天皇も、

「長州のやることを信ずることはできぬ」

といわれ、あきらかに公武合体して難局にあたろうという決意をかためられた。

そして……。

ついに薩摩藩とむすんだ幕府が長州の勢力を京都から追いはらってしまうことになる。

そこまではよいのだが、激動し奔流する革命の過去にあっては、〔持続の美徳〕も〔改良への忍耐〕も無縁のものであった。

さらに、三年後の慶応二年には、二度目の入京をした家茂（二十一歳）が急死し、同年十二月には孝明天皇（三十六歳）も崩御された。

松平容保が意図し、促進し、すべてをかけた公（天皇）と武（将軍）の協力は、ここに破れた。

天皇の死が、勤王派による暗殺だとの評判がひろまったほど、すさまじい時代であった。

薩摩藩が旧敵の長州と手をむすんだ。

家茂の後、十五代将軍位についたのは徳川慶喜だが、松平容保とこの徳川最後の将軍との間は、あまり、しっくりとはゆかなかったようだ。

慶喜は〔後見職〕のころから、一命をかけても主張をつらぬき通すという強さがない。

いわゆる〔朝令暮改〕の、目まぐるしく変る世のうごきに沿って、慶喜自身の心もあわただしく変るのである。

徳川慶喜を賢明な将軍と見る人びとなら、この彼の変転ぶりを〔新しい政治家〕として拍手をすることだろう。

そうした眼で見るのなら、松平容保は〔古い政治家〕ということになる。

ついに、

「政権を朝廷に返し、徳川家も一大名として新政府に奉公すべし」

と、なった。

しかし、

「ぜひにも徳川家を賊軍として徹底的に叩きつぶし、新しい時代と政権を生み出さねばならぬ」

という薩長を主軸とする勤王革命派の追求によって、幕府勢力は鳥羽伏見における惨憺たる敗戦を最後に、皇都を追い払われ、江戸へ逃げ帰った。

松平容保も将軍と共に江戸へもどり、明治元年二月、会津へ帰って、将軍同様に、朝廷へ対し恭順の意を表明した。

容保の世子・松平喜徳が、米沢藩主・上杉斉憲へ送った親書には、会津藩の意が、簡潔ながら、あますところなくあらわれている。

「父・肥後守は戊年（文久二年）以来、公武合体に力をつくし、先帝（孝明天皇）の寵眷をかたじけのうし、病気の際には御親禱までなし給わりしに、去る一月三日の戦いは現在彼（薩長軍）より兵端をひらき、あまつさえ朝敵の汚名を受く。ねがわくば雪冤の労を懇請す」

というもので、事実を卒直にのべたものである。

つまり、朝廷への取りなしを米沢藩にたのんだのだが、本来ならば、このことをもっともよく

承知しているのは徳川将軍なのだ。

ところが、元将軍・慶喜は江戸城を捨てて、上野寛永寺へ入り、ひたすら恭順の意を表しており、会津藩のとりなしをするどころのさわぎではないのだ。

諸国大名は続々と官軍に投じ、米沢、会津をはじめ津軽、山形、秋田など東北の諸藩も、同盟して官軍との交渉にあたることになった。

しかし、官軍はきくものではない。

薩摩も長州も、京都における会津藩の実力をまざまざと見せつけられている。

会津の謹慎、恭順の心などには耳もかたむけず、三月中旬になると、薩長を主力とする官軍が仙台へ入って来た。

「仙台藩は会津討伐の先鋒をつとめよ」

と、いうのだ。

仙台も厭だが、仕方がない。

藩主・伊達慶勝は四月十一日に兵をひきいて白石城へ入り、会津の国境へせまった。

このとき、東北の地へ乗りこんで来た薩摩・長州両藩の軍は、官軍総督府の威名をふりかざし、横暴をきわめた。

これに対して諸藩の反抗も激発し、ついに官軍参謀・世良修蔵の暗殺事件となる。

こうして、下部の組織が互いに索制し合い、争闘し合うものだから、かんじんの松平容保や上

杉慶勝の真意というものが、官軍上層部の、たとえば西郷隆盛、板垣退助のような人物の耳へもとどきにくいこととなり、世良の暗殺によって東北平定の官軍総督・九条道孝や参謀・大山格之助などの、

「なんとか、会津と仙台の両中将を京都にでも引きとり、東北のさわぎがおさまるのを待たせよう」

という心も、そのまま容保のもとへはとどかぬことになったし、とどいたにしても、これを信頼するだけの根拠は会津藩に失われていたろう。

この間の事情を、いちいちのべていては切りがないことになる。

互いに互いの実態を知らず、疑惑をふかめ合って、ついに戦火を見るに至ることは、現在でもベトナム戦争ひとつを見てもわかることであって、この点、人間のすることには昔も今も変りがないのである。

松平容保は、ついに抗戦の決意をかためざるを得なかった。

会津抗戦ときいて、江戸を脱走した幕臣や、諸藩脱走の士が続々と会津へあつまり、若松城下では、

「都見たくば此処までござれ、今に会津が江戸となる」

などという唄が流行したそうだ。

このときにあたり、会津藩が藩士一同に対して布告した内容を記しておこう。

少し長くなるが、維新戦争における会津の立場というものを明確につたえているからだ。

「……嘉永六年以来、外国軍艦航海して猖獗をほしいままにし、物価の高騰、日に益し月にはなはだしく、ついに人心混乱するに至る。その原因をたずぬれば、これみな幕府の失体よりおこる。天皇ふかくこれを憂悶し給い、ゆえに何となく公武の間、一和せざるの勢いあり。幕府、その罪をさとり、旧弊をあらため遵奉の典をおこし、衆に選て、我公（容保）をもって京都守護の職に任じ給う。（中略）我公の上京するや、精忠をもってはたらき給うにより、天皇ふかく依頼し給い、将軍（家茂）の愛寵また厚し。

以来、六年の間、誠忠ついに変らず、天皇叡感のあまり幾度となく宸翰を下したまわり、我公かつて病するとき、かたじけなくも、みずから内侍所において祈願し給うにいたる。その寵遇、実に無比類というべし。

（中略）元来、長州は先年より外は尊王攘夷に託して実は不軌の志をいだき、皇室をさそい、幕府をあざむき、その罪枚挙すべからず。甲子七月、ついに大兵をあげて皇居を襲い、銃丸は御所の屋根におよぶ。その逆乱の罪、誅してなおあやまりあり。

天皇はお怒りになり、将軍またこれを悪むといえども、ついに寛典にしたがい、官位を脱剥し領地をけずるも、長州は尚その命をきかず。

しかるに天皇（孝明）崩御、将類（家茂）薨去し、国家多難のときに逢い、すべからく兵を解くを知り、姦邪、そのすきに乗じて、もったいなくも幼主（明治天皇）の明をくらましたてまつ

り、事に託して長州の罪をゆるし官位旧に復し、先帝の勅勘をこうむる公卿を用い、陪臣をして参与せしめ、将軍、我公など、みな其職を免じ、正邪地を易え、忠姦ところを換うるに至る。これ先帝（孝明）の意にあらざるのみならず、また今上（明治）の意にあらざるは明白なり。嗚呼、一杯の土いまだ乾かざるに、今上をして父の道をあらためしむること、大悪不道の至りというべし。

（中略）我公多年の誠忠はむなしく水の泡となり、残念というもおろかなることならずや。禁庭に対し弓を引くことは決してなすべからずといえども、姦邪の徒、もしも綸旨を矯めて兵を加うることあらば関東と力を合せ義兵をあげて君側の姦悪をのぞかざることを得ず」

およそ、こうしたものだが、この布告を藩士たちに暗誦せしめたのである。

この布告は、依然として旧幕府を中心にした旧弊思想にいろどられているという者もいる。だが、新時代が来て、旧幕府政権にとって替ったのは、薩長を主体とする藩閥にすぎなかったではないか、と、反論する者もいる。

どちらにしても時代の大きな流れは、必然〔近代日本〕の歩みをうながしたことだろうと筆者は思う。

かくて会津藩は、二十余藩よりなる東軍の主軸となり、官軍を迎え撃つことになった。

越後の諸藩とも手をむすんだ。

やがて、越後の関門、長岡藩がやぶれ、新発田（しばた）藩が官軍に降伏し、平、相馬、三春、二本松の

諸藩もあるいは破れ、あるいは下った。

八月下旬になると、官軍は怒濤のように会津・若松へ攻めかけて来た。

会津藩の抗戦については、それだけで一冊の書物になるほどの悲痛な挿話にみちている。

老人も、小供も、女性も戦った。

藩祖・保科正之以来の伝統が悲惨な開花をしたというのも、このことだ。

将軍と大名、大名と家臣という旧幕体制の中で、上下一致した〔義〕の発揮がなされたわけで、おそらく現代人の眼から見れば、ばかばかしいことであろう。

ついに若松城が包囲された。

官軍参謀・板垣退助は、米沢藩をもって松平容保に帰順をすすめた。

米沢藩いわく。

「われわれは、薩長の私兵に抗戦するために起こったのであるが、いまや薩長の私兵と考えていたものは全くの官軍にして、伏和寺宮（ふしなじのみや）は、すでに錦旗をすすめて東寺に入り給うときく。われら、もとより王師に対抗すべき存念なし、ゆえに同盟を脱して官軍に降りしなり。貴藩、この意を諒とし、開城せられんことをのぞむ。尚、君公（容保）御父子の御存命はもちろん、減祿処分にとどまるべし」

この書状を見て、容保は苦笑し、

「くだくだと説をなさずとも、もはや力つきたゆえ戦をやめようではないかと、申してくれたほ

うが、まだしも気が休まる」
とつぶやいたという。
戦記に、こうある。
「……城兵死するもの相つぎ、糧食は竭き、弾丸無し。このとき、ようやく初冬の候、北風冷雨肌を刺し、婦女子は飢えんとす。士卒は瘡痍に苦しみ、城外の領民は、みな山野をさまよい。家を焼かれ財をうばわれ、尚いまだ城下の戦止まざるをもって帰ることを得ず……」
ゆえに容保も決意せざるを得なかった。
「これだけやれば、もはやよかろう。今より帰順し聖断をあおげば死すとも恥にはなるまい」
ひとえに容保の抗戦は、
「先帝の信頼をうけて職を奉じていたものが、なぜ今上天皇の軍によって賊の汚名を着なくてはならないのか……」
この一事にある。
これは、いうまでもなく年少の明治天皇の知るところではなく、薩長二藩に対する反抗であり、正義へのつとめでもあった。
旧暦九月十九日、容保は、手代木直右衛門、秋月悌次郎ほか一名を塩川へやり、米沢藩を頼って降伏の意をつたえた。
それでもなお、官軍は、

「敵は詭計をもって我兵気をゆるやかにせしめ、機に乗じて突撃せんとしておるのだ」
などといい、なおも砲撃をつづけた。
これまでの会津の猛戦、知るべしである。
二十三日、午前十時。
松平容保は白の降旗を城の大手門前にかかげた。
当時、白布はすでに繃帯に使用しつくしていたので、ようやく白の小布片を何十枚も縫い合せ、三旒の白旗を得たという。
かくて、両軍の砲撃が、ようやく止んだ。
正午になると、官軍から軍監として中村半次郎（桐野利秋）ほかが兵をひきい、追手門外にもうけられた城受け渡しの式場へ入って来た。
このときの官軍の態度は、軍監の指揮よろしきをもって整然たるものがあり、式を終えた容保父子が輿に乗せられて官軍陣営へ連れ去られるときも、恥をうけるようなことはなかった。
容保父子は、薩摩・土佐の小隊にまもられ、滝沢村・妙国寺へ入った。
沿道において官軍の罵倒をうけたが、容保は顔色ひとつ変えずに沈黙していた。
このときまで、若松城内にこもっていた会津勢は、老幼婦女子をふくめ、五千二百余人。小銃弾薬は二万二千発を残していた。
二十四日、城は官軍に接収せられた。

ここに、藩祖以来二百二十余年にわたった会津藩はほろびたのである。

松平容保は江戸へ送られると、鳥取藩邸へあずけられたが、監視は厳重をきわめた。のち紀州邸へ移ってから待遇もよくなり、庭内の散歩もゆるされたらしい。

二年後、容保は死一等を減ぜられ、反逆の首謀者三名を出すべしと命ぜられた。

「首謀者は躬でござる」

と、容保はいったが、きき入れるものではない。

結局、家老の席順により、田中土佐、神保内蔵助、萱野権兵衛が首謀者とされたが、生き残っているのは萱野のみであった。萱野は平然としてこれを受けた。

松平容保は、其後、日光東照宮の宮司に奉職したりしたが、廃官となるや会津に帰り、若松市の聯隊前の長屋に住み、零落のままに身をまかせ、明治三十八年に七十七歳の生涯を終えた。

敗れたり彰義隊——上野戦争

将軍・徳川慶喜が、政権を奉還するにあたって、諸大名にしめした布告は、次のごとくである。

わが皇国時運の沿革をみるに、むかし王綱紐をといて相家権を執り、保平の乱、政権の武門にうつりてより、わが祖宗（家康）に至り、さらに寵眷をこうむり、二百余年、子孫相受け、われ、その職を奉ずるといえども、政刑当を失うこと少なからず、今日の形勢にいたるも、ひっきょう薄徳のいたすところ、慚愧に耐えず候。

いわんや当今、外国の交際、日に盛んなるより、いよいよ朝廷に帰し、ひろく天下の公議をつくし、聖断を仰ぎ、同心協力、共に皇国を保護せば、必ず四海万国と並びたつべく、わが国家の所望これにすぎず候。

とある。

ながながと引用したが、この一文は、戊辰の戦争に対する将軍の心事が、もっとも簡明に表現せられていると思うからだ。

むろん、この文章は、慶喜みずからが筆をとって、したためたものである。

いかに最後のどたん場に追いつめられた徳川政権だからといっても、その頭領たる将軍の声明として、まことに虚心坦懐なものだといえよう。

徳川幕府と諸藩との関係、その歴史について、ここにのべることはさておき、国家未曾有の大事に際し、最後の将軍はこれほどにいさぎよい態度をもって、政権を皇室にゆだねたことは銘記せねばなるまい。

だが、伏見・鳥羽の戦争となった。

この戦争は、もとより薩摩・長州の挑発であったし、錦の御旗をかつぎ出し、徳川を国賊ときめつけた薩長軍にしても、簡単に勝つつもりはなかった。それは思いもかけぬほど早く、呆気なく勝ってしまったものである。

大坂から江戸へ逃げ帰って来た慶喜は、

「われ、伏見・鳥羽の一挙において指令を失し、はからずも朝敵の名をこうむるに至る、いま、また辞なし」

と、いっている。

かくて、官軍の江戸攻めを迎えることになるわけだが同時に、慶喜が種々様々な批判を甘受しつつ必死で掘り起した「新しい芽」も、つみとられてしまった。

当時、たとえ弱虫だとののしられようとも、慶喜が断行したこの一事は、破天荒に新鮮で、新

しい意欲を内蔵していたのだ。

二百何十年にわたる鎖国の夢がやぶれ、日本は西洋諸国の侵入と近代文明の洗礼を受けざるを得ぬ。

この非常時に国内が戦乱の砲火をあびてよいものかどうか……あらためていうまでもあるまい。

幕府遊撃隊長で、後に函館で戦死をした伊庭八郎に、山岡鉄太郎が、

「無益な抗戦はやめたらどうだ。そんな考えは、もう古い」

と、いったとき、八郎がこう答えている。

「あんたは古いとか新しいとかいうが、去年、将軍が、わずか一日にして、天下の権を朝廷に返上したことを、何とごらんだ？　一滴の血も流さず、三百年におよんだ天下の権を将軍みずから、さっさと手放したのだ。こんなことは山岡さん、いまだかつて、わが国にも、おそらく外国の歴史にもなかったものですぜ」

さすがに、山岡がだまっていると、

「こんな新しいことはないと私は思いますねえ。そりゃア、前々から、このことが薩長の奴らにわかる筈はねえと私は思っていたが……もしもだ、薩長の奴らが新しいというんなら、奴らこそ、よくやってくれた、われわれも共に力を合せ、国事にはたらこうと……と、こういって来なくては、ならねえ筈だ。ところが奴ら、どこまでも徳川の息の根をとめなくては安心して眠れねえらしい。ごらんなさい、伏見・鳥羽の戦さを——奴ら、むりやりに牙を鳴らして、飛びかかって来

たのだ」

このままで引き下っては、何から何までが敵軍のいいようになってしまう。伊庭八郎のみではなく、心ある旧幕の士たちの抵抗は、≪奴ら（官軍）のしたことの全部が正しいことになってしまっては、たまらない≫

という一事につきる。

これを、幕臣の〔微衷〕という。

〔微衷〕すなわち、わが胸に秘めた真心というわけだ。

もっとも微衷にもいろいろとあって、上野の山へこもった旗本・大井某の談話に、こんなのがある。

「いいえね、その私なんざ、何にも彰義隊へ出る気はなかったんですがね、出ないと斬るッって言いますもんで、つまり引っ張り出され党なのでしてね——官軍は、まさに機先を制したわけで、旗本や志あるものは、ほとんど立ち遅れてしまい、四散しましたね。

裏切りも多うござんした。形勢を見て、次から次へ官軍方へ降伏しちまって、こっち情報を売りこむというわけで……上野の戦争のとき、私ア坂本の所で鉄砲を撃ってましたがね、総くずれだというんで、こりゃもういけないと思い、早速の早業で袴と大小をぬぎ、髪をさんばらにしおいて、身ひとつになり、下谷の、どこかの空店へ飛びこんだもんです。そしてね、畳を二、三枚ひっぺがし、こいつを頭へのせ、やぶれかぶれで官軍の陣所へ飛びこんで行ったもので——。

そして私ア、こういいましたね、鉄砲防ぎになろうかと思いまして畳を持ってまいりました、とね。するてえと官軍の兵士がよろこんで、いや御苦労、御苦労と、こういってね、金を一歩くれました。たぶん、助太力をすると思ったんでしょうな。あは、はは……」

この人は、江戸を逃げてから上州・沼田の〔丸新〕という料亭の板前になってしまった。

これなぞ、旧幕臣の見本の一つといってもよかろう。

そもそも革命というものは、勝敗の差が大きく、明確なものでなくてはならぬ。

それでなくては、勝者の権力というものの土台が危いものとなる。

薩長をはじめ、官軍主脳の考えも、

「血を流さねば、この改革はおさまらぬ」

という一点にしぼられた。

徹底的に徳川の勢力を破砕し、新政府の権威を不動のものにしなくてはならない。

前では、徳川の立場をのべたが、当時、革命軍の立場としては、当然のことであったろう。

ところが、江戸へ追いつめられた徳川方は、この官軍の気勢をかわしてしまった。

これは、徳川慶喜が、湧きあがる抗戦派の幕臣を押え、勝安房（海舟）を登用して尚も和平解決の道へ突き進んだからである。

慶応四年（一八六八）二月十二日、江戸城における大評議は一昼夜をかけて紛糾をした。

小栗上野介などを主体とする抗戦派は、

「箱根の険に拠って官軍をふせぎ、同時に海軍（海軍力は官軍にくらべ、はるかに優っていた）は駿河湾に出て、東海道を上る敵を砲撃し、さらに関東、東北の諸大名をあつめて必勝を期すべし」

と、いきまく。

非戦派の勝安房でさえ、

「勝てぬことはありますまいし、勢いに乗じて軍艦を大坂へ乗り入れ、京都の糧道を絶つことも可能――」

と、いった。

しかし慶喜は、

「なれども、官軍は天皇をいただき、国民に号令している。徳川が、これに刃向うことは賊軍の汚名を着てすることになるのだし、いやしくも現在の国家非常時を前にして、このような戦乱をわれから巻きおこし、国民を苦しめることは大道にそむくことになる」

との一点を断じて曲げない。

ついに、抗戦派は沈黙した。

慶喜は、松平大和守を使者として謝罪待命の意をあらわすべく京都へ送ったが、官軍は見向きもしなかった。

慶喜の命によって、勝安房が江戸開城の責任者となり、慶喜は江戸城を出て、上野寛永寺内、大慈院に入り謹慎の意を表明した。

髪もひげものび、官軍の処断を待って彼が屏居していた大慈院の一室は、現在もそのままに残っている筈だ。

さて――。

二月十六日に京を発した官軍（徳川征討軍）は、薩摩・長州をはじめ、備前、紀州、佐土原、亀山、大村、鳥取、肥後、土佐、大垣、越前などの諸藩を動員し、総勢五万余といわれた。

これを、東海、中仙、北陸の三道にわけて江戸を目ざし進軍を開始したわけである。

だが、官軍は、徳川よりも金がない。

わずか二千両ほどのものがあるだけで、これではとても五万余の大軍をもって戦争をしかけるわけに行かない。

官軍が、京都を発つにあたって京坂の富商たちから軍用金を集めたが、このとき、第一番に金をもって来たのは、京都の鰻屋の亭主で、津田寅吉というものだという。

このうなぎやが、何と三百両という大金を差し出した。

そのうちに、富豪の三井が千五百両持って来たが、三井にしてもだれにしても、まだまだ徳川が負けるとは信じられない。

芝の増上寺なぞは、幕府から軍用金をとられ、官軍からもとられ、

「いったい、どっちが勝つのか――」

いても立ってもいられなかったらしい。

諸外国も、フランスの発議で〔局外中立〕の立場をとる。

むろん、これには幕府を支持してきたフランスが、官軍の尻押しをしているイギリスを牽制しようという意味も、ふくまれている。

だが、そのうちに時勢の流れというものが、だれの目にもよく映るようになってきた。

三井家をはじめ、京坂の富豪たちが、官軍（新政府）の経費として、三百万両の紙幣発行の〔裏づけ〕をするようにさえなったのだ。

勝安房は、平隠裡に江戸を開けわたすため、不眠不休の活動をはじめた。

将軍みずから政権を放り出したというので、抗戦派幕臣は、それぞれに隊を組み、あるいは東北へ走って会津藩を主体とする〔抗戦同盟軍〕に加わったりした。

彰義隊が結成され、これが上野山内に立てこもったのが、江戸府内における抗戦派只一つの拠点となった。

恭順派の勝安房や大久保一翁の目ざすところのものは、徳川恭順をもって、無事に江戸を官軍にあけわたすことにより、慶喜はもちろん、徳川家の息の根を絶やすまいとすることだ。

ということは、徳川に従う旧幕臣たちも、来るべき新時代に向って生きのびねばならぬ、ということでもある。

むろん、江戸と市民を戦火から守るということは、勝らが、もっとも重要視し、これを官軍に強調したのであった。

このころ、フランス公使・ロッシュは、自分から〔中立〕を申し出たくせに、蔭へまわると、

「フランスも、ひそかに援助をします。戦いなさい」

しきりに、謹慎中の慶喜へ、はたらきかけたりしている。

これを知って、恭順派は、むかしから幕府に親しいフランスにはかまわず、官軍派のイギリスへはたらきかけた。

いうまでもなく、戦争の無益を説いたのである。

イギリスは、この恭順派の卒直な態度を非常によろこんだ。

一方、東海道を進む官軍にしても、当然、旧幕軍の抵抗があると思っていたし、

「敵の海軍がおそろしい」

と、参謀長の西郷隆盛も、ついに参謀・木梨精一郎（長州）を横浜のイギリス公使館へやって、

「戦争の協力をたのむ」

と、いった。

ところが、イギリス公使のパークスは、これを言下に拒絶して、

「前将軍は謝罪しておるのではないか。それなのに、これを討つというのはどう考えても無謀である。もしも官軍が、あえてこれを行なうというのなら、イギリスも旧幕将兵を助け、官軍と戦

うであろう」
と、きめつけた。
木梨はびっくりして、これを西郷につたえると、
「こりゃ困った……」
それまでは、あくまで戦火の中に徳川を討滅し、慶喜の首をはねるつもりだった西郷だが、ここで、はじめて〔非戦〕への意がうごいたという。
パークスの思うツボであった。
江戸開城に大きな一役を果したとなれば、これからのイギリスは諸外国に先んじて日本への発言権を得ることになるからである。
これから、例の山岡鉄太郎が駿府（静岡）の官軍大本営へ乗りこみ、西郷と談判の結果、朝令五ケ条を受け、合せて、徳川家寛典の内諾を得るという、はなばなしい活躍となるのだが……。
これも、寛永寺秘蔵の〔能久親王年譜稿〕によると、かなりの疑問があることになる。
江戸城あけわたしの功労者は、西郷と勝、それに山岡のみが世に喧伝されてしまったが、寛永寺側にいわせると、とんでもない、ということになるのだ。
これより先、寛永寺にある輪王寺宮が〔慶喜助命〕の歎願に、江戸を発しているのだ。
輪王寺宮について、簡単にのべる。
宮は、伏見宮邦康親王の第九子に生まれ、嘉永元年（二歳のとき）勅命によって仁孝天皇の御

養子となり、さらに六歳にして梶井宮の法嗣となった。
僧籍に入られてからの宮は、安政五年に、これも勅命によって比叡、東叡（上野）日光を統べる輪王寺宮の附弟となり、前年（慶応三年）に、輪王寺宮第十三世の門主ならべに、寛永寺第十五世の住職となったのである。
このとき、宮は二十二歳の若さであった。
「この上は、朝廷とも深いつながりのある輪王寺宮にたよるより仕方がない」
ということで、恭順派の幕臣は、猛烈な運動を開始したものである。
「仏門にあるものが……」
と、宮も再三、これをしりぞけたが、幕臣たちの熱情にうごかされ、
「では……」
関口艮輔が文案をねり、山岡鉄太郎が浄書をした歎願書をたずさえ、二十余名の扈従者と共に江戸を発し、官軍総督府へおもむくことになった。
道中、小田原まで来たとき、官軍先鋒部隊に出合い、このとき薩摩の中村半次郎（桐野利秋）が、宮の宿舎へやって来て、
「慶喜にいうとけ。首を洗って待っておれとな」
などと、放言した伝説もあるし、
「そりゃ違う」

と、薩摩側では、

「そりゃ、宮の従僧が陣へやって来て、黄金六十枚を出し、うまく取りはかろうてくれなどというもんじゃから、中村どんが、けがらわしいと怒ったのだ。そげなことは先鋒隊のあずかり知らぬところじゃと、突返してやったまでじゃ」

と、こういう。

とにかく、宮の一行は、すさまじい官軍進撃の流れをさかのぼるようにして駿府へ入った。この一行を冷笑と共にながめやる官軍将士の中で、こんな唄がきかれた。

「雨のふるよな鉄砲玉の、中へのこのこ宮さんの上る気持がトント知れぬ」

輪王寺宮が、官軍大総督・有栖川宮（ありすがわのみや）と駿府城に会見したのは三月七日である。これより六日にわたって交渉が行なわれたことが〔能久親王年譜稿〕に記されてい、輪王寺宮は十四日に駿府を発ち、江戸への帰途についている。

この〔年譜稿〕に記された交渉の内容は、そっくりそのまま、勝や山岡が西郷に向ってのべたてたところと同様だし、官軍の返答にも、さして相違はない。

しかも、山岡鉄太郎が単身〔慶喜助命〕の歎願に馬を飛ばせて駿府へやって来たのが、宮が大総督に会見した同じ七月なのだ。

自分から筆をとった歎体書を宮に托した山岡が、後から一人でやって来て、輪王寺宮をそっちのけにしておいて、西郷と交渉を始めたことになる。

とかく維新史においては、

「輪王寺宮の歎願は少しも聴かれず、空しく帰られた」

ということになっている。

だから、寛永寺側ではおさまらない。

上野山内にいて、後に上野の戦争に巻きこまれ、ために輪王寺宮は賊軍扱いにされてしまい、江戸無血開城と慶喜助命の大功績は、すべて西郷と勝、山岡にさらわれてしまったというのだ。

このあたりに、まだまだ維新史の裏面に新しい発見があるやも知れぬ。

とにかく、江戸へ到着した官軍を迎え、勝安房が西郷隆盛と池上本門寺、高輪薩摩藩邸において会見。これによって江戸は兵火から救われたことになっている。

勝自身もまた、これを堂々と披瀝してはばかるところがない。

こんなこともある。

明治十四年となって、新政府が維新の大業に参与した旧幕臣の功労を調査したとき、山岡鉄太郎が出頭すると、係官が、

「先刻、勝安房氏がまいられましてな」

という。

「ははあ……」

「勝氏は、例の戊辰の三月に、高輪薩州邸における西郷氏との会見、ならびに自分の手紙一本によって江戸城総攻撃を西郷氏が停止したなどと、のべておられるようだが、相違ありませぬか」

山岡は、苦笑しつつ「その通りだ」と答え帰って家の子郎党にこのことを告げると、一同は、山岡の功績を一人じめにした勝安房の卑劣さを怒り、大いにののしった。

これを山岡が、

「まあまあ、よいではないか」

などとなだめる記述が「山岡鉄太郎伝」中の「鉄舟居士言行一班」に出ている。

真疑は、筆者にわからぬが、大きな歴史の流れの中で、個々の人間の本体をとらえることは、古今を通じて、実に至難なことだ。

とにかく、江戸無血開城は成った。

官軍が江戸へ入城すると共に、徳川慶喜は死一等を減ぜられ、水戸へ屏居することになり、寛永寺を退き、わずか数名の従者と共に、水戸へ去った。

そして官軍——すなわち新政府は、田安亀之助（家達）をもって徳川宗家をつがしめ、これに七十万石をあたえることになった。

恭順派の悲願は、ここに実ったというべきであろう。

これからが、前将軍にも旧幕府にも見捨てられた抗戦派と官軍の、やむを得ざる（双方にとって）戦争となるわけだ。

五月十五日の開戦までに、上野の山へ立てこもった彰義隊は三千数百にふくれ上っていたが、むろん勝利の目算のある筈はなかった。

彰義隊は、慶喜の一橋家時代からの家来が中心となって組織されたものである。

その趣旨は——慶喜の尊王から発した大政奉還は、まことに公明至誠の英断であったにもかかわらず、奸徒共（薩長を指す）の詐謀によって今日の危窮をまねいた。ゆえにわれらは共力同心し、御用に相そなえたい、というものである。

はじめは十七名であったが、二月二十三日の浅草・本願寺における会合では百十余名になった。頭取には、一橋出の渋沢成一郎が任じ、副頭取・天野八郎、幹事に本多敏三郎、伴門五郎などが任じた。

そもそも、発足以来の彰義隊は、

「慶喜の身を守り、徳川の社稷回復を目的とする」

というので、やたらに官軍に牙をむいて噛みつくといったものではなかった。

慶喜自身、

「まことに、頼るべき存在ではある」

と、寛永寺屏居中にのべているのだ。

ところが、間もなく彰義隊は分裂をした。

頭取の渋沢成一郎は後の栄一の従兄にあたる甲だが、すこぶる奇妙な男で、こんな最中にも機

会さえあれば金銀をにぎって、ふところを肥そうという奴だ。

先に、上州の領地へ引込んだ小栗上野介なぞにも、今度、彰義隊というものをつくるのだからといって、大金をせしめている。

この渋沢が、半ばゆすりのかたちで、江戸市中の富商たちから金を巻き上げはじめた。

これがわかり、正義派の天野八郎と対立、隊は二派に分かれ、その間にまた中間派なぞという妙なものも介在し、何かにつけて反目騒ぎが起ったという。

ついに渋沢派は脱退した。

これで、隊規もととのったわけである。

当時、江戸市中は戦乱を目の前にして、ほとんど無政府状態となり、連日ふりつづく雨の中で、火つけ、強盗が、ひんぴんとして起る。

女子供は白昼でも町を歩けぬということで、輪王寺宮や慶喜のいる上野を守るためと、寛永寺や東照宮を護衛すべく、彰義隊は、本願寺から上野へ本拠を移した。

勝や大久保一翁など旧幕臣も、江戸市中の治安をたのむのは、もう彰義隊より他にないのであるから、

「時局下、市中混乱の取締方を一任する」

と、いい出した。

以後、彰義隊の軍紀は厳正をきわめ、昼夜、隊を組んで市中を巡回した。

夜間の巡察には、丸に彰の字、または義の字を書いた提灯をもって廻ったという。もちろん効果は上がった。

天野八郎の指令によって、巡察隊は人格力量ともにすぐれた者をもって編成されていたので、江戸市民の信頼をふかめ、人気はあがるし、後に、

「彰義隊ト云ヒ、何隊と云ウモ、恰モ烏合ニ似タリ。隊長ハ有レドモ無キガゴトク、規律立タズシテ兵士ハ狂気ノゴトク……」

などと、山岡鉄太郎が記しているのとは、だいぶ違うようだ。

前述した輪王寺宮歎願の一件から見ても、どうも山岡や勝と彰義隊は、うまく行かなかったらしい。

彰義隊生き残りの士で、後に内閣馬政局の役人となった山崎有信が、こういっている。

「戦さに敗けたからこそ何とでもいわれるのだが、私は決して隊士が烏合の衆だったとは思えない。むしろ幕臣の中でも優秀な人材が集っていたと断言します」

彰義隊の活動が江戸市民から好感をもって迎えられたのに反して、いよいよ官軍が江戸へ入って来ると、この方はもう非常な不人気である。

当然であった。

官軍は、勝利に酔っている進駐軍である。

それも、ふところに支給されるものすらなくて、ろくな戦争もやらずに勝ってしまったのだから、たまったものではない。

金も払わず（払えないのだ）に物品を掠奪するし、遊所へなだれこんでは田舎侍まる出しの暴力と威嚇で女を抱き、酒をのむ。

吉原などは、これらの官軍になやまされること毎夜のごとく、ついには遊女たちを他所へ隠し、店を閉じるものさえ出た。

特別に官軍がひどかったのではなく、いつの世にも行なわれてきた戦争風景なのである。だが、このことによって彰義隊の人気は層倍のものとなった。

市中で、官軍と彰義隊の者が出合い、殺傷事件を起したことなどは数え切れぬが、そのたびに、官軍の汚名が市中に流れる。

旧幕府のいや旧幕臣への江戸市民の同情と共感が誰の目にも映じたのである。

これには新政府もおどろき、わが軍紀をととのえるに懸命となった。

勝安房は、官軍が江戸へ入る前に、彰義隊を解散させたかったのだろうが、勝自身が兵力を持っているわけではなし、これだけ強固の根を張ってしまった一団を抑えつけるわけにも行かない。

「どうも、このままでは官軍との摩擦がひどくなるばかりだし……折角、慶喜（だんな）の命も助かり、徳川の家名も保てそうだというときなのだから、何としても彰義隊を解散せしめねばならぬ」

勝の意をふくみ、また山岡鉄太郎がうごき出した。

そのころ、彰義隊の顧問格になっていたのが、かの覚王院義観であった。

寛永寺の執当職をつとめ、先に輪王寺宮の歎願行にも供をして活躍をしたこの僧については、さまざまな評価があたえられているが、ここでは実際に彼がやったことのみをのべて行きたいと思う。

山岡は、すでに彰義隊幹部から相手にされなくなっている。で、彼は先づ覚王院義観にはたらきかけた。

このときの二人の密議については、後に山岡が記しているが、それをのみ信ずるわけには行かない。

一方、官軍からも、しきりに、

「彰義隊を解散させよ」

と、勝安房へ命じて来る。

覚王院が、山岡と論議のあげくに最終的に出した案は、新政府から二万両を出してもらい、これをもって彰義隊の〔始末〕をつけるということであった。

この金を天皇が〔下賜〕されたという名目に、彰義隊を日光山守護のためということで、全員を日光へ転進させようというものだ。

いい出すからには、覚王院にも、それだけの自信があったものであろう。

「よか。そうしていただければ助かります」

と、西郷隆盛は賛成してくれたが、大総督府が承知をしない。
官軍といっても薩摩のみではないし、第一に過激な長州が承知をしない。
「こちらの軍用金もろくにないのに、彰義隊へ二万両も——とんでもないことだ」
と、いう。
西郷が、にやりとして、
「なれども、もし彼らと戦さなするときは、もっと金な要りもすぞ」
といったが、長州側はきくものではない。
またも、山岡と覚王院の会談がつづけられた。山岡は、後に、
「覚王院は頑迷きわまる性格で、どうにも仕方がなかった」
というが、山崎有信は、
「それは、どうかと思われます。私が見たところ、覚王院は上野山内第一等の人物であり、一世を睥睨(へいげい)するほどの気力とすぐれた学識を相そなえ、とてもとても、山岡さんなぞの及ぶところではない大人物であったと、私は信じております」
反論をのべている。
とにかく、一日のばしに官軍は返事を遅らせているうちに、長州の大村益二郎が江戸へ来て〔軍防事務局判事〕という名のもとに、官軍の大権をにぎった。
西郷たち薩摩側では、これに不満を抱き、総督府も、かなりもめたのである。

そのうちに奥羽の諸藩が同盟を結び、新政府に抗戦するということになった。
「彰義隊一つを持て余していたのでは、取り返しのつかぬことになる」
と、大村益二郎は叫び、断固、討伐に決した。
西郷は激昂する大村をなだめ、一言も洩らさなかった。
西郷は「何事も勝さんにお任せしてあるのじゃから——」といい、大村ほど〔彰義隊〕を恐れてはいなかった。
戦火をまじえずに、西郷は彰義隊の始末をする肚であったらしい。
かくて五月十五日の朝——。
風雨の中に官軍の総攻撃が開始された。
戦闘は、半日にして終った。
大村は、前夜から数百の一隊を千住方面に待機させ、戦闘がはじまると、この一隊が、口々に
「会津よりの援兵でござる!!」
と叫びつつ上野山北方の新門口から山内へ乱入をした。
彰義隊は、大いによろこんだが、この援兵の一隊は突如として錦旗をひるがえし、黒門口の彰義隊の背後から殺到して来た。
これで、黒門口が破れた。
「卑怯だ」と、彰義隊は怒ったが、これは戦さの常である。

とにかく、戦力の相違は如何ともしがたい。

高村光雲の『懐古録』に、

「上野一帯における戦後の惨景は目もあてられず、昼すぎになり、騒ぎは一段落ついたようなものの、それからまた一騒ぎ起ったというのは、つまり跡見物に出かけた市民で、てんでに刺子伴天なぞを着込んで押して行き、非常な雑踏――すると、たちまち、人心は恐ろしいもので、慾張り出したのであります。官軍が彰義隊から分捕った米を見物に分配しますと、我も我もと押し返り、そのゴタゴタのうちに二俵三俵と担いで行くものもいる。（中略）群集は、もう勝手にふるまい、果ては上野の山内へ押し込み、お寺の中へ混み入って、坊さんの袈裟衣や仏像、舎利塔なぞを担ぎ出して我がちに得物とする。たちまち山内の寺は残らず空っぽとなり……実に散々な体たらく……」と、ある。

輪王寺宮は、覚王院と共に山内を抜け出し、労苦を重ね、海路を会津へおもむき、後に官軍へ下って京都へ送られ、謹慎の後に伏見宮家の一員として還俗し、後に北白川宮家を相続した。

この宮が、日清戦争で台湾へ進発し、病死されたことも、つけ加えておこう。

覚王院義観も捕われたが、官軍の取調べをうけたとき、

「わが胸中、汝らの知るところにあらず」

と一言。あとは何といわれても口をきかなかった。

後は松平美作邸へ移され、覚王院は、ここで食を絶ち、みずから死んだといわれる。

彰義隊が一日にしてほろびた後、名実共に江戸は新政府のものとなった。

この年の九月七日に、江戸は東京と改められ、翌八日に改元のことあり、慶応四年は明治元年となったのである。

動乱の詩人——西郷隆盛

西郷隆盛が、あの征韓論にやぶれ、陸軍大将の軍服をぬぎ、明治新政府から別れて、故郷の鹿児島へ引きこもったとき、

「西郷は思いきりが早すぎて困る」

と、大久保利道が嘆いたという。

数年たって、西南戦争が起った。

大久保は、みずから九州へのりこんで、西郷に会い、大事を未然にふせごうとしたが、すでに時おそく、大久保は、このときも、つくづくと慨嘆して、伊藤博文に、

「西郷は、若いとき、禅をやった為か、思いきりが早すぎて困る、実に困る」

と、また同じようなことを洩らした。

子供ときから兄弟のようにして成長した大久保と西郷である。

二人は、ともに、徳川幕府を倒した勤王運動の中心となってはたらいてきたのだし、苦楽を分けあい、互いの胸の底に深く入りこみながら動乱の時代を生きてきた。

その大久保が、いまや賊軍の将となった西郷の身の上を案じて嘆いた一言を、よく嚙みしめてみると、西郷隆盛が何となくわかってくるような気もしないではない。

禅をやったことはたしかだが、そのために思いきりがよくなった、つまり生に執着をしなくなったということもなかろう。

しかし、西郷という人は、吉之助といった若いころから、あまり死をおそれなかったことはたしかだ。

事にのぞんで、いつでも命を投げ出すことの出来る人だったらしい。

これは天性だ。いくら禅をやったからといっても、なかなかそうは行かない。

何も死をおそれぬから西郷が偉いというのではない。むしろ、感情の激発によって、そのまま、

「おれ一人、死ねばよい」

という淡泊な境地に飛びこんで行ける人間だったということだけである。

これは、すぐれた近代政治家のタイプではない。

戦国時代における英雄豪傑がもつ一つのタイプである。

だから、明治維新成るまでの、勤王佐幕入りみだれての争闘時代——つまり、豊臣徳川の戦国のころを三百年ぶりに再現してみせた幕末の動乱期には、西郷隆盛の果す役割りは、非常に大きかったといえよう。

死をおそれぬものは、自己のあらゆる慾望に淡泊である。

ために、敵からも告方からも信頼をうける。

この意味で、西郷は、新時代の姿を夢みる詩人であったともいえる。
幕府を倒し新政府をつくりあげようという理想に生き、その理想を実現するためには、命なぞ少しも惜しまぬというわけだ。
ところが、出来上った新政府は、西郷の理想から程遠いものとなった。
だから、西郷は、自分をかつぎあげた郷土の壮士達のいうままにうごき、そして死んだのである。

西郷隆盛は、文政十年（一八二七）に生れた。
いまから、わずか百三十五年ほど前のことだ。
西郷の父は、薩摩藩の小役人であり、大久保の家も同様で、れっきとした島津家七十七万石の藩士であっても、ひどい貧乏暮しの中で生きてきた。
このころ、西郷家に永らくつかえていた下女の滝というものがいて、のちに、この女が眼病にかかって城外の吉野高原に一人でくらしているのを知ると、そのころは、薩摩藩に西郷ありと天下に知られた隆盛になっていたが、ひまがあれば、
「ちょいと、滝を見舞に行ってくる」
みずから米や味噌を馬につけ、これをひいて往復五里に近い山道を昔の下女の見舞いにでかけた。

いかにも、西郷らしい人情美談であるが、こんな挿話ならいくらでもある。
明治になって、政界からも軍事からも手をひき、西郷は鹿児島へ帰り、晴耕雨読の境地に入った。このころ、牛をひいて、のんびりと山道を歩いている西郷は、何度も村の若者たちに怒鳴りつけられている。つんつるてんの木綿の着物をだらしなく、ゆったりと着て、刀もささず、破れ笠をかぶって、牛に荷物をつけた大きな男が、せまい崖道などをのろのろとやって来るのにぶつかったとすると、村の若者は、
「何しちょる。さっさと戻らんか」
大声をあげて叱りつけたものだ。すると西郷は少しもさからわず、
「こりゃ、すまぬ」
道が広くなるところまで自分から退いて、相手を先に通したという。
こんな西郷だが、上から押えつけてくる〔権力〕に対しては、後へひかなかった。
大名の中でも、薩摩藩の武士ほど、上下の区別がやかましかった藩はなかったといわれる。
西郷なぞは、下も下、小姓組という最も低い身分の家に生れたのだから〔権力〕の実体を厭でも身にこたえて知りながら成長したわけだ。
このころになると、どこの大名の家も、財政が行きづまってきているし、家来たちは俸祿半分以上も殿様からとりあげられるということが常識になっていたようである。
薩摩藩でも、五百万両という巨額の借金を背負いこみ、江戸屋敷につとめるものの給料が一年

以上も滞おって、参勤交代の旅費もととのわず、殿さまが江戸から国もとへ帰れなくなったこともあるという。

この財政危機をのりこえるため、抜擢されたのが調所笑左衛門であった。茶坊主あがりの調所は、ついに千四百石の家老とまで成りあがって行くのだが、このように、時代は身分や格式をこえた人格を何処でも必要とするようになってきたのである。

西郷が生れる前から二十二、三のころにかけて、薩摩藩はつづけざまにお家騒動をおこした。嘉永二年（一八四九）から四年にかけて、ときの藩主・斉興の二人の子をめぐって起ったお家騒動は、ついに流血の惨をくり返したあげく、ついに長男の斉彬が藩主となるのである。斉彬が英明な君主であったことに、ここではふれているひまがない。

ともあれ、西郷や大久保のような素質のすぐれた下級武士たちは、この斉彬によって世に出ることができたのだ。

斉彬の勤王運動は、西郷や大久保たちによって引きつがれたが、斉彬の死後、藩政は斉彬の異母弟の久光がにぎることになった。

久光は西郷が大きらいであった。

西郷も久光がきらいである。久光の言うことを全く無視して西郷は、勝手に倒幕運動をやるものだから、二度も島流しにあっている、第一回のときは、斉彬の没後、安政五年（一八五八）の十二月に、大島へ流された。

翌年、井伊大老が水戸浪士によって暗殺され、ここに、幕閣の政治機構は破綻の糸口をひらいた。

大島にいて、井伊討たると聞いた西郷は、

「よか、よか!!」

叫びつつ、まさに狂喜乱舞の体で、興奮さめやらず、みずからの陰毛を引きぬき、あたりにまきちらしながらよろこんだという。野性的な彼の面目が躍如としていると思う。

話が落ちるが、西郷は、人間の肉体の露出すべき個処と隠しておくべき個処の区別なぞということを余り念頭におかなかった。

明治政府の顕官となってからも、官中において、明治天皇から、

「西郷、ズボンのボタンが外れておるぞ」

何度も注意をうけた。

一つや二つのボタンではない。全部かけ忘れていて、その中から雄大な一物の一部がはみ出しているという徹底したものである。

この天真爛漫ともいうべき彼の性格と、倒幕運動に活躍をつづけていたころの彼のすさまじい謀略だの、微妙な神経を内蔵させた腹芸の大きさだのとは、まるでうらはらなものだ。そのうらはらさが、彼の人間性でもあり、すべての人間がもつ「人間性」というものである。西郷ほどの立場にある人間になると、自分の心の奥底にある、まじりけのない真実の声などというものを決

して外へもらしたりはしない。

大久保利通にしても、同様である。

西郷隆盛の〔征韓論〕は——朝鮮との戦争をひき起すことによって、もう彼の手では押えきれなくなっている下級士族の不満を外に発散させようというねらいと、陸軍大将としての彼の権威のもとに、国内の軍政的改革を実現できると信じた……なぞと、現代の学者たちは言う。

表面にあらわれた人間の行動だけで、そのように彼の内面にひそむものをはかろうとし、きめつけてしまうのが史書というものなのであろうか。そのようにも思える。

幕府がほろび、明治新政府成ったとき、西郷は依然として薩摩の西郷にとどまり、大久保は近代政治家としての歩を踏み出して行く。これは、当然のことであったかも知れない。

勤王派の勢力が一つに結集して徳川幕府を倒すためには、西郷隆盛の〔人望〕が実に大きな役割を果している。すでにのべた、薩摩藩のすさまじい謀略というのも、西郷がすべてを立案し、すべてを行なったのではない。

そんな細かいことに彼は手を出さなかった。新しい時代を迎えるために……彼は、同志たちの行う謀略や闘争の代表者として甘んじたのではないか……。

戦後——西郷の銅像だけは依然として上野の山にあるが、彼の価値は、戦前にくらべてひどく落ちた。足利尊氏のように評価が高騰した人物もいる。

それはともかく、足利尊氏は武将であり、しかもすぐれた政治家であった。

西郷は、そのどちらでもない。

西郷は、理想家である。

西郷が、岩倉具視にあてた〔政治意見書〕をよむことは、彼の人間像をいろいろな角度から浮かびあがらせてくれて興味ぶかい。

相手が、西郷の大きらいな岩倉だけに、尚更おもしろいのである。

その一条に、文のようなのがある。

一　政は正なり（中略）要路執政の人々、公平至誠をもって人に推し、一事の詐謀を用うべからず。人の意表に出で、一時の愉快を好むが如き、戒むべし。

一　世は人心歓欣して流通するを喜び、大法を設けて甚しきを制すまでにして、質素節倹等の令は、必ず下すべからず。只、要路の人々には質朴を行わせ驕奢の風あらしむ可からず。また、こんなのもある。

〔開国の道は、早く立たる事なれども、外国の盛大をうらやみ、財力をかえりみず、みだりに事を急に起しなば、終に本体を疲らし、立行くべからざるに至らん〕

その他二十一条にわたる意見書の一つ一つは、みな、もっともなことばかりである。

しかし、それがいかに現実の政治という生きものから程遠いかということは、一読、ただちにわかることだ。明治新政府は藩閥と化し、その勢力あらそいのみにくさは、すぐ先年まで、これが共に倒幕に奔命した同志たちのなすべきことであろうか……先ず、西郷は、そこに怒り、そこに嘆いた。

政治から追い出された軍人たちの与望を一身にうけて、西郷が悲劇の主人公となったのも、日を経るに従って複雑さを加えるばかりの政治機構に応じて行けなかったからだといえよう。そこへ行くと、大久保利通は、苦しさに耐え、近代政治家としての再出発に、敢然としていどみかかり、非難にもめげず、情実にもおぼれず、一歩一歩と、日本の近代化の実現に邁進して行った。

この大久保だとて、西郷が城山に死んで間もなく、そのころの政局のうごきを一身に負って暗殺されてしまっている。現代では、西郷の価値が下った割合に大久保のブームが来ないのは、ふしぎである。大久保こそは、まことに偉大な政治家であった。その偉大さを西郷は見きわめていたらしい。官を辞して鹿児島へ引退するにあたり、西郷は大久保邸を訪ね、

「おはんに、日本のことはまかせもす。たのむ」おだやかに言った。すると大久保は、

「おれにまかせられても、あとは知らん」

にべもなく突っ放した。このときの胸中を後になって大久保利通は、こう言っている。

「少し、あのときは言いすぎた。しかし、永い間、千辛万苦をして、共に力を合せ、国事をになってきたのに……西郷。おはんは、なぜ、あの無鉄砲な征韓論者を押えてはくれず、むやみに強

い事をいうて、故郷へ引込むつもりなのか……と、それがまことに情なく、心細く、ついつい西郷に八ツ当りをしてしもうた」

大久保の冷然たる胸中を、西郷は何と見たか。ただ、大久保の顔をみつめ、両眼から流れる涙をぬぐおうともせず、

「おはんな、中央に居れば大丈夫じゃ。おれは不平軍人どもを引つれて帰国し、しばらくは、おはんが内政を整理し、民力を養うのを見ていよう」

しずかに言って引下ったという。

西郷隆盛について、かぎられた枚数の中に、その人間性の如何をのべることは、とうていできない。私に言わせると、まだまだ、西郷についての新しい発見が、これからも行われるだろうと思う。

薩摩少壮軍人は、西郷を大将に押したて、東京へ上って新政府を詰問しようとした。これにかつぎ出され、鹿児島を発した西郷は、すでに死んでいたといえよう。

彼も、部下の軍人たちと同じように、大西郷が出て行けば、必ずや沿道の士族たちは軍列に加わり、東京政府も兜をぬがざるを得ないとタカをくくっていた……などという新しい史家もいるが、さてどんなものか。

そのときの西郷の胸中は、西郷のみが知っていることだ。

「この戦争によって、日本人同志が殺し合う戦争は根絶やしになろう。それから、いよいよ、日本の近代化がはじまるのだ」

西郷がそう思っていたと言えないことはない。ただ、彼は、政治家としてのおのれの力弱さをじゅうぶんに知った。

戦火が絶えた日本に、政治家として黒も白も合わせて呑むだけの素質をもっていなかったからこそ、彼は引退したのである。あれだけ権謀術数の裏も表も知りつくした勝海舟が、

「大西郷は、明治十年にあんな乱暴をやったけれども、今日に至って、西郷をうらむものは天下一人もあるまい。これは畢竟、西郷の大西郷たる所以の本領が、あきらかに世の人にみとめられているからだ」と言っている。

幕臣の勝と、官軍の西郷と、二人だけの腹芸で、江戸城を無血開城させたころを、勝海舟はなつかしんでいたろう。人間と人間の心が通じ合い、ぶつかり合って大事を左右するという時代は、すでに去っていたからである。

〔組織〕というものは、むろん、旧薩摩藩時代にもあった。しかし、いつもいつも、西郷は〔組織〕の中から飛び出してしまっている。

だからこそ、犬猿の仲だった長州藩と手をむすぶ中心人物となれたのだし、長州とむすぶことによって勤王派は大勢力のかたちを成し、幕府を倒すことが出来たのである。

熊本で官軍に破れ、ふたたび鹿児島へ戻った西郷は、薩摩と共に城山へたてこもった。

明治十年九月二十四日に、官軍は、城山の総攻撃を開始した。

この日の朝、西郷隆盛は、紺と藍の細かい堅縞の単衣を着ながし、紺の脚絆に紺足袋をはいて草鞋をつけていた。薩軍は、尚も官軍の手から西郷を逃がそうとしたのか……隠れていた洞穴を出て山道を下りはじめたのである。弾丸雨飛の中を這うようにして進むのだが、西郷は、ふっと、うしろにいる辺見十郎太をかえりみて笑い出した。

「何をお笑いなさる？」辺見が訊くと、

「まるで夜這いのごつある」

と答えた。西郷も女好きで、夜這いの経験はいくらかあったらしい。

進むうちに、辺見十郎太が、

「もう、ゆはごわんすめいか？」

と言った。ここらで最後をとげられたら如何か？　と訊いたのである。すると、西郷は、

「まだまだ、大道に出て、尋常に討死しよう」

と答えて、尚も進むうちに、銃丸を腰と太股にうけ、そこで、西郷は道にあぐらをかいて、別府晋介に向い、

「晋どん。もう此処でよかろう」

首をさしのべたという。

こう書いてくると、逃げようとして洞穴を出たのか、それとも死ぬために出て来たのか……死

ぬつもりなら何も脚絆までつけて洞穴から出て来ないでも、しずかに洞穴内で自決したらよさそうなものだと思うのだが、ここまで書いてきた西郷の言動にも、また薩軍将士たちのそれにも、まだまだ考えてみるところはあろう。ただし、資料は出つくしている。

作家としての観察が、ゆるされるだけである。西郷は、みずから刀をとって腹を切るなどということはしない。あぐらをかき、首をのべて別府の一刀が自分の首を華としてくれるのを待っているのである。これは、彼が「武士」の体面などというものから遠くはなれた存在であったことを物語ってもいる。

ここまで書いてくると、西郷隆盛という人物は、武士から出た軍人でもなし、政治家でもなし、地方の一ボスにしてはあまりにも大きすぎるし、何とも彼とも定義しがたい、ふしぎな人物に思われてくるのだ。

彼は、理想家であり詩人であることは前にものべた。書も見事だ。

西郷隆盛は、むしろ、芸術家として大成をする素質をそなえていたのではあるまいか。

明治の剣聖——山田次朗吉

特例はさておき、人間が一生をかけて悔いのない仕事を見出す、これをえらぶということは二十才前後の青年にとって至難なことというべきであろう。

また、まわりの環境（家庭環境といってもよい）が、その青年にとってめぐまれていればいるほど、志望をととのえにくいものだ。

そしてなお、当の青年が、たとえば虚弱体質などであった場合、大人の焦躁は層倍のものとなる。

山田次朗吉の場合が、それであった。

次朗吉は、千葉県君津郡、富岡下郡大鐘に出生した。文久三年（西暦一八六三）九月十一日のことである。

父の与吉は、村の名主である。

着るにも食べるにも、いささかも困らぬ、あたたかい家庭に次朗吉は生れ、育った。

生れつき癇がつよく神経もするどくて、だから学問をさせてみると、両親が瞠目（どうもく）するほどの進歩をしめした。

しかも負けずぎらいで、弟の長吉が十三、四才のころ、四斗入りの米俵をかるがると担いで父親にほめられたのを見た次朗吉が、

「おれにもやれるぞ」

いきなり庭先へ飛び出して来て米俵に手をかけ、腹のあたりまで持ちあげはしたが、どうにも後がつづかない。

米俵にふりまわされ、ひょろひょろとよろめきつつ、顔面をまっ赤にして力んでいた次朗吉も、ついに耐えかねて米俵を放り出した。

「無理なことはせんでおけ。お前はひ弱い体質なのじゃから、そんなことが出来ぬのは当り前のことだ」

父も母も、やさしくなだめようとしたが、

「私は何も口惜しがっているのではありません。十七にもなって、これほどのことが出来ぬというのはひと一人前ではないのです」

次朗吉は何度も何度も米俵へいどみかかったが、どうしても駄目だ。

ついに泡をふき、倒れてしまった。

その夜、次朗吉は四十度の高熱を発して、両親を狼狽させたという。

「お前には学問があるのじゃから、よいではないか」

いくら父親がなだめても、

「駄目です。私はもっと強壮な体の持主になりたい。どうしてもなりたい」

うわ言のように、次朗吉はいいつづけた。

虚弱な体質だけに、強い体力に対するあこがれは、まことに熾烈なものがあったらしい。

「嫁でも迎えたら、気が落ちつくかも知れぬ」

というので、明治十三年の秋に、近くの小櫃村・大村家のむすめを迎え、次朗吉と結婚させた。

ときは新郎は十八才であった。

四年後の明治十七年——。

富岡村に強兵館道場というものが建てられた。

これは、村営といってよい。

明治維新成って十七年——、西南戦争という、日本国内における日本人同志の戦乱を最後に、明治新政府の土台も磐石のものとなったし、天皇を象徴に仰いだ政府の〔富国強兵〕へのスローガンは、ふたたび〔武道〕の興隆をうながしつつあったのだ。

〔強兵館道場〕の開場に際し、東京から榊原鍵吉が招かれた。

榊原は旧幕臣であるが、直心影流の名手であり、幕末の剣聖とうたわれた男谷精一郎信友の師範役をつとめた剣客である。

榊原鍵吉については後にのべるが……。

この道場びらきにあらわれた榊原の剣技を目のあたりに見て、

（これだ!!）

山田次朗吉の脳裡へ電光のように、ひらめいたものがある。

このとき、榊原は五十五才。体軀も常人とかわらぬし、背もまがっているようだし、頭の禿げあがった風来もあがらぬ一個の老人としか見えなかったのだが、いざ竹刀をとって道場へ立つと、頭から爪先まで、ぴいんと鉄線を張ったような、すばらしい姿勢となった。

次朗吉は、先ずこの変化に目をみはったものだが、

（ふうむ……）

ついに感嘆のうめきを発したものだ。

何しろ、榊原老人は、千葉県下からあつまった強豪剣士たちを次から次へと迎えては、またたく間に打ち据え突き倒し、ついに十四名を倒して汗ひとつにじませていないのである。

この後に、榊原鍵吉は抜刀術を見せた。

これがまた、すごいものであった。

老人の手中からきらめいて空を切り裂いた白刃は、けむりのごとく鞘へ消え、消えたかと思うと、

「えい、や――」

道場の板壁が破裂するかと思うほどの、すさまじい気合いと共に、また白刃は鞘からほとばしり、一瞬の間に鞘へ吸いこまれて行く。

次朗吉は、むしろ顔面蒼白となってぽかんと口をあけ、村の人々のうしろから、榊原鍵吉の妙技に酔った。

夕方になり、酒宴がひらかれたとき、山田次朗吉は酒の入った徳利をもち、おそるおそる上座の榊原老人のそばへ行き、酌をした。

「ありがとう」

背をまるめ、にこにことして、老人は盃に酒をうける。どこかの商家の隠居のような榊原鍵吉であった。

「せ、先生……」

と、思いきって次朗吉が、

「先生は、どうして、あのようにお強いのですか!?」

と、きいた。

これには、あたりの人びとが笑いくずれたが、次朗吉も、そして榊原老人も笑わなかった。

「そうだねえ……」

榊原は、ちょいと首をかしげていたが、

「相手を撃つたびに、私は私自身を撃っている……つまり相手に勝つのじゃアなく、自分に克っている。ま、そういうことなんだねえ」

歯切れのよい江戸言葉で、こういってから、

「あんたは剣術がお好きかえ?」
「いま、今日はじめて、好きになりました」
「ほほう……」
「先生、私を門弟にしていただけませんでしょうか?」
「あんたは?」
「申しおくれました。山田次朗吉と申します」
「ほう。では、この村の名主さんの……?」
「長男です」
「ふうむ……」
じっと見てから、榊原鍵吉は、
「あんたは学問をした方がよい。剣も学問も同じことですよ」
やさしくいってくれたが、その声には次朗吉の反駁をゆるさぬ侵しがたい威厳がこもっていた。
しおしおとして引き下ったが、以来、次朗吉は、どうしてもあきらめ切れない。
筆者の知人で、戦前の大学教育をうけ、裕福な家柄に成長した男がいたが、この人、どこの会社へつとめても、
「どうも面白くない、生きている気がしない」
いつもこぼしていたことがある。

ところが、或る日、自邸へ出入りしている大工職人のカンナを、いたずら半分に手に取り、板ぎれをすーっとけずった、その瞬間に、
(これだ!!)
翻然として、生涯の仕事を見出したという。
筆者が住む小さな家も、この人が、みずからノコギリをとりカンナをふるって建てたものである。
山田次朗吉の場合も、おそらく、この大工さんと同じようなものであったといえよう。
どうしてもあきらめ切れなくなり、
(よし。男が志を立てたからには万難を排して進むべきだ)
或る夜、家人が寝しずまるのを待ち、次朗吉は裏庭へ四間梯子を持ち出し、これを榎の大木にかけ、その先端までのぼりつめた。
(ここから飛びおりて怪我をしなかったら、おれは上京して榊原先生の門へ入る。どうしても入って見せる……しかし、もしも足の一本も折ってしまったら……いさぎよく父の後をつぎ、この村の名主で一生を終えよう)
こう決めた。
そして飛び降りた。
どこにも怪我はなかった。

二日後——山田次朗吉の姿は富岡村から消えた。両親も親戚たちもおどろいて探したが、わからない。

まさか、東京の榊原道場へ行ったとは、誰も思ってもみなかったらしい。

東京・上野車坂にある榊原鍵吉の道場は長さ四間半、幅四間という小さなものである。

（これが、あの剣をとれば神のごとき榊原先生の道場なのか——）

次朗吉もおどろいた。

富岡のような田舎では、剣術道場まで建てて武道をひろめようという気運が醸成されつつあるのに、東京の空気は、まるで違う。

後進国の日本が外国文明を白黒の差別なくとりいれ、やたらめったに噛みつぶしてしまおうとしている姿は、むしろすさまじいものがあった。

いわゆる〔文明開花〕の尖端を行く〔東京〕である。帝都なのである。

剣術に金をつかうものなどいるわけがない……と、いうより、剣術を教えて暮して行くなどというよりも、新興国日本の貪欲な進歩？　に遅れぬよう、人びとは目の色を変えている。

この十数年間に、日本には汽車が走り、電信がひかれ、洋服に山高帽という姿が少しもめずらしくなくなって来ている。

東京の人々は獣肉を食べ、牛の乳をのみめまぐるしく膨脹しつつある資本主義社会の機構の中

で、狂奔しつつあった。

「東京見物においでなすったか？」

道場に、二十二才の山田次朗吉を迎え、榊原鍵吉が、

「あんたは御一新前の江戸を……いや東京を御存知あるまい」

「はい。まだ、そのころは三つか四つでした」

「なるほど。それじゃア、いまの東京の変りようにも、あまりおどろかねえですむわさ」

榊原老人は、からからと笑ったが、次朗吉の入門志望をきくと、

「およし。剣術なぞではおまんまが食えねえから——」

何度も、とめた。

しかし、次朗吉はきかない。

あまり強情なので、ついに、

「よし。それじゃア、そこにある振棒を十回も振ってごらんな」

と、いう。

見ると、そこに長さ六尺に及ぶ鉄棒があった。目方は十六貫余もあったというが、こんなものを、とても次朗吉が振りまわせるものではない。歯を喰いしばって鉄棒にかじりついたが、あぶら汗を流しつつ胸のあたりまで持ち上げるのが、やっとだ。とても米俵のごときものではない。

「さ、わかったろう。その棒を十回も振れるようでなくちゃア剣術は出来ないのだよ。お帰り、

お帰り」
「や、やります。やって見せます」
鉄棒に振りまわされ、道場の中をふらふら泳ぎながらも、次朗吉はやめようとはしない。
「では、好きにするさ」
もう夕暮れであった。
榊原鍵吉は着物を着替え、老妻に、
「いいかげんにやめさせて、飯でも食べさせてから帰しておやり」
いいおいて、どこかへ出かけてしまった。
夜になると榊原老人は近くにある講釈の寄席へ出かけて行く。講釈をききに行くのではない。老人が、この寄席を経営しているのであった。名づけて〔榊原亭〕という。
剣術だけでは食べて行けないから、こんなこともしているわけだ——というより、剣術をやりぬきたいからしているということになる。
維新後——榊原鍵吉は〔撃剣会〕というものを組織し、神田左衛門河岸に小屋がけをして観覧料をとり、剣術の興行をしたことがある。
「剣術を見世物にするとは、榊原も下落したものだ」
と、諸方の剣客たちばかりか、門人の中にも、
「武芸を売り物にしてまで、先生は糊口の助けとしたいのですか。まことに情ない」

憤激して、押しとどめようとするものが出て来た。
鍵吉は、にやりとして、
「馬鹿ァいえ」
と、いったものだ。
「いつの時代でも、剣術で飯を食おうなんてことが出来る筈はねえよ」
「え……？」
「わからないのかえ、お前らには——」
「わかりませぬ」
「よし、ではいってきかせよう。いいかな、武士はすたれても剣術の心はすたれぬ。また、すたれてはならぬものだ。剣の心は万道に通ずるからさ。しかるに、武道おとろえつつある今日、このまま打ちすてておけば、後日ふたたび隆昌の時機が到来しても、これを諸人に教えるものが打ち絶えてしまう。だから、おれはやるのだよ。多くの人に剣術の真髄を見せ、一人でも学ぶ者をふやすことは剣士の恥ではない」
「ならば金をとらずに……」
「馬鹿。日本全国をまわるのに一文なしで行けるか」
というわけで、はじめは大成功をおさめた。
ドイツ、フランス、オーストリアなどの外国人も榊原の門へ入り、イギリス領事館の書記、ト

ーマス・マクラチーなどという外国人は、四年も修行に耐え、榊原から免許をゆるされたほどだ。しかし〔撃剣会〕は芝居興行のようには行かない。ひと通りの成果をおさめると、一般の見物は飽きてはなれて行った。当然である。

「当然だよ」

と、榊原は、

「これで一通りはやったつもりだ。だいぶ諸方で剣術がさかんになってきたものな」

と、満足であった。大正、昭和の時代となっても、剣道教師に事欠かなかったのはこの榊原の〔撃剣会〕が大いに物をいっているというものもいる。

車坂の道場を本拠にして、榊原の剣術はやむことがなかったが、それにはまた次々に、何とか衣食の道を講じて行かねばならない。

だが、何をやっても〔士族の商法〕で、うまく行かない。

一時は居酒屋をやったが、榊原自身が底なしの酒のみだから、たまったものではない。妻女がびっくりして、やめさせてしまった。

現に寄席を経営していても、はねてから場内の客が、われ勝ちに木戸口へ押して出て、下足場が混雑でもしようものなら、

「さわいではいかん!!」

黒紋付に袴をつけた榊原老人が、剣術で鍛えぬいた大声をはりあげ、叱りつける。

「客人。さわぐな。いの一番から順々に出るのじゃ、わかったか」

と、これでは、はじめは面白がっていた客でも、そのうちには来なくなる。

結局、この寄席もつぶれてしまうのだが、それはもう少し後のことだ。

その夜ふけに、榊原鍵吉は道場へ帰って来て、

「や——まだ、やっていやがる」

おどろいた。

ランプの灯で、ほの暗い道場で、山田次朗吉はうめきつつ、まだ鉄棒と格闘しているのである。

「どうしても、おやめになりませんよ」

と、老妻がいうのをきいて、

「仕方がないねえ」

榊原老人はつぶやき、

「お若いの——鉄棒は、もうやめなさい。よし、よし入門をゆるすよ」

と、声をかけた。

「ま、まだ一度も、振れません」

泣くようにいって、次朗吉がへたへたと尻もちをつくのへ、

「だから振れるようになるのさ。わしも小さいころは病弱でねえ。それでも何だ、根岸から麻布まで、一日として欠かすことなく男谷先生の道場へ通ったものさ。強い男になりたくてねえ……」

にやりとして、老人は古ぼけた紋付羽織をぬぎ捨てると、次朗吉のそばへ来て、
「いいかえ。見ておいでよ」
かるがると十六貫の鉄棒をつかみ、これを振りはじめた。
榊原夫人は、毎日の日課で見なれているからおどろかないが、次朗吉は、まさに仰天した。
榊原老人は、五十数回も鉄棒を振ってみせてから、
「しっかりおやり。だが道は遠いよ」
と、息もはずませずにいった。

榊原道場の剣術は、真心影流の正統をつたえたものである。流行の〔剣道〕とやらいうものとはわけが違っていた。
やたらに派手な気合を発し、撃ちこんだ形がよいとか、受け流したさまがよいというのではない。防具をつけ、竹の刀でたたき合うことを前提にした剣術ではないのである。
防具をつけ竹刀で立合ってはいても、打ちこむ一撃に必殺の気魄をこめ、その一撃に〔捨身〕をかける。そうして稽古をつみ重ねて行くというすさまじいものであった。
だから、道場へ来る人々も、この猛稽古に耐え、直心影の流儀を守りぬこうという連中ばかりだから、山田次朗吉のような細い体の持主が、これに追いつき、この中にまじって練磨して行くということは大ていなことでない。

すごすごと郷里へ帰るか、または死身になってやりぬくかの、どちらかである。
次朗吉は後者であった。
例の鉄の振棒ともう一つ別に赤樫でつくった六尺の振棒があった。この方は目方も三貫目だし、(やってやれぬことはない)
はじめは、ひたすら、この振棒へかじりつき、まず体力をつくることにした。
夜も昼もない。次朗吉はひまさえあれば振棒に取組んだ。振棒の目方というものは、この末端を持ちあげると約四倍ほどになるという。これを十回、二十回と振りつづけるためには全身の力をしぼりつくし、精魂を集中し切らぬかぎり、次朗吉などでは、とてもやれたものではない。
一年たった。
「ほほう、やるねえ」
榊原老人が次朗吉が棒を振っているのを見てつぶやき、
「見違えるほどの体になったものだ。もういいだろう」
道場へ出て稽古するのを許してくれた。
このころの次朗吉は一日二千回も振棒をふっても疲れをおぼえなくなっていたのである。
しかも、これだけの修行をして、次朗吉は病気一つしなかった。
剣術に対する執念は、よほどのものであったと見える。
二年たち三年たつと、背丈はともかく、胸幅も堂々とし、筋骨に至っては、

「これが次朗吉か……」

三年ぶりに帰郷した次朗吉を見て、両親が目を白黒させたという。さびしく留守をまもっていた妻も子も、むろんおどろいた。

このころになると、道場でも山田次朗吉に敵するものはいなくなってしまったらしい。

いまや、次朗吉は榊原道場の代稽古である。

妻子も東京へよびよせ、道場の近くへ一戸をかまえ、ここから次朗吉は毎日、道場へ通った。

不足の生活費は父が送ってくれるし、修行といっても好きなことをやっているのだから（いい身分）だといえないことはない。

しかも、榊原道場の山田次朗吉といえば、東京の剣道界に知らぬものはないという存在にもなった。

榊原先生と立合っても、三本に一本はとるし、苦しくもなくなってきた。

（おれは強い）

自信が、わき上ってきたのも当然だが、自信と慢心の差は紙一重である。

反省のない自信は、たちまちに慢心とかわってしまう。

まだ若いし、次朗吉も、ひくひく鼻をうごめかしはじめたものだ。

その日は、ひどい雨の日で、数人の門弟たちが帰ったあと、次朗吉が、ひとりで棒振をつかっていると、

「山田さん、どうだね。久しぶりで一本やろうか」

奥から榊原先生が出て来て、にやにやという。

先生は、もう六十だ。このところ稽古は次朗にまかせ放しだし、だから次朗吉とは半年近くも立合っていない。

（先生もお年だし、私に負けるのがお厭なんだろうよ）

と、次朗吉は考えて少しもふしぎには思わなかった。

「はあ。お願いいたします」

この半年の間に、おれはまたまた強くなっている。そこのところをよく見ていただこう、というつもりで、元気一杯、次朗吉は竹刀をとって先生と向い合った。

例によって榊原先生は大上段だ。先生の面撃ちのすさまじさは次朗吉もよくわきまえているが、いまではそれほど、こわくないと思っている。

間合いがヂリヂリとせまって、二人がつめ合った瞬間、

「えい!!」

電光のごとき一撃をくらって、次朗吉は引っくり返っていた。

（こ、こんな筈ではない……）

思ったが、しかし負けは負けだ。

「また雨ふりの日にやろうかねえ」

茫然たる次朗吉にこういいのこし、榊原先生は、さっさと奥へ入ってしまった。

（くそ――今度は負けるものか）

次朗吉、雨を待つことしきりである。

次の雨の日――。

「やるかえ」

と、先生が出て来た。

またやった。いけない。こちらから攻撃をかける瞬間をねらって先生の剣が飛んでくる。そのすごさというものは、

「まるで雷に打たれたようなものであった」

と、後年に次朗吉が語っている。

防具の上から叩かれて次朗吉ほどのものが打ち倒されてしまうのだから、いかにその打ちこみが激烈なものか知れる。

三度目の雨の日――。

この日は、小手を打たれた上、引きずりおこされ、腰車にかけて投げつけられてしまった。

「また雨ふりにやろうなあ」

にやりという榊原先生の顔を見ることも出来ない次朗吉であった。

（おれは慢心していた……）

はっきりと、わかった。

以来、山田次朗吉の修行は本格的なものになる。敵に勝つのではなく、おのれに克つという剣の極意を、それまでは知っていたつもりで知らなかったのだ。

（いま、はじめてわかった）

慢心をいましめてくれた先生の剛剣の前に、次朗吉は、ひれ伏したい思いであった。

次朗吉は、それから十六貫の鉄棒にいどみはじめた。

はじめ、この棒を十回ふったとき、失神したともいわれているが、二年たつうちに、自由自在に振りまわせるようになった。

ときの〔皇国武術英名録〕にいわく。

〔榊原鍵吉門下に山田次朗吉あり。膂力強大にして其比を見ず〕

明治二十六年の冬のことである。

次朗吉は榊原先生の供をして、陸軍戸山学校へ剣術の指導に出かけた。

その帰途、二人とも下駄ばきで、雪の道をやって来て、九段坂上へかかったとき、榊原先生のはいていた下駄の鼻緒がプツリと切れた。

「あ……」

うめいて、榊原がよろめいた。その一瞬に、

「先生――」

次朗吉の片手は老師の体をささえ、もう一つの片手は、おのれの下駄をぬぎ、これを老師の足もとにそろえていたものである。

「おう……」

こういったきり、老先生は、次朗吉の顔をながめ、絶句した。

まさに間髪を入れぬ次朗吉の処置である。

ふる雪の中に、まじまじと愛弟子の顔を見つめている榊原鍵吉の老顔に、見る見る涙があふれて来た。

「山田さん……出来たねえ」

つまり「極意に達したねえ」と、いったわけである。

「ありがとう。拝借するよ」

しずかに、老先生は次朗吉の下駄をはいた。

翌明治二十七年一月元旦に、榊原鍵吉は門弟一同を道場へあつめ、

「この榊原鍵吉。亡き恩師、男谷信友先生より直心影流免許皆伝の目録を永い間おあずかりしていたが、このたび神宜によって、山田次朗吉にこれをつたえる」

と発表し次朗吉をまねいて、

「つつしんでおうけせよ」

おごそかにいった。

思いもかけぬことだけに、ことわる余裕もなく、次朗吉はこれをうけた。

こうして、山田次朗吉は、真心影流第十五代を継承し、伝書九巻をゆずられたのである。

この年には、日清戦争がおこった。

日本が大勝をはくしたわけだが、同年九月十一日に、榊原鍵吉は世を去った。

心臓脚気だといわれている。

鍵吉の法名を〔義光院殿釈杖山倭翁居士〕という。

これと前後し、次朗吉は父を失った。母も少し前に病歿している。

次朗吉は帰郷し、すべての財産を整理し、東京へ永住する決意をかためた。

直心影の正統を世につたえのこす使命を彼は背負っていたからである。

亡師の道場は亡師の家でもある。

亡師未亡人も住んでおられることだし、次朗吉は近くへ別に道場をかまえることにした。

出来上った道場は長さ三間半、幅三間ほどの小さなもので、これに四畳と四畳半の部屋がついている。これが次朗吉の質素きわまる道場でもあり居宅でもあった。

むろん、門弟の月謝だけでは道場を維持して行くことはむずかしいし、先代ゆずりの猛稽古をくずさぬやり方だから、よほどの物好きでなくてはつづく筈がない。門弟の数も少なかった。

しかし、いずれもえらびぬかれた人々ばかりで、

「私は剣道で食べて行くつもりはない」
と、常々、次朗吉はもらしている。
若いころから、次朗吉も剣術修行のかたわらに、いろいろな職にもついてきていた。
巡査になったこともある。
ところが、官服が次朗吉の体に合わない。
胸も腕もふとくあつくて、どんな寸法のものを持ってきても間に合わなかったという話がある。
あの虚弱な彼が、これほどの体格になったということだけでも、彼の修行のすさまじさが、いかに短期間に実ったかを知ることが出来よう。
巡査のほかに、医学を勉強し、人体の解剖にも通じたし、焼芋屋もやったそうである。
煙草屋もやった。
〔明治膏・煩悶膏〕というねり薬をみずからこしらえ、官許をうけて発売したこともある。この薬は火傷などによく効いたそうだ。
学問につても、たゆむことなく勉励した。
そして剣術をやる。
「何、好きだからやれたのさ」
こともなげにいったが、剣術をやるためのアルバイトが、次朗吉の場合、みな剣の道に通じ役立つのである。

老人になってから、次朗吉は、
「私は、やろうと思えばお金儲けもやれたね。存外、これで器用なところもあるし、ぬけ目のないところもあったのだ。だが、そのようなことになったら、剣道をやっているようなよろこびを得ることはできなかったろう」
と、述懐している。
次朗吉の剣は、天地自然の中に生きているという境地にまで達した。
こんな話がある。
大正十二年の関東大震災を、四年前の大正八年に、次朗吉は予言しているのだ。
大西英隆氏著〔山田次朗吉〕伝によれば、この予言は〔新時代〕という雑誌に発表されたそうである。
〔新時代〕第三巻第一号に、剣客・山田一徳斎として紹介された記事の中に、左のごときものがある。
——かかる時弊を起脱して高く自らを守り、真に古剣道の妙諦を体得せる人に、山田一徳斎なる気骨がある。彼は今、上野御徒町に住み、わずかに高商と府立第三中学とに剣道の指南役を受け持つに止まり、決して売名を計らず、名門に媚び富豪に阿る市井の諸剣客の道をあえて踏まないが、彼の起俗の気宇気慨は、すでに多くの帰伏者を持っている。
——彼は神秘を信ずる。大正七年の世界的流行感冒は、彼がその春、夙に予言したことである。

彼はさらに食塩の欠乏をも予言したが、これも既に現実となりてあらわれている……。

さらに〔新時代〕の記者は「序に此処に、最近、彼の吐いた予言の一つを後の世のために記しておこう」とのべ、次のごとき次朗吉の言葉を記している。

「大正十三年ごろまでに、この帝都に一大天付がおこる。おそらく大地震かと思う。市民の七、八万人は死滅するかも知れぬ」

ここまで来ると剣の道もすばらしい。

剣の修行による「感」のはたらきが〔神〕に近いものになって行くわけだ。

次朗吉は、こんなこともいっている。

「まことにおのれを捨てることが出来ると鉄砲の弾も当るものではない。私はここ（東京市中）にいて、太平洋の波の音をきくことが出来ます」

また、こんなこともある。

或る日、若きころの大西英隆氏が矢部某と、山田次朗吉をたずね、用談をすまして帰ろうとすると、次朗吉が、

「まあ、お待ちなさい」

と、いう。

「何か……？」

「いやね。もう十分か十五分すると、上杉辰三君が来るから、お待ちになって久しぶりで語り合

おうじゃありませんか」

「先生。今日は上杉君とお約束でも？」

「いや何も約束なんかしてはおりませんがどうもその、三十分位前に、上杉君が阿佐ケ谷の自宅を出て私のところへ向いつつあるような気がするものですから——」

二人とも呆気にられているうち、当の上杉辰三が、山田宅へあらわれたというのである。

老齢に達したとき、山田次朗吉の剣は、ついにここまで昇華された。

偉大というべきであろう。

まだ、おどろくべき事実がある。

これは大正四年ごろのことだというから、山田次朗吉も五十四、五才になっている。

当時、次朗吉は東京府立第三中学校の〔剣道部師範〕をつとめていた。

前にも東大剣道部の師範をしていた次朗吉には、この学校で教えた門下にすぐれた人材が非常に多く輩出している。

さて——。

この年の夏に、ペストが流行した。

「ペストの黴菌は足の爪先からも入るそうだ」

というので、府立三中の剣道稽古の時間には、講堂にもうけられた〔道場〕の板敷きへ、昇汞（しょうこう）

水をまき、消毒を行なうことにしていた。

昇汞水は、塩化第二水銀の水溶液である。無色透明のこの液体がどんなものであるか、ここに書くまでもあるまい。

何しろペスト菌の消毒に用いようという劇薬である。

その日——。

例のごとく体操主任の教員が、百倍にうすめた昇汞水で道場を消毒し、次いで第二回分の消毒液を用意し、これを道場の入口に準備しておいた。

山田次朗吉は、この日、自宅を訪問した旧知の軍人某との話がはずみ、近くの仕出し屋から取り寄せた箱弁当を食べ、少々酒をのんだという。

するうちに、学校へ行く時間が来た。

「学校へ着くころには、さめるでしょうが……それにしても少し飲みすぎたようです」

こういって、次朗吉は軍人と共に自宅を出た。

軍人某と別れ、学校へ着いたのが午後二時である。

(いかんな、酒がさめておらん)

さいわいに酒が顔へ出ない次朗吉だったし、教課の時間をのばすわけには行かない。

そのまま防具をつけて、道場へ出た。

むろん、これほどの飲酒で次朗吉の稽古ぶりが乱れるわけではない。

いつもの通り、たっぷり一時間、生徒たちに稽古をつけて防具をとると、しきりに喉がかわく。

酔ざめのかわきであることはいうまでもない。

いつもなら、稽古終了直後に水をのむことなど決してしない次朗吉なのだが、この日はさすがに、こらえ切れなくなり、一人で道場を出て、水道のあるところへ行きかけると、そこで、生徒の一人が、水の入ったバケツをどこかへ持ちはこびかけているのを見た。

「君。水かね?」

と、次朗吉が問うと、

「そうです。いま片づけるところです」

生徒がいう。

「もらおうかね」

「はい」

生徒は、バケツに入っていた柄杓に水をくんで、

「どうぞ」

差し出した。

うけとって、次朗吉は一気にのんだ。

(や……?)

何となく舌がしびれるような、苦い味の水だと思いはしたが、すでにのんでしまっている。

別に気にもせず道場へ戻ろうとすると、
「先生！」
あわてて、道場の向うから駈けつけて来た体操教員が、
「こ、この水をおのみになりましたな？」
まっ青になった。
「ええ、のみました」
「こりゃ大変だ!!」
「何です？」
「昇汞水です」
教員はバケツを持ったままふるえている生徒に、
「君は、何でまたこれを先生に……」
「知りませんでした。ただの水だと思って……」
もうどうにもならない。
「先生。すぐ医者を……」
大さわぎになった。
「いや、結構です」
と、山田次朗吉は厳然としてこれを押しとどめ、

「もとはといえば私の不覚からこうなった。そもそも飲酒の後に神聖なる道場へ出たのが間違いだったのだ。しかし……しかし有難いことです。ふだんは飲もうと思っても飲めぬものをのんでしまったのだから……」
「じょ、冗談ではありません。お命にかかわります」
「いや大丈夫。これは神が私に剣道修行をさせてくれているのです。有難いことだ」
「とにかく吐いて下さい、卵をもって来ます」
「いやよろしい。口は物を容れる役目を果す。物を出すは順当でありません」
「しかし、先生……」
まわりを取りかこんだ生徒の中には泣出すものもいた。
「平気です。とにかく、のんだ昇汞水をうすめましょう」
こういって次朗吉は本当の水を持ってこさせ、これをガブとのみつづけ、
「すまないが諸君。もう少し私の相手をしてくれんかね」
道場へ出て、また稽古をはじめた。
さすがに、嘔吐をもよおしてくるし、腹も煮えくり返るような苦痛に襲われたが、次朗吉は数人の生徒を相手に、びっしょり汗をかいてから、自宅へもどった。
校長も教員も生徒たちも、自宅へあつまって何とか医者をよぼうとするが、きき入れない。
この夜——。

下腹部の激痛には、さすがの次朗吉もたまりかね、寝るもすわるも出来ないほどなので、天井へ帯をぶら下げ、これへあごをかけて体を支え、夜を明かしたという。

翌朝になると、肛門がただれ、腐れ柿の実のようにふくらんで来た。

これを六尺の下帯でしめつけておいて、この日も自分の道場へ出て、ふだんとかわらぬ猛稽古をやったものだ。

一説には、学校の依頼で医者が来たというが、次朗吉は相手にしなかったという。

のちにいわく、

「私は医学もやったし解剖学もやった。整骨術も修めているし薬学も一通りはやった。別に無茶をして医者をこばんだのではなく、本当に自分の体力をもって、この苦痛を乗り切る自信があったからだ」

とにかく、おどろくべきことである。

それよりも、次朗吉は、

「飲酒して道場へ出た自分の不徳を、つくづくと恥じるのみです」

と、いったそうだ。

自分のすぐれた体力と精神力への自信が慢心になっていない。そこに彼の反省があるからである。

この後、飲酒のことについては一層自戒することがあったが、それだからといって酒を絶ったわけではないのである。

ここに、山田次朗吉の剣道についての本義にふれた言葉をのべておきたい。

次のごとくである。

剣道は、外形の技術と、内面の精神との二つに別れ、この二つが渾然と溶け合うところに本義がある。

といえども、私は外形よりも内面を尊びたい。

この内面——つまり精神力というものは〔無形〕のものをきわめて行くもので人の目に見え、耳にきこえ、尺度や桝目ではかることの出来ぬものであるから外形をまなぶよりも道はけわしいのである。しかし、この内面的成熟をきわめぬと、剣道は魂のない木像のような〔死物〕となってしまう。

剣道は、まず我ままの心を捨て虚明な心を養うことをもって不動の目的とする。

不動心というのは、いかなる狂瀾怒濤が身に迫ろうとも大磐石のごとく動揺しない、このことである。

剣道は、剣をとる時にのみ存在するものではない。社会、日常の百般において存在するものだ。

それでなくては、この道をきわめることにならない。

剣は太刀——すなわち断つ、という言葉に充てた文字であって善悪を裁断することである。世

に十悪という。すなわち、我慢、我心、貪慾、瞋恚、危殆、嫌疑、迷惑、侮慢、慢心をいい、この悪心を切断すれば、人間本来の〔清明心〕に帰するものである。

剣も禅も、各種信仰もつまりは同じ高嶺の月をのぞむわけであるが、剣道は生死に直面し、一瞬の間に生きるか死ぬかが岐れる。まことに真剣な修行で邪心が入りこむ隙がないといえる。

明治、大正、昭和と時代がうつるにつれ、日本の剣道界も、高野佐三郎、中山博道をはじめとして名人といわれる剣士も輩出し、その組織も発展したわけであるが、山田次朗吉は、こうした、いわゆる〔剣道界〕には無関係のようであった。

別に世をすねていたのではない。

「剣の道をきわめ、これをひろめるためには、いろいろの方法があってよい。私は大きな組織の中でそれを行うよりも、ひとりで好きにやったほうが性に合うからですよ」

次朗吉は、こういっていた。

そして中年から剣道に関する資料をあつめ出し、自分の研究を著述することに没頭しはじめた。

山田次朗吉著〔日本剣道史〕は、不滅の名著であるといえよう。

この中で、次朗吉が、恩師・榊原鍵吉についてふれた章は、ことに味わいふかい。

と、いうのは……

こうした場合——ことに次朗吉と榊原のように親密な師弟関係を生じた場合には、師を語ることによって弟子自身が〔自分〕を語ることになりがちなものである。

次朗吉は、この章において、

——榊原は寛量で人に厚く、門下生に親切であったため、大凡そ仕立てあげた者は千余に上る。

と、こう記している。

千余人の門弟の中へ、自分を没してしまっている。

私は、榊原先生にこんな恩をうけたとか、猛烈な修行をしたとか、直心影流十五代の正統をゆずりうけたとか……ただの一句も洩らしてはいない。

当然だが、なかなかに出来ないことである。

これは、山田次朗吉の次の言葉によっても、あきらかである。

「師と弟子の関係というものは、なかなかにむずかしい。本来なれば、一人一人を別にまねいて教えることがよいのだが、……師匠は一人、弟子は多勢ということになれば、そうも行かない。師匠の方では別に〔えこひいき〕をするわけではないのだが、弟子の方では、ともすると、自分は特に先生から愛されている。特別の知遇をうけている、と思いがちなものである。これは一門に波瀾をおよぼすもとといとなる。師というものは、おのれ一人のものではない。上から下まで、その伎倆に差はあれど、門弟すべての師でなくてはならない。

だが、このことは師ひとりでは始末がつかぬもので、門人たちがみな互いに、このことを注意し、一門和気あいあいとして修行にはげむ環境をつくるべきである」

著述に専念するため、山田次朗吉は東大師範を辞し、車坂の道場をとざし、下谷御徒町へ引き移った。大正初年のころであろう。

〔日本剣道史〕は大正十一年十月に初版が発行され、昭和十八年までに八版をかさねた。

そして戦後、また新たに出版されている。

永くなるからこの上の引用はさけたいが、この書物の〔通論〕において、山田次朗吉が剣の修行をもって人生の仁義道徳をまなぶというテーマを打ち出した文章は、まことに古今の名文といえよう。

読むたびに、この著者の人柄をしのび、筆者は感動を新たにしている。

山田次朗吉が、府立三中のほかに、東京高等商業の剣道師範をつとめていたことは、すでにのべたが、この学校の一ツ橋道場が改築拡張せられたのは大正六年二月のことであった。

この開道式には、師範たる山田次朗吉が、直心影流小太刀の〔型〕を見せることになっている。すでに、真剣をもって小太刀の型をつかうことは禁じられているから、刃びきの刀でやるわけだ。

ところが開場に先立つ十日前に、次朗吉が府立三中の教諭・柳広哲(ひろてつ)を訪問した。

柳は、府立三中で親しく次朗吉の薫陶(くんとう)をうけた剣士であった。

このとき五十五才の次朗吉が、

「柳さん、今度の型の相手を、ぜひ、あんたにやっていただきたい。お気の毒ながら真剣で……」

と、いい出した。さすがに、柳も声が出ない。

〔型〕をつかうということは、たとえ木刀をもってしても骨が折れるものだ。芝居や映画で立廻りの型を見せるのとは違う。

ことに直心影流の小太刀は、短い刀で長い刀に対する〔勇気〕を発揚するものであるから、きわめて激烈な闘志をもって相手の剣に相対するわけであった。

〔風勢〕とか〔水勢〕。または切返し、鍔取りなどの型の基本は立合う両者もむろんわきまえていることだが、どちらかに、いささかの気のゆるみがあれば、とんでもないことになる。

撃つときは真に撃ち、切るときは真に切るのであるから、これをうけとめ、これをさけるという型の基本が真剣勝負と同じように行われなくては完璧の〔型〕を演じたことにならない。まして、真剣ともなれば決死の覚悟がいるわけであった。

柳広哲は熟考のすえ、これを引きうけた。

「ありがとう」

と、次朗吉は頭をたれ、

「わが国の文明が栄えるにつれ、剣道界も大がかりな機構をもつようになったし、立派な道場も次々にひらかれる。こうなると、いきおい、剣の本義は忘れられて外形にのみとらわれるようになりやすい。だからこの際、私とあんたで真に命をかけた型の奉納をやって見せたいのです」

こういった。

「先生のお手に切られるなら、死すとも本望であります」と、柳も答える。

これから二人は、東京の刀剣屋をまわり歩き、当日使用する刀剣をえらぶのに三日間を要したという。

それから両人は一週間の絶食をして、下稽古を何度も行った。

当日の〔型〕のすさまじさは永く剣道界の語り草になったというが……。

仕合を終えたのち、山田次朗吉は消毒した針をもって鏡に向い、自分のひたいにめりこんだ刃の細片を一つ一つほじり出したという。両人の太刀が打合い鉄火をほとばしらせるとき、刃の細片が飛んで次朗吉のひたいへ刺さったのだ。

ありきたりの〔型〕をつかったのではない。

会場にいた子爵・渋沢栄一が、後になって

「あのように激烈なる型を学生に行わしめては、まことに危険である」

といったそうだが、次朗吉は、

「やらせようといっても出来るわけがないではないか。私はただ、真の剣の本義というものがどのようなものかを知らしめただけだ。人が正道を歩ゆむとき、神は必ず我を助ける、ということを目のあたりに見せたかったのだ。それが渋沢さんにわかってもらえなかったのかね」

皮肉ではなく、むしろ、さびしげにもらしたという。

門人の堀越創という人の思い出話に、こんなのがある。

それは、たぶん大正九年の正月だったと思うが、元日に年始の御挨拶に伺うと、先生が、

「ある人が、おめでとうというから何のおめでたいことがあるものか。いまに東京の市民が多勢死んでしまうのだ、と、こういってやりましたよ」

と、いわれた。どうしてそんなことをいわれたかわからないので、

「先生は易でもなさいましたか？」

と問うと、先生は、

「剣下に易などをやっていては間に合わないではないかね。ねずみさえ、火事の起る前には家からいなくなってしまうのに、人間がその位の予測が出来ない筈はないのですよ」

といわれ、大地震のときの注意をいろいろ話して下された。しかしその後間もなく、私は渡米してニューヨークで暮していたので、地震のことをすっかり忘れていたのだが、大正十二年九月一日——あの関東大震災を知り、さては、これであったか——と感銘した次第である。

とある。前にのべたことと重複するが、山田次朗吉の剣というものがここまで到達していたということを重ねていいたいのだ。

こうなると、人間という生きものへの〔尊厳〕を、いやでも感ぜずにはいられない。

とにかく、すばらしい〔感〕の力をそなえていたことはたしかで、来客が、前に出されている鉢の中の菓子をいただこうかな、と思ったとたんに、次朗吉が菓子をとってくれる、などということは数え切れなかったらしい。

眼の力を養うためには、太陽をにらみつけることを三日も四日もつづける。

または自分の頭を柱にぶつけて、痛くなくなるまで何日もやる。

こんなこともある。

「稽古をしていて、相手の木刀や竹刀が頭に当ったとき痛いと感ずるようでは真の稽古が出来ない」

というのだ。だから次朗吉の頭部は異様に発達していたという。

学校の師範をしているころ、学生たちが隠れて猥本・猥画のたぐいを見てよろこんでいるのを知ると、

「そういうものを見ても心が動揺するようでは駄目です」

という。叱られるのかと思っていると、

「もっと、どんどんごらんなさい。飽きるほど見て、猥本なぞは卒業してしまわにゃいけませんよ」

にこにことして次朗吉は、学生たちにいったそうだ。

好きな書物を古本屋であさるときなど、希望のものが手に入りでもすれば、

「こんない本が、それでは安すぎる」

というので、余計に金をおいて来たことが何度もあるらしい。

こんな話をきいたら、現代の若者たちはふき出してしまうだろうが、山田次朗吉にとっては一から十まで理にかなったことなのである。

ともかく、次朗吉の後に、次朗吉ほどの偉大な剣士は出てないように思う。

これからも出ない。

現代は、彼がやってきたような修行の道程が生まれる余地がないからだ。

人間の感覚は、日に日に鈍重となり、現代文明がもたらす生活様式は、人間本来の機能をうばいつつある。

栄養がよくなって体格は大きくなったというが、これこそ、次朗吉のいう外形のみが発達したまでのことで、肝心の内面は痩せ細るばかりだ。しかし、次朗吉は、

「自分は単衣一枚で冬が越せても、やはり人なみに袷衣を着ることが必要である」

と、口ぐせのようにいった。

修行は自分だけがやるものであり、他人に押しつけるものではないのだから、人前では〔人なみ〕にふるまうべきだというのが信条であった。

山田次朗吉は、榊原鍵吉という師を得て、剣道一筋に、おのれの生命を燃焼しつづけ、人か神かわからぬところまで到達をした。

ここで〔神〕というのは〔自然の摂理〕をさす。

人間という生きものを生み出した自然界へ入りこむことが出来たわけだから、

「私は毎日毎日、非常な歓喜をもって送り迎えています」

という次朗吉の言葉も当然なのであろう。

こうなると、自分の体も心も自由自在になるのだから、迷いも苦悩も怒りも全くない、いわゆる〔明鏡止水〕そのものの常住坐臥だ。

晩年の次朗吉は防具をつけ、竹刀をとっての稽古はやらなかった。

しかし、木刀をとっての〔法定〕や小太刀、刃挽きの型については門人たちに稽古をつけた。

門人たちの言葉によると、

「平素は温顔あふるるばかりの先生が、木刀をとって道場へ立たれると、豪快壮絶、鬼気せまるばかりで、観ているものも、慄然として膚えに粟を生じた」

とある。

或る人が、このことを次朗吉にいうと、

「そうですか。そんな顔になっていますかねえ。だが、そりゃ相手に向けて、そんな恐ろしい顔をしているのじゃァない」

「え?」

「相手の剣、相手の顔に映る私自身に対して、そんな顔つきをするのでしょうよ」

「ははあ……」

「剣道ばかりじゃない。たとえば人と人が、こうして向い合っているときでも、人は相手に自分を観ながら話しているのでねえ。まあ、無意識のうちにだが……」

と、次朗吉は微笑し、

「たとえば、相手と話していて、こいつ厭なやつだとか、いい奴だとか、嬉しいとか、憎らしいとか、こういう感じをうけましょう?」

「はい」

「それはつまり、自分のいやなところ、憎らしいところ、嬉しい気持が相手に映っているんですよ」

「そういうものですかな」

「そういうものですねえ」

山田次朗吉は、昭和五年一月九日に永眠した。享年六十八才である。

二度目の脳溢血（一度目は医薬の手を借りずに回復）の発作によるものであった。

歿する一日前の一月八日に、次朗吉は愛弟子の大西英隆宅を訪問し、集まった他の門人たちと談話をかわしているうち、発作を起したのである。

翌九日——。呼吸が絶えると同時に、次朗吉はぐいと頭を上げ、まっ白な啖を胸に当てがった

綿の上へ吐き出し、そのままうごかなくなった。

まっ白な唆を吐いた——という一事が、まことに、この剣聖の最後にふさわしい。立派で神々しい感がするではないか。

ゆまにて出版刊行の辞

全地球の危機が語られている今、日本もまた、その危機感の流れの中に惑い、指導理念を喪失し、歴史ある文化・哲学を忘却し、道徳も、また見失っています。そして一時の高度成長に酔って、ぜいたくという惰性の中で生活している現状です。そのあげく、人間にとっての善悪の判断まで難しくなってきているようです。かつて私たちの祖先は自然を尊び、信仰・文化・芸術のなかにきびしさによる歓びを見出し、美と伝統と精神の追求にたゆみなく勉めて居りました。

ゆまにて出版は、激しく速い現代社会の潮流の中で、ともすれば物質文明の枠に喘いで、生きる歓びと、人間の心の原点を見失いつつある若い世代の人びとに、心豊かに成長し、魅力ある人間像を創造するため、その心の糧となるべき素材を提供しようとするものです。

一冊の本の真の価値は作者や出版社の名に、いささかも関わるものではありません。また読者の心に何を訴え、何を残したかによってのみ評価されるべきです。

ゆまにて出版で刊行された本が読者自身の精神と歴史の書となることを念願してやみません。

常泉隆介

動乱の男たち　　定価はカバーに表示してあります。

1977年2月20日　初版発行
1977年3月1日　再版発行

著　者　池波正太郎
発行者　常泉隆介
発行所　株式会社ゆまにて

東京都千代田区平河町1—4—12中政連ビル　〒102
電話 03(267) 3081 (代表) 振替 東京 1-115812
印刷　誠之印刷株式会社
製本　大口製本印刷株式会社

© 1977 Shotaro Ikenami, Printed in Japan
落丁乱丁本は，お取り替えいたします 0095-00138-8638

ゆまにて選書・好評発売中

舌鼓ところどころ
吉田 健一
美味礼賛―味を追求することは、人生を探求することと似かよっている。古今東西・春夏秋冬に人の味覚を鋭く洒落た目で描いた味の風土記と哲学。
一〇〇〇円

印象の時時
串田 孫一
自然と旅と音楽と―時に埋れた日常の、ともすれば乾き果てん地図の上に、かくも美しオアシスの数々を発見する著者の目はいよいよ澄みきり渡る。
一〇〇〇円

私の食物誌
池田弥三郎
暮しと味と人物と―歴史に生き、今もなお日々の暮しを彩る様々な味のすがたと言事を、その周辺の人々の思い出と共に語る風格ある味の歳時記。
一〇〇〇円

飲み食いのこと
高橋 義孝
台所から旅先まで、舌の記憶をたどりつつ酒と食べ物の忘れられぬ美味を追い求め、様々な人との交流の中に、飲み食いの真髄を語るわが飲食考。
一〇〇〇円

酒・旅・相撲
和歌森太郎
浮世の内外――故郷・酒・旅・相撲など、歴史家の周辺の回想と、古今東西の日本文化との対話の中に、日本人の足跡と生き方を訪ね歩いた随筆集。
一〇〇〇円